

第2地点

第2地点は擾乱を受けているために、土器の出土量が少ない。第73図：1～9の土器が出土量である。1～3は宇宿上層式、4は弥生式土の破片である。4はきわめて焼成が良く、器面は磨かれている。6は丸底、7～9は平底である。第2地点も宇宿下層式の時期から遺跡は成立していたものと思われる。

第3地点

A トレンチ

(第40図：18・19、第73図：10～51)

第1地点と同様の様相を示している。第40図：18・19は面縄東周式である。第73図：10は面縄東周式、11～13は線刻文土器である。13の土器は砂粒を混じ焼成良好で、滑石を含む、土器の質から見て繩文と考えられる。14は凹線文土器、18は嘉德Ⅱ式土器、19・20・25～27は面縄西周式土器、28～40は宇宿上層式a、41はやや上げ底をなす底部である。

42～49は弥生式土器である。いずれも胎土に砂粒を混じ、焼成は良好である。42・47は同一個体とみられ、紅褐色を呈し、ナデ仕上げで、断面台形の凸帯を1条めぐらす壺形土器である。43・46は断面三角形の凸帯貼り付け、46は割目を施している。壺形土器の破片であろう。44・45は断面三角形の凸帯をめぐらす壺形土器破片である。49は細い線で弧形の文様を描いた壺形土器の破片であろう。以上の土器は後期に該当するものと考えられる。48は胎土に砂を含むもので、焼成は普通である。頸部に低い三角の凸帯をめぐらし、口縁部は外反する器形で、壺形土器の破片である。火熱によって焼け、内外面に気泡のような小窓がみられる。弥生時代前期に属するものであろう。

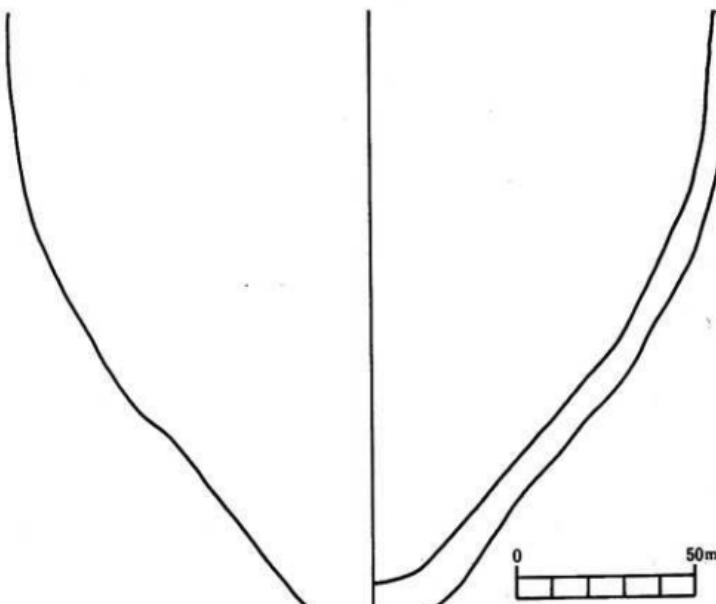
50は土器片に加工した土製円盤、51は滑石製品の破片である。

C トレンチ

(第73図：52～64、第32図)

遺物包含層が1層で、範囲もせまく遺物は少ない。主として宇宿上層式を出土するが、若干宇宿下層式がまざっている。

52は面縄西周式、60～62は喜念Ⅰ式、55は喜念Ⅰ式に近いものであろう。64の土器は弥生式土器の破片である。胎土は粒子が細かで焼成は良好である。内面は鉛削りの跡をのこし、凸帯以上は横ナデ仕上げである。断面三角形の凸帯を1条めぐらす。弥生後期の壺形土器である。宇宿上層式に共存すると思われる。他はみな宇宿上層式であるが、小さな平底の底部が2個あり、外側は磨いたようにみえる。壺形土器の底部であろう。



第32図 第3地点 Cトレンチ 出土の上層式底部

周辺建跡

保育所建設地出土遺物

(第72図: 1~27)

保育所建設基礎工事中に、第2地点との境界付近より出土した土器である。1の土器は2条の、帯状に施した沈線間に、刺突文、刻目などを描くもので、この類は第21図: 13~16、第29図: 7・18などと近い。2・3は臺徳ⅠA式、3は滑石を含む。4・5は面繩西洞式、6は弧文を有する特徴のある土器で滑石を含んでいる。7・8は面繩西洞式、9は喜念Ⅰ式、10は宇宿上層式bである。他宇宿上層式である。

大瀬遺跡採集遺物

(第72図: 28~37)

砂採掘場より表面採集したものである。弥生中期の遺跡と考えられる。28~31は張り出した凸縁又は口縁部で、29の土器は變形土器の口縁部で、同類はサウチでも発見されている。

32は断面三角形の凸縁を付着した變形土器である。35は變形土器の脚部で、沈線文が施されている。36は稍々上底の充実した變形土器の脚台である。37は弧状の外耳を有する變形土器の

破片である。サウチでも同類の出土がみられたが、弧状の外耳を有することが、弥生時代中期に平行することがいよいよ確実になった。（河口）

註

1. 河口貞徳 “奄美における土器文化の編年について” “鹿児島考古 9号” 鹿児島県考古学会 昭和49年6月
2. 河口貞徳他 “嘉徳遺跡” “鹿児島考古 10号” 鹿児島県考古学会 昭和49年12月
3. 河口貞徳 “嘉徳遺跡” “鹿児島考古 10号” 鹿児島県考古学会 昭和49年12月
4. 註(3)と同じ
5. 註(3)と同じ
6. 註(1)と同じ
7. 河口貞徳・出口浩・本田道輝 “サウチ遺跡” 笠利町教育委員会 昭和52年

須恵器

ほとんど3層および4層からの出土で、M-7・8・9・10区が出土量の大半を占める。いずれも小破片ばかりであり、甕がそのほとんどで、壺・鉢・塊などはそれぞれ一・二点を数えるにすぎない。全般的にみて、器面調整上で目立つことを要約すると、つぎの三点となる。

- ① ロクロ目の左回りと右回りが相半ばする。
- ② 繪描波文状のモチーフをヘラ描き沈線（白木原和美氏が説く類須恵器の一本描きの波線）で表現している。
- ③ 格子目のたたきを内面に施しているものがある。

甕（口縁部）

（第74図）

1は口縁部の小片で復元口径約1.2cm。口縁部は稜線を設けて直立し突唇をめぐらした形になる。内面は口唇部に近く一段深い凹みを施している。色調は青灰色で、割れ口はセピア色、横ナデで仕上げてある。右回りロクロ使用。2も1とはほぼ同形態のものとみられるが、復元口径がやや大きくなり約1.4cmをはかる。右回りロクロ使用。3は復元口径は約1.4cm。色調・仕上げは1と同じであるが、端部が大きく外に開く点が異なる。4も1と同類の小片であるがやや焼成が歎弱である。右回りロクロ使用。

5の口唇部内側は丸味をおびているが、外側は回転台利用のヘラなどでにより稜線を形成する。二段口縁を思わせる屈曲が内面にみられるが、小片のため全貌は不明である。色調は内外・胎土とも青灰色を呈する。9は口縁端部外側を突唇状に作り、内側は対照的に深い凹みを施す。色調は内外・胎土ともに青灰色を呈する。7の口縁端部内側は玉縁状、外側は山形突唇状でかつ稜線を形成する。

色調は内外ともに青灰色、割れ口は泥褐色を呈する。4の口底部は丸味をおび、内側に浅い凹みをもつ。色調は内外ともに青灰色、割れ口はセピア色を呈する。14は口縁端部外側に稜線をもった突帯をもつが、内側に凹みはみられない。色調は内外・胎土ともに青灰色を呈する。15は14と同類もしくは同一個体とみられる。これらは左回りロクロで調整されたものである。

16・17・18・20は頸部の小片で口縁端部を欠く。16の復元頸部外径は約12cm。色調は灰褐色を呈し、胎土に小量の石英粒がまじり、焼成良好。17の色調は内外ともに青灰色。割れ口はセピア色を呈する。内面に青海波状のたたき目がみられる。18・20は、17と同類とみられる。これらは右回りロクロで調整してある。

ヘラ描き沈線の波状文

19・21・22・23・24・25・26は、いずれも壺の肩部片で、外面は平行たたきをすり消し、肩部にヘラ描き沈線の波状文を施す、描绘波状文をモチーフにしたものと考えられるが、描绘でなくヘラ描き沈線になっている点が特徴といえる。しかも波状文は一列のみでなく、四列ほど繰り返されている。いずれも小破片のため、四列までしか確認できない。内面は左回りロクロ使用のカキ目で仕上げられている。とくに21は、輪積み→たたき目→カキ目という調整の手順の痕跡を残している。

無頸壺・鉢・塊

6は無頸壺の口縁部小片で、復元口径約14cm。色調は内外ともに青灰色、胎土はセピア色を呈する。横ナデで仕上げられ、口縁端部はヘラなでにより平坦に作られている。10・11・12は鉢状の器の口縁部である。10は復元口径は約16cm。口唇部は内側が鋭角に、外側が鈍角になるよう平坦におさえられている。色調は内外が青灰色、胎土がセピア色を呈する。11は突帯状に外側に稜線をつくり、内側に浅い凹みをもつ。色調は10とはほぼ同様であるが若干色がうすく、焼成はやや軟弱である。12は外側に稜線をつくる突帯をもつが、内側に凹みがない点が11と異なる。13は壺または塊の口縁部で、色調は外側が青灰色、内側、胎土は暗橙褐色を呈する。焼成はやや軟弱である。これらは右回りロクロ調整に使用している。

壺(肩部)

(第75図・第76図・第79図)

器面の調整技法を観察した結果、つきのように類別できる。外面ではA平行たたき、B平行たたきをすり消す、C平行たたきの上に搔目、D格子たたき、E格子たたきをすり消す、の五通りの技法がある。内面ではa平行たたき、b平行たたきをすり消す、c平行たたきの上に搔目、d格子たたき、e格子たたきをすり消す、f格子たたきの上を刷毛などで、g格子たたきの上に搔目、h搔目、i青海波文、j青海波文の上に搔目、の十通りの技法がみとめられる。内外両面の技法の組合せから眺めた場合、本遺跡の壺は16種類とみなされる。全般的にみて、平行たたきが主流をなし、格子たたきは外面にあるものは3点で、むしろ内面にあるものの方が15点と類例が多い。以下外面の器面調整を大文字で、内面のそれを小文字で表記し、大文字、小文字の組合せで類別して説明

する。

1. A a型 第76図9……灰褐色を呈し、粗砂粒がまじり焼成は良好。
2. A b型 第75図4・5・7・第50図3……灰褐色を呈し、焼成やや軟質。
3. A g型 第75図11……青灰色を呈し、焼成は良好。
4. A h型 第75図1……内外面は青灰色、割れ口はセピア色を呈し、焼成は良好。左回りロクロを使用。
5. A i型 第76図10……淡茶褐色を呈し、焼成は良好。
6. B b型 第75図15・第46図3……青灰色を呈し、焼成は良好。
7. B c型 第79図1・5……1は灰褐色を呈し、焼成は良好。右回りロクロを使用。5は青灰色を呈し、焼成は良好。左回りロクロを使用。
8. B e型 第75図6・8・第46図4・5・6・第50図4……灰褐色を呈し、焼成は普通。右回りロクロを使用。
9. B f型 第75図3・11……内外面は青灰色、割れ口はセピア色を呈し、焼成良好。
10. B g型 第75図12・13・第50図1……内外面は青灰色、割れ口はセピア色を呈し、焼成良好。左回りロクロを使用。
11. B h型 第75図2・9……2は淡茶褐色、9は青灰色を呈し、焼成は良好。左回りロクロを使用。
12. B j型 第75図4……内外面は青灰色、割れ口はセピア色を呈し、焼成は良好。右回りロクロを使用。
13. C c型 第76図12……内外面は青灰色、割れ口は茶褐色を呈し、焼成は良好。左回りロクロを使用。
14. D e型 第75図14……外面は淡褐色、内面および胎土は橙褐色を呈し、焼成はやや軟質。
15. E c型 第79図2……青灰色を呈し、焼成は良好。右回りロクロを使用。
16. E e型 第76図2……灰褐色を呈し、焼成は普通。

以上の分類にもとづき器面調整の技法を要約すると、左回りロクロを使用したものは、外面は平行たたきをすり消すものが主で、内面はすり消しまたは擦目の技法を行い、右回りロクロを使用したものには、外面に格子たたきが含まれ、内面はすり消しの他に青海波文が用いられる。また内面の格子たたきは、两者ともにみられる。

底部片

(第76図・第79図)

小破片のため壺・壷・瓶・鉢などの推定をしかねるが、ほとんどすべてが平底である。

第76図14は灰褐色を呈し、石英細粒が多量まじり、焼成は良好である。また左回りの擦きあげ痕を残す。第76図15は青灰色を呈し、焼成は良好。これらは左回りのロクロで器面調整を行なっている。

第76図12・13は青灰色を呈し、焼成も良好で、右回りクロロで器面調整を行なっている。第76図8は底部径7cmの环の破片とみられる。外面は灰白色、内面は淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。側面からは高台の有無はわかりにくいが、揚げ底型の付け高台である。右回りクロロで仕上げを行なっている。

第79図6は脚付の底部で、粘土塊を貼付けて三脚にしたものか、小片であるために全貌は不明である。内外面は灰褐色、割れ口は淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。右回りクロロで調整している。

南島にみられる須恵器については、須恵器と良く似た焼きものではあるが、異なる点があり「類須恵器」と呼ばれているが⁽¹⁾ここではその違いにまで追究ができなかったので、「須恵器」として記述した。

破片はかなり多くの出土がみられたが、そのほとんどが方形土器の破片と思われ、他の器種は少なかった。特に环や塊は見当らなかった。ヘラ描沈線の沈状文が散点みられたが、これらはその時期を平安末～鎌倉初期と推測されている⁽²⁾。

また中には第44図1～3の口縁部等、様式IV（6C後半）にあたるのではないかと思われる破片もあり注目される。（平田信秀・出口）

註

1. 白木原和美 「南西諸島の類須恵器」（『えとのす』9号） 1978年

2. 1と同じ

* 須恵器の執筆については県文化課平田主任研究員の協力を得た。

青瓷

（第79図・第80図）

青瓷は約30点出土したが、大部分は1層から3層の間にみられる。小片ばかりであるが推定復元可能なものは、ほとんど図化してあげた。

ここでいう青瓷は釉薬が青色を呈したものだけでなく、白色に近い青灰色をなすもの、茶黄色を呈したもの、くすんだ緑色を呈したものなどを含めた。

①釉が青味を帯びた緑色の発色をするもの。（第79図：7・9・10・11・13・15・16）

7は外面に蓮弁の文様を有し、口縁部は外反する。9は外面に蓮弁を有し、内面に草花文とも思われる曲線文を有する。内鷺気味の丸味をもつ体部で口唇部を除いて艶がみられない。断面では釉薬が厚く観察される。9・10・11は内鷺気味に直口をする体部を有する。内外無文である。くすんだ緑色を呈している。10は口縁部附近を除いて貫入がみられる。いずれも碗と思われる。13・15・16は高台が断面四角形を呈する。13は見込と高台内面に釉がみられない。見込部にはロクロ目の跡が残り、高台内面は、かき取った痕跡がみられる。15は腰部でやや内鷺気味にカーブ

ブし、口縁部近くで内面に稜を描いて外反する特徴をもつ。高台内面、疊付部分に釉はみられない。荒い貫入がみられ、外面には蓮弁文様を有する。16は底部の器肉が厚い。釉は高台内面中心部付近を残して全面に施される。露胎部分は褐色を呈し、施釉された境の部分は茶褐色を発色している。

③釉がくすんだ緑褐色ないし茶黄色の発色をするもの。(第79図: 8・12・19・20・

21・22, 第80図: 1・2・6)

8は口縁部が外反し、口唇部はやゝ丸味をおびている。12は直口気味に外反する口縁部を有し、端部口壳になっている。外面に蓮弁状の文様を有する。19は内底見込にヘラ描の文様を有する。底面はやや上げ底を呈し、腰部あたりまで施釉されていない。ロクロ痕があざやかにみられる。20は内面に文様を有するが定かでない。21・22は内面に飛雲文を見る。これらはいずれも貫入がみられる。

1・2・6は茶黄色を呈し、色調がにぶい。細かい貫入がみられる。1・6は外面に蓮弁文様を有し、6は内面にも櫛描文を有する。

③釉が白色に近い灰青色の発色をするもの。(第79図17・18)

17は高台内面の一部を除いて施釉されている。荒い貫入がみられる。18は全体に施釉されている。高台内面中央部はやや尖り気味である。

④釉が白、ないし灰色を帯びたうす緑色を呈し発色の悪いもの。(第80図8)

高台が断面四角形で浅く切り上げ、器肉が厚い。高台部疊付およびその内部は露胎である。全面に細かい貫入がみられる。

白瓷

(第79図: 14, 第80図3~5・7・9・10)

約10点の出土できわめて少量である。

①玉縁状の口縁を有するもの(第80図: 4・5・9・10)

4は灰白色を呈し発色は良くない。5・9は乳白色を呈する。9は小さい断面三角形状の口縁をなす。10はやゝ褐色を呈し、細かい貫入がみられる。釉は全体に薄目にかけられている。いずれも碗の破片と考えられる。

②口縁部外反のもの(第80図3)

口縁部で外反し、内面中位に沈線状の浅い段をもつ。外面は口唇部下に浅い凹線がみられ、対比的の文様が観察できる。

③底部(第79図14・第80図7)

14は台形状の低い高台をもつ。高台内面には釉がみられない。7は灰色がかかった釉が体部下半まで施されている。下脚部から高台部へかけて、対比剤による調整のあとがみられる。見込みはややこった白色の釉を受け、貫入がみられる。

これらの青瓷、白瓷を「九州歴史資料館研究論集4」¹⁰⁾の資料を参考にして比較検討してみたい。

まず青瓷においては、①は蓮弁文の特徴から1類5に、②は飛雲文や皿の相似より、1類4に相

当するものとみられる。いずれも竈泉窯系青磁である。I類4が12世紀中葉から13世紀初頭、I類5が13世紀中葉に比定されている。

白磁は玉縁口縁が特徴であるが、①はⅡ・Ⅲ類に相当しよう。また底部は外面下半の範削りや同部分の無釉などやはり類似の特徴を有している。細く高い高台はⅣ類に類似している。11世紀中葉から12世紀初頭にあたる。

これらはいずれも少量であり、また破片のため、資料としては不十分であるので確定的な見方でなく、推測としておきたい。

染付

(第80図11~30)

30片ほどの出土がみられたが、小破片が多かった。図示可能なものは全部記録した。

11・13・14は淡い青色ないし乳白色を呈する。やわらかく外反する碗の口縁部であろう。11・13は口唇部内側が茶褐色を呈し、無釉である。12・17・20・22・23は全体に薄青色を発色し、外面に呉須で文様を描いている。12は口縁附近で急に外反し、その部分に内面2条外面1条の横線を描く、外面文様は草花文であろう。器内はうすい。17は口縁部内外に横線、外面は山水文様を描く。買入がみられる。22は湯飲み茶碗と考えられる。外面口縁下部に横線1、腰部附近にも草花文様?がみられる。23は腰部へかけて急にすぼまる。淡い青色で草花文様を施している。見込みは無釉である。18は角皿の破片である。比較的厚い。口縁端は平坦面を有する。内面に淡青色で脚足文外面に花文と脚足文を複合した文様を施す。

19は小皿の口縁部である。口唇部内面に鉄釉がみられる。内面に波文が描かれている。器面の色調は乳白色をなす。21は皿の破片である。灰色がかった青味をもつ。内面に草文を描く。見込み釉がかかるっていない。

15・16・28は腰部から口縁部へかけてやや丸味を帯びてふくらんだ高台付の碗である。15は薄青色で外面いっぽいに草花文を口縁下内外に横位2条の横線を描いている。16は細く内傾する高台を有す。色調はうすい灰色を呈し外面に山水文を、内面には見込みのまわりに2条の円を描いている。28は直立する細くとがった高台を持つ。外面口縁下部に2条、高台部外面に2条、内面口縁下部に1条、見込みのまわりに2条、横線をめぐらしている。外面に竜文を描く。買入がみられる。

24・25・26・27・29・30は高台付の底部である。高台は全体に細く高い。24は小形の碗で、底部から直線的に口縁部へ伸びる。色調はうすい青色で、疊付部を除いて全体に釉が施されている。高台部外側に横線1条、外面に円文が見られる。高台内中央部はやや尖っている。荒い買入がみられる。25は24と同じ器形であるが、やや腰が張る。全面に施釉されている。腰部と高台部に横線を描き、高台内面には「大日」の字が觀察できる。灰色を呈する。26は杯部が皿状に伸びるが、器形は不明である。釉は青白色をなし、見込みと高台内部に文様を施している。高台部外面に2条の横線をめぐらす。疊付部は釉が溶けて砂粒子が附着している。高台部内面を除いて買

入がみられる。27は灰青色を呈し発色はにぶい。下脣部から上方へなだらかなカーブを描き、安定したすわりである。高台付け根部は内面にひび割れの亀裂がめぐり接合の状態を示している。豊付部を除いて釉か施されている。外面下脣部に1条と高台部外面に2条横線が描かれ、内面見込みに草花文、まわりに円を描いている。29は淡青色をなし細く高い高台を有する。釉は全面にかかる。外面に線文を描く、内面は見込み文様を描き、外周に円を表わす。

30は高台付け根部の外面とその下位に横線文見込周囲に2条の円を描く線文がある。豊付け部は釉が落けて粒子が附着している。内面に貫入がみられる。

これらの染付については、破片も小さくまた少量のため遺物の説明だけにとどめておきたい。^註シツキタブクの出土の施釉陶器と類似しているように思われる。

(註)

白木厚和美 「南西諸島の頬須恵器」 (『エトノス』9号) 1978年

(2) 石 器

本遺跡において、120点の石器を発見した。主要なものをあげると、石斧、敲石、凹石、磨石、石皿等である。石核や剣片を利用した擦器や用途不明の加工円盤をはじめ砥石や研磨器など特殊なものもみられた。また弥生時代のノミ形石器と思われるものもあり注目を引く。チャートや黒曜石の剣片および垂飾品や石棒などもこの項で説明することにしたい。人骨に伴う石器については、人骨の項で説明する。

なお出土地区、層、重さ、石質等は第4表に記載したので、本文では省略する。

① 石斧 (第81図・第89図)

(a) 打製石斧 (第81図1)

1. 刃部が細いがほぼ短冊形をなす。頭部と側縁部に自然面を残し、他は荒い剥離が加えられている。一面は凹み状の彎曲をなす。刃部の作りも鈍い。長径9.1cm、短径4.4cm、厚さ2.25cmを測る。

(b) 局部磨製石斧 (第81図4~8、10~12)

5は、身から頭部へ細まる。横断面扁平をなす。表面は光沢をもつほど砥磨されているが、裏面は打欠痕を残している。側面は自然面を残す。身の下半分を欠いている。7・8・10はいづれも頭部の破片である。7は両面および側縁部に研磨面がみられ、頭部は調整削離面を残す。8は表面のみ研磨度がみられ、他は打製である。10は頭部およびその周辺部を除いて研磨されている。いずれも横断面は扁平である。4は刃部の破片である。縦に擦痕がみられる。6は菱形をなす。両面に研磨痕がみられる。刃部と頭部は敲打によって摩耗しており、敲石として二次使用したものと思

われる。側面部は削って調整したあとがみられる。長径 6 cm, 短径 5.4~5.5 cm, 厚さ 2.8 cm を測る。11, 12 は前述の石斧と異なり大型で重量がある。11 の平面形は刀部と頭部の巾がほぼ同じで、断面形は一面が肥厚している。両面とも磨製のあとがみられるが、部分的に自然面を残している。刀部は鈍い。縦方向の擦痕がみられる。長径 16.3 cm, 短径 9.4 cm, 厚さ 6 cm を測る。12 は頭部へややはそまる扁平な礫を利用し、一面は密に他面は粗に磨いている。側面部は自然面を多く残す。刀部は鈍い。両方ともに縦断面の片面が緩かなカーブを描き、他面は複雑である。縦 19 cm, 横 11 cm, 厚さ 5.4~5.5 cm を測る。

(4) 磨製石斧（第 8.1 図 2~3, 第 8.9 図 7）

2 は両刃で両面および側面部も滑沢を有するほど磨かれている。3 は刀部を欠くが、盤形をなし頭部の打痕を除いて良く磨かれている。7 は小形でよく整った石斧である。頭部を欠いているが、良く研磨された薄手の両刃を持つ。横断面は扁平をなす。

これらのほかに石斧の小破片がみられた。（第 8.1 図 9, 第 8.9 図 2~4）

2 は頭部、3 は刀部、4 は側面部の破片でありすべて器面は研磨のあとがみられる。9 も同様であるが、石斧のどの部分にあたるかは不明である。

③ 剥器（第 8.2 図 1~11, 第 8.3 図 1~3）

川原石を打ち割って、剥片や石核を利用して加工を加えて石器としたものをあげた。残核も含めた。

(1) 剥片石器（第 8.2 図 1~8）

1~4 は扁平な剥片の周縁部が削られ摩耗している。一端をリタッチし、調整を加えている。一面に自然面を残している。6 も同様な破片であるが周縁部を使用している。2 は剥片の周縁部にチッピングが施されている。

3~5 は半円状の剥片の弧にあたる部分を削って使用している。3 はうすく扁平で二面ともなめらかである。

7 は舌状の剥片の周縁部に細かなチッピングを施し刃部を形成する。表面にも頭部より平行な剝離を行っている。自然面が少し残っている。

8 は継長の剥片の側面部と先端部に敲打痕がみられる。

(2) 石核石器（第 8.2 図 9~11）

9 は掌大の扁平な自然礫の割れ部にチッピングを加えて刃部を形成する。10 は剥片の側面部を削りに使用し、下部は敲打痕が明瞭である。10 は円礫の割れ部に細かな剝離を加えている。礫自体は元来砾石だったと思われ、頭部および中央部に敲打痕が強く残っている。

(3) 穰核（第 8.3 図 1~3）

1~3 は円礫の縁辺部に多くの荒い剝離が施されている。

④ 敲石（第 8.3 図 2~4~11, 第 8.4 図 1~17, 第 8.5 図 1~9）

敲石は本遺跡で最も多く出土している。タイプも様々なものがみられる。

(ア) 扁平な円錐を利用したもの(第83図、第84図10・11・13~17)

1000タ前後のかなり重い扁平円錐の周縁部を叩いて使用している。5は平面略円形をなし、側縁全面を使用している。摺りにも兼用している。8は同様に縁辺を使用し、縫をなして面ができる。頭部および両面中央部にも敲打痕がみられる。縁辺は磨石としても使っている。9は半欠品であるが、中央部に画面とも敲打による凹みがあり、下端部は大きく面をなして敲打面が広がっている。10はやや厚みのある円錐を利用し、上端および下端部に敲打面がみられる。両側縁部はわずかに摺ったあとがうかがわれる。両面中央部はわずかに敲打による凹みがみられる。11は円錐の先端部をわずかに利用している。16は茶褐色に風化の跡が著しい。上下端と両側縁部、平面中央部に敲打痕がみられる。17はサンゴ錐で軽い。断面扁平な錐の先端部に荒い叩きの跡がみられる。

第83図2・4・6・7、第84図10・11はいずれも円錐の破片で側縁部や頭部に敲打痕を有している。

(イ) 掌大の扁平円錐を利用したもの(第84図1~9)

ここでは掌にすっぽり入る比較的小形で軽いものをとりあげた。短径5・6cmから長径は10cm以内、重さも100~200gのもので、いずれも断面扁平ないし稍円形をなす。1・4は長軸線の上、下端縁部に叩きがみられ、2・3はひとつの側面をのぞいて他の側縁部にみられる。6は上下と両側面部を使用している。9はシルト岩質の硬質の錐で石斧の二次使用と考えられる。側面部に叩きがみられ、他は自然面と破碎面である。7は風化が激しく器面上に砂粒が浮き出ている。周縁部全部を使用している。

(ウ) 扁平円錐のひとつの側面部だけを利用したもの(第84図12・14・15、第85図4)

比較的小形で軽い扁平円錐の直線的なカーブをもつ側縁部で厚みのうすい部分のみを利用している。12は他の側縁部も利用している。頂部に剝離面を有す。14・15は縦長の側面のみ使用している。厚さがうすい。4は側縁部の厚みのうすい方を利用する。上下端部にも敲打痕がみられる。

(エ) 棒状円錐の頂部と他の端部を利用したもの(第84図17、第85図1~3・5~9)

横断面が円ないし、横円形を呈する棒状の円錐の頂部と相対する端部に敲打痕を有する一群である。2・5・6は敲打面が強くみられ、激しく使用したことを物語っている。3・7・8もわずかにみられる。3は両面中央部に凹みがみられる。1は平面石錐形、断面扁平形をなし、上端部と下端部とその周辺は敲打による調整がみられる。両面中央部がやや凹み敲打を受けている。7は扁平薄手、端部に使用度が認められる。

④ 凹石(第85図10~13、第86図1・2・5)

第85図3のごとく他石器で凹石を兼用するものがあったが、ここでは凹石だけをとりあげた。

10は破碎された円錐の中央部が浅い凹状を呈す。敲打痕は放射状に周辺部に広がっている。

11は断面四角形をなす小さい円錐の両面IC、一面は1.5cm、他面は2cmほどの直径と、深さ5mmほどの限られた凹を有する。12は部分的に赤褐色を呈する石皿の破片である。おそらく熱を受け

て割れた破片を凹石に利用したものであろう。表裏共に荒い打痕がみられ、小さい凹を有している。13は自然円礫の一面に 3×3 cmの浅く広い凹を持つ。1は扁平な自然円礫の両面に浅い凹をもつ。四方の側縁部に敲打痕がみられ砾石にも使用している。火熱を受け赤褐色を呈している。

5は扁平な破碎礫の表面と裏面に凹みを持つ。前者は直径3cm、深さ1cmで掘り鉢状にていねいに施されており、用法の違いを思わせる。裏面は浅い。2はほぼ六面体をなす不安定な礫の一面を、周辺を残して内部を浅く掘りくぼめている。他の2面にも浅い凹みがみられるが加工かどうか定かでない。これも用途の異なるものであろう。背面は細いひび割れが走り急激に熱を受けたことを示している。

⑤ 磨石(第86図4・6~12)

10は長径16.45cm、短径1.25cm、厚さ4.9cm、整った優品である。断面扁平形で表裏ともよく研磨されている。両側縁部とも面をなしている。6は定形品であるが周縁部に4ヶ所の擦痕がみられる。面をなすまでには至っていない。8は両側縁にわずかに使用痕がみられる。12は破片であるが、両面光沢を有するほどみがかれている。側縁部も下端も使用のあとが著しい。7・11は同様の破片である。4・9は半欠品である。4は破碎面の周辺部を使用している。9は扁平円礫の周縁部に磨面がみられる。頁岩製であることが他と異なる。

⑥ 石皿(第87図1・2、第88図1・3~7)

2は完形品である。今回発見のものでは最も大きい。平面略長方形をなし、背部はややふくらみ不安定である。皿部は中央部に浅く内彎する。また周辺部に器面の剥落が見えるほかは、使用によって摩耗している。側縁部に調整剝離のみられるほかは、背部まで自然面が多く残る。皿部を除いて、赤褐色を呈した部分が多く火熱を受けたものと推定される。背部と側面の部分的な割れ面は火熱によって生じたものであろう。長径3.6cm、短径2.36cm、厚さ8.9cm、重さ13.7kgで小児による持ち運びは困難であろう。

1は2に比べてひとまわり小さい。一部分を欠いている。平面は略方形に近い。断面は薄く扁平であり、皿部は中央部を中心に凹状に弯曲している。側縁部に敲打調整のあとがみられるほかは自然面を残している。背面はややふくらみを有し不安定である。全体に砂粒が固着して器面を覆っている。特に皿部に著しい。破損したあと火熱を受けている。背面の側縁部よりに敲打による凹みがみられるが、石皿を転回して、安定した背面を使用する時、中央部をはずして、やや斜面部に力点を加えるのが注目される。

3は皿部が浅い凹状を呈し、器面は摩耗している。他は自然面を残す。6はほぼ完形である。長軸にそった両側面も磨かれて摩耗している。側面から皿部にかけて火熱を受け赤褐色に変色している。

4・5・7は両面共に使用されている。5は皿部の器内がうすくなり、両面とも摩耗が激しい。一面は擦痕が2つの方向からみられる。砾石に再利用したものであろう。なお側面部も磨いて調整

を行っている。

1は大形の石皿の破片である。皿部周縁部が盾鉢形に隆起している。全面赤褐色に変色している。

⑦ 磨石(第90図10)

10は長軸の一端は敲打調整をなし、他端は破砕面である。長軸にそろ4面のうち、最少面を除く3面を使用している。面中央部に浅い凹状を呈する。角を利用して横位に2本の小さな切れ込みもみられ、細い棒状の器具の調整に使用したことがうかがわれる。M-6区の集石内より出土した。

⑧ 研磨器(第90図2~4・9)

巾5mm以内で先端部の丸い凹線をなす砥磨痕を残す礫片である。

2は軟弱な砂岩である。両面に2本みられる。3は小片であるが複雑な割れで7面を有し、うち一面の破砕面を除いて5本の凹線が交差して観察できる。9はやや大きい礫片の一面に直線をなし、深さ4mmで明確に残され、他面にはX字状に交差して凹線がみられる。あと一面は浅い凹みをなしている。

4は扁平なうすい小礫の上面にカーブを描いて残されている。

⑨ 卵形礫(第89図15~20)

亀卵以下の大さきの礫が6個出土した。横断面円形を呈し、敲打痕や擦痕を有している。15・17・18・20は球形、16・19は鶴卵形をなす。17は頁岩製の小礫で、表面は磨かれ光沢を有する。他はすべて砂岩である。

⑩ 加工円礫(第90図1・5・8)

卵形礫と似ているが、摺り面が面として残るものをまとめた。1は小さい自然円礫の長軸にそろ四面のうち二面は摺られており、一面は平坦になっている。

5は掌大の自然円礫を利用し、上下二面、他に三面を有する。面と縁辺部に擦痕がみられ、磨石とも考えられるが、多面体の特徴からこの項で記述した。8は上部が欠損しているが、扁平ではほぼ六面体をなす。側面部と下端部が摺られて平坦面を有している。

これらの石器は面が細やかであり、特殊な磨石ないし砥石的な用途をなすものではないかと考える。

⑪ 石製加工品(第89図11、第90図6・7)

何にどのように用いたか不明の特別な石製品を2点あげた。6は横断面略三角形、平面長方形をなす。側縁部一面が、割れており、現形は不明である。長方形をなす面の長軸にそって巾5.4mmから2.8mmに台形状の凹みが作られている。巾広い側縁部の方は割れていて不明、他方は欠損部はみられないが、凹みは限られていない。凹部は摺ったり、磨いたりした痕跡は認められない。長径

9.95cm, 短径 3.85cm, 厚さ 2.1cm を測る。砂岩製である。

7は平面二等辺三角形をなし、横断面は不規則な四角形をなす。凹部を除いて全面砥磨が施され、滑沢を有している。凹部は一面は自然面であるが、他面の頭部近くは打穴によって調整されている。当初石斧かと思われたが、刃部にあたる部分に面をもって平に磨きあげているので、別品とした。側面も片面はていねいな研磨がみられ、頭部付近では縱に、中ほどでは横に擦痕が走っている。岩質はシルト岩である。

11は半月形をなす加工品の半欠部分と思われる。平面形は側縁が弧状になだらかなカーブを描き、他は直線となるか、抉りを入れたあとが2条みられる。横断面扁平をなし、ややくぼんだ自然面を残して全面に光沢を有する研磨が施されている。O-7区-7層のピット内出土が注目される。砂岩製である。

⑫ 石製垂飾品(第89図12~14)

いずれも穿孔を有する。12は直径3.4cm, 厚さ2.3cmの平面円形、断面橢円形を有する加工品で、中心部を境に半分欠損している。中心部に直径4mmの穿孔がみられるが、破裂はこの部分からはじまっている。表面は摺って円形に調整したあとが、生々しくみられ、摺ってできた多くの面や擦痕が縱横に走り、製作時の苦闘のあとがうかがわれる。表面磨研の状態にまでは至っていない。

13は平面略三角形、断面扁平な小石の一部分に、斜めに穿孔がなされている。表面は光沢を有する。

14は平面不定形、断面扁平の小石の中央部に直径1cmの孔が斜めに穿たれている。孔部側壁は固体物が附着し、なめらかではない。表面は自然面を残している。

⑬ 石錐(第88図2, 第99図10)

2は扁平な自然縁に全面に荒い敲打調整を行なって粗製に仕上げている。表裏面および側面部に自然面を残す。下面近くを敲打によって浅い溝状に削り、側面部は深く抉りを入れた形状を呈する。下面是自然面を残している。高さ11.2cm, 幅10.85cm, 厚さ7.35cmを測る。M-7区6層出土。

10は断面橢円形の棒状の上部に、半球形の頭部を形成し、接線はくびれ状に鋸く表現している。裏面と下面に自然面を残す。男根を象徴したものと思われる。長さ3.73cm, 幅2.8cm, 厚さ2.15cmを測る。M-5区7層出土。

⑭ その他(第89図5・6・8・9)

5は黒曜石の剥片で他はチャートの残核である。8は側縁部にチッピングが施されているが、全形は不明である。

⑮ ノミ形石器(第89図1)

第4表 石器出土一覧表

層 組 区	石 斧	鎌 器	破 石	凹 石	磨 石	石 齒	砾 石	研 磨	削 削	加工 内 面	石 製 加 工 品	陶 器	石 核	石 刃	骨 製 小 形 石 器	その 他	計
M 1		1個1															1
M 5		5個1 6個1	6個1	7個1									7個1				5
M 6	磨石1 5個1 5個1	5個4 砾石3 6個1	砾石2		5個1 6個1	磨石1	磨石1										16
M 7	磨石1 6個2	6個1 6個4		6個1	6個1			6個1	6個1				6個1				15
M 8		6個1			6個1				6個1					6個1			4
M 9					6個1												1
M 10		5個1	6個2								4個1						4
M 13			7個1														1
M 16			7個2 2個1														3
X 7	6個2																2
Y 7				1個1													1
A 7					4個1												1
D 7								3個1							5個1		2
G 6		4個1		4個1		人骨1									人骨1		4
G 7	5個3					6個1					5個1						5
I 7	5個2 5個1	7個1 6個1		5個1 6個1		1個1		6個1	6個2		1個1						11
J 7		6個1			6個1												2
N 7	3個1	7個1	5個2 6個3	6個2	5個1 7個1				6個1	7個1						6個2	15
O 7			6個1 7個1						6個1	6個1	7個1						5
P 7	4個1	8個2	8個1		6個1	7個1		7個1									7
A ト レ ン チ	東 1 6個1																2
	搬 乱 1				1												2
	1.8 ~1.9			1							1						2
	磨 石		1														1
C	2		2個1														1
F	9										3個1						1
そ の 其 他	西崩れ 1																1
計	16	13	35	7	9	9	1	4	6	3	3	3	2	1	1	4	117

弥生時代に伴う特殊な石器として別にとりあげた。

平面長方形、断面扁平をなし、頭部を欠損している。両側面は丁寧な研磨調整で仕上げられている。一面は自然面を残して、表面調整を行ない、他面は器面が削落している。片刃の刃部先端は平坦面が残り、鋭さを欠いている。長さ3.1cm、巾2.6cm、厚さ1.3cmを測る。

以上石器について説明を加えてきたが、全体をとおして気づいた点について述べたい。

- (ア) 石器の種類が多種にわたっていること。
- (イ) 石斧や垂飾品など一部を除いたほかは、ほとんど砂岩の礫を材料として使用していること。
- (ウ) 磨器、敲石、磨石等にみられるように、自然礫や剥片の手ごろなものを利用として簡単に利用していること。
- (エ) 石斧は局部磨製石斧が大半を占めていることと、大形の石斧がG-7区-5層下から2本まとめて出土したこと。これらの石斧は重量が1835gと1307gと1kgをはるかに越し、また刃部も鋭く、他と用途の異なるものであろう。
- (オ) 敲石の出土量が他に比較して多く、また種類も多岐にわたっている。1000個前後の大きい扁平円錐の周縁部全部を使用するもの。掌大の扁平円錐の周縁部一部を使用するもの。扁平円錐のひとつの側面部だけを使用するもの。棒状円錐の上・下端部を使用するもの⁽¹⁾に分けられたが、対象物に応じ、用途に応じて自由に自然礫を使い分けたものと考えられる。
- 今回の調査で多くみられた貝殻類、獸骨類、魚骨類等の調理に果した道具としての役目と、石組住居址内に山のように堆積した礫群との関係など興味深いものである。
- (カ) 石皿は大形のものを含めて7個の出土がみられたが、欠損しているもののが多かった。またほとんど火熱を受けた痕跡がみられることが注目される。
- (キ) 既石、研磨器など、特殊な道具が数点出土しているが、これらを使って何をどのように磨き、研ぎ、摺り、尖したのかおもしろい問題である。特に研磨器はM-6・7区の6層に集中しており上層式の時期に該当するものである。竜郷町の手広遺跡にも同様のものが出土している。⁽²⁾
- 石製加工品としてとらえた第10図6は、断面3mm～5mmの凹部がみられるが、前記の研磨器と異なり、摺ったり、磨いたりした痕跡がなく、別の用法を考えざるをえない。類例を待ちたい。
- (ク) 卵形の礫で若干の加工が認められるものをあげたが、他にも自然礫として処理したものが多くみられた。出土状況によっては石弾としてとらえることもできるが、⁽³⁾今回も基礎資料のひとつとして記録しておきたい。サウチ遺跡⁽⁴⁾や渡具知東遺跡⁽⁵⁾にも出土例が知られている。
- (ケ) 特殊な石製加工品として記述した第90図7は、岩質、形態等から一見石斧と思われるが、刃部に相当する部分に面を有する点で異なっている。利器としての機能でなく、別の用途に使用したものであろうか。
- (コ) 第89図13・14は穿孔のなされた小石であるが、積極的に人間による加工痕とも認めがたく、自然石の感なきにしもあらずである。14の孔は自然には決してできないという意見⁽⁶⁾もあり、念のために記録した。今後の資料に待ちたい。

- (サ) 黒曜石やチャートの剥片および残核が数点出土したが、貴重な材質であるだけに、その製品および原石の鐵路等今後注目されよう。
- (シ) 石棒、重飾品、石製加工品(第89図11)石ノミ等、特別品がみられるが、縄文文化や弥生文化と奄美先史文化とのつながりを追究する上で重要な資料である。
- (ス) 出土状況は第4表で示した。M-6区の集石内、M-7区-6層に出土量が多い。上層式の時期に該当する。またN-7区にも多く、石組住居の近接部に集中していることが注目される。種類としては敲石の出土が最も多い。石斧が2位を占めるが、G-7区5層に3個集中していることが注目される。(出口)

註

1. 読谷村教育委員会「渡具知東原」—第1~2次—発掘調査報告書 1977年3月
石器の項で、「B石錐」として分類され「横断面類三角形の棒状の石器で……」とあるが、これに該当するものと思われる。
2. 奄美考古学会 中山清美氏の教示を受け、また実物の実見の機会をあたえていただいた。
3. 河口貞徳「鹿児島県高橋貝塚」(『考古学雑誌』)第3巻第2号 1965年
4. 笠利町教育委員会「サウチ遺跡」 1978年
5. 註1と同じ
6. 岩質鑑定の際、石川秀雄教授によって教示をうけた。

(3) 貝 器

今回の調査では、各地区より多くの貝類の出土をみた。そのうち貝製品と考えられるものについて以下記述する。(但し装飾品と考えられるものは別項に記述する)貝製品は、巻貝類が大半を占め、3点異なるものがあるだけのが特徴的である。

A. 穿孔貝(第91図2・3、第93図1~5、第95図10・19・20)

各地点より多量に出土している。マガキガイ・タカラガイ類が最も多く、他にクモガイ・ヤコウガイ・スイジガイ・チ・ウセンザザエ・イトマキボラ・ツノキガイ・オキニシ・シラクモガイ・オニコブシ・ギンタカハマ等多種にわたっている。殻頂部や体側部背面・腹面を打ち欠いたものであるが、ごく小さな穿孔のものと、比較的大きな穿孔のものに区分できる。小さな穿孔は不整形のものが多く、これは身を取り出すのが目的で穿孔されたものではなかろうか。大きな穿孔のものにも同様目的で開けられたものも存在するであろう。大きな穿孔のもの、數カ所に穿孔したもの等は、他の目的で開けられたものも存在すると思われる。從来穿孔貝には、呪術的な意味を考える説・装飾品としてとらえる説・貝錘とする説・貝輪未成品説等があるが、今回の調査での出土状況ではい

それとも判断のつかないものが多い。ただ貝種から考えて、貝輪未成品とは思われないものが多い。以下特徴的なものをあげる。

第91図2 スイシガイである。全体的に磨滅しており、管状縫もほとんど欠けている。体層腹面に2~5cmの不整形穿孔をもつ。前溝に接する管状縫が両面から磨がれて鋭利にされているのが特色である。利器として使用されたのであろうか。第III地点Aトレンチより出土したものである。

第91図3・第93図1~5 第III地点Aトレンチより出土している。第91図3にみられるような豊口部に径1.5cmくらいの穿孔をしたヤコウ貝が2点、第93図1~5にみられる背部を穿孔したタカラガイ5点(穿孔部分いずれも磨滅)が近接して出土したが、擾乱層と思われる所以出土状況自体は意味あるとは考えられない。ヤコウガイ穿孔部は形を整えてあり意図的である。

第95図10 貝種不明の巻貝である。体層部背面・側面・腹面それぞれ一孔ずつ穿孔をする。背面は不整形であるが、側面・腹面は穿孔部を磨って整えるものである。

第95図19・20 タカラガイ背面を穿孔したもので、19は側面・腹面・内面ともに細い線刻を施したものである。20は穿孔部を磨って整えたものである。

B. 貝匙状加工品(第92図1~8)

一般に貝匙と呼ばれているものが21点出土している。そのうち20点がヤコウガイ体層部を切り取ったもので、1点はスイシガイ(?)と思われる。結節部を2条残し、内面はゆるやかに彎曲する。縁辺部を磨ったものと、切りとったままにしているものがあるが、内外面ともに特別な加工は見られない。表面が削離して真珠光沢をなすものも認められる。92図1だけは表面を磨研して整えるもので、あるいは他のものとは使用目的が違うものかもしれない。92図2は蝶塔部を残し、カーブも深いが、他はいずれも浅いカーブ、仮にスプーンとして使用するのであれば、液状のものをつぐには不適当である。92図4は一辺に抉りを加工している。

C. 貝斧(第94図1~11)

ヤコウガイの蓋の薄い方の縁部を凹面側より荒く打ち欠いて刃部をもうけたもので、鈍器である。同種のものは広く南島に分布し、本遺跡でも第6層を中心に各層から出土する。宇宿上層式該当の住居址からも出土しているため、宇宿上層式時期にも製作使用されたことがわかるが、サウチ遺跡では面縄西洞式、弥生前・中期層及びその上層から出土しており、南島において相当長期間製作使用された定形化した利器であったことがわかる。28点の出土のうち、92図4だけは刃部を磨って平坦面を形成するという特徴がみられる。

第92図9 全体的に表面が磨滅した小型のシャコガイである。肋部及び腹縁部を磨って平坦面をつくるものである。第3地点Cトレンチ2層より出土し、貝製品では数少ない2枚貝である。

(4) 装飾品

A. 貝製装飾品

1. 貝輪（第91図1・第93図6・7）

91図1 スイジガイ製の貝輪で第1地点8層の出土である。内径縦6.2cm、横は欠損して不明で、貝輪としては大形品に属し4本の管状縫が特徴的である。体層背面を打ち欠き、さらに螺塔部を打ち欠く際に欠損した未成品と考えられる。背面穿孔部はていねいに磨かれているが、他は内外面ともに自然面のままである。

93図6 珍らしくサラサバティ製の貝輪である。第1地点O-7区2号ピットより出土した。内径は4.6cm内外の円形をなす。殻頂部を打ち欠き、その後丁寧に調整し内孔を磨って仕上げたものである。他は自然面を残している。

93図7 メンガイ製の貝輪である。背面を打ち欠き調整して内孔を作ったもので、打孔面は一部分磨られている。内径は5cm内外の略円形をなし、内外面ともに磨られて整えられている。

2. 垂飾品（第95図1～8）

95図1～6 マガキガイ螺塔先端を研磨・穿孔したものである。2～5は螺塔先端部だけを切りとっている。平面形は円形をなし、光沢を有するものもある。裏面は螺塔内の縫合部が巻曲状にのこっている。95図3は径1.3cm、同図4は径2cmである。

95図7・8 7はツノガイを切り取って管玉状にしたもので、表面はよく研磨され光沢がある。内径0.8cmである。同図8は、卷貝を丁寧に磨って作った小玉である。一面に螺塔内縫合部が巻曲状に痕跡として認められる。内径0.5cm、厚さ0.1cmである。

3. その他（第95図9）

欠損品であるため全形がわからないが、ヤコウガイを裁断して形を整えたもので、内外面ともよく研磨して真珠光沢をなす。

B. 骨装飾品

1. 垂飾品（第92図12～17）

第92図12は、魚の脊椎骨に一面上より孔を穿ったもので、内径1cmと0.6cmである。垂飾品又は耳飾りかと思われる。同図13・14はイノシシ牙の一端に小孔を穿ったもので、13は内径0.2cm、14は内径推定0.4cmである。いずれも欠損品で全形は不明であるが、垂飾又は腕飾りではないかと思われる。同図15は、比較的大形の骨端部に両側面より穿孔して穴を貫通させたもので、孔径0.5cmである。下端部が欠損しているが、両側面及び背部は磨り凹めて抉り状に作り出されている。同図16は、骨を調整して勾玉様の形状にしたものであるが、穿孔は背面より腹面へとおこなわれている。推定孔径0.4～0.5cmである。上下端を欠損する。同図17は、骨の上端に外面より内面へ孔をうがつもので、表面よく研磨され光沢がある。あるいは骨針かもしれない。

2. かんざし（第95図18）

内外面共に一部表面が削離し、粗織が露出しているが、表面はよく調整されている。頭部をやや凹ませて頭部をつくり出し、そこに格子状に細い沈線を刻む。体部も同様手法で横位の平行沈線を施し、そこに格子状に沈線を施すものである。格子文と空白部を交互にもってきて文様効果をあげている。下端部は欠損しているが、形状よりかんざしと判断した。

3. その他（第95図11）

骨を厚さ0.8cm程に切りとり、全面よく研磨して形を整えた小形の円盤状製品である。径1.8cm

の円形に仕上げているが、用途は不明である。

C. サンゴ礁加工品（第94図12）

長径8cm、短径4cmの扁平なサンゴ礁の片側側面にノコギリ歯状に刻みを入れたものであるが、欠失している部分も多い。刻み目間に數カ所刺突して凹みを入れている。護符的なものであろうか。

（本田）

b. 自然遺物

(1) 獣骨

鹿児島大学農学部教授 大塚 開一

〃 助教授 西中川 駿

今回、鹿児島県大島郡笠利町の教育委員会より調査の依頼を受けた「宇宿貝塚」出土の動物遺物標本のうち、陸棲の哺乳動物と思われるものについて、別表のように鑑定した。

出土した獸骨のうち、大多数はイノシシの骨である。イノシシは本土や九州産のものよりも小型で、リュウキュウイノシシと推定できるが、骨端軟骨の消失した成熟イノシシと推定できる骨からみると非常に小型のイノシシが生息していたようである。

つぎに、骨の点数からみると多数のウシの骨片がM-19区-1層から発掘されている。これらは一頭のウシの四肢骨と推定できるが、表層近くから出土しており、骨質のいたみもそれほど著しくなく、古い時代のウシとは考え難い。ウシの大きさは、先年同じ宇宿貝塚より出土し、鹿児島県教育委員会に保存されていたウシの骨と比較すると小型であるが、現在の和牛より幾分か小さい程度である。

M-16区-7層より出土したと記録されたウシの右側大腿骨の骨頭部分はM-19区-1層出土のウシの左側大腿骨頭と同大で、同一個体のものと考えられ、なんらかの偶然で、隣のM-16区にまぎれこんだのではないかと疑われる。Aトレンチ出土のウシの骨と歯はM-19区-1層出土のウシより小型で、明らかに別の個体のものであるが、櫛乱層と集石部から出てきているので、何時頃のウシか不明である。

また、大きさと形状から同一個体のものと推定できるウマの後臼歯3個がAトレンチの櫛乱層と集石部から得られている。このウマは小型で、現在のトカラ馬程度の大きさと推測する。

さらに、ただ1個鹿の角がN-7区-7層より出土している。これには、人工的な丸い孔があげられている。この他には1点の鹿の骨もみられていないので、出土層にあたる時代に奄美大島に鹿が生息していた証拠とは考え難い。

第5表 破骨—蒙表

先年、宇宙飛行で登場された脚骨

第6表 獣骨の区・層別出土表
第1地点 M縫トレンチ

A detailed map of a city street grid, likely a historical or specific area, showing a complex network of streets and buildings. The map includes a variety of symbols such as triangles, crosses, and dots, along with numerous numbers (e.g., 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 100, 101, 102, 103, 104, 105, 106, 107, 108, 109, 110, 111, 112, 113, 114, 115, 116, 117, 118, 119, 120, 121, 122, 123, 124, 125, 126, 127, 128, 129, 130, 131, 132, 133, 134, 135, 136, 137, 138, 139, 140, 141, 142, 143, 144, 145, 146, 147, 148, 149, 150, 151, 152, 153, 154, 155, 156, 157, 158, 159, 160, 161, 162, 163, 164, 165, 166, 167, 168, 169, 170, 171, 172, 173, 174, 175, 176, 177, 178, 179, 180, 181, 182, 183, 184, 185, 186, 187, 188, 189, 190, 191, 192, 193, 194, 195, 196, 197, 198, 199, 200, 201, 202, 203, 204, 205, 206, 207, 208, 209, 210, 211, 212, 213, 214, 215, 216, 217, 218, 219, 220, 221, 222, 223, 224, 225, 226, 227, 228, 229, 229, 230, 231, 232, 233, 234, 235, 236, 237, 238, 239, 239, 240, 241, 242, 243, 244, 245, 246, 247, 248, 249, 249, 250, 251, 252, 253, 254, 255, 256, 257, 258, 259, 259, 260, 261, 262, 263, 264, 265, 266, 267, 268, 268, 269, 270, 271, 272, 273, 274, 275, 276, 277, 278, 279, 279, 280, 281, 282, 283, 284, 285, 286, 287, 288, 289, 289, 290, 291, 292, 293, 294, 295, 296, 297, 298, 299, 299, 300, 301, 302, 303, 304, 305, 306, 307, 308, 309, 309, 310, 311, 312, 313, 314, 315, 316, 317, 318, 319, 319, 320, 321, 322, 323, 324, 325, 326, 327, 328, 329, 329, 330, 331, 332, 333, 334, 335, 336, 337, 338, 339, 339, 340, 341, 342, 343, 344, 345, 346, 347, 348, 349, 349, 350, 351, 352, 353, 354, 355, 356, 357, 358, 359, 359, 360, 361, 362, 363, 364, 365, 366, 367, 368, 368, 369, 370, 371, 372, 373, 374, 375, 376, 377, 378, 379, 379, 380, 381, 382, 383, 384, 385, 386, 387, 388, 389, 389, 390, 391, 392, 393, 394, 395, 396, 397, 398, 399, 399, 400, 401, 402, 403, 404, 405, 406, 407, 408, 409, 409, 410, 411, 412, 413, 414, 415, 416, 417, 418, 419, 419, 420, 421, 422, 423, 424, 425, 426, 427, 428, 429, 429, 430, 431, 432, 433, 434, 435, 436, 437, 438, 439, 439, 440, 441, 442, 443, 444, 445, 446, 447, 448, 449, 449, 450, 451, 452, 453, 454, 455, 456, 457, 458, 459, 459, 460, 461, 462, 463, 464, 465, 466, 467, 468, 468, 469, 470, 471, 472, 473, 474, 475, 476, 477, 478, 479, 479, 480, 481, 482, 483, 484, 485, 486, 487, 488, 489, 489, 490, 491, 492, 493, 494, 495, 496, 497, 498, 499, 499, 500, 501, 502, 503, 504, 505, 506, 507, 508, 509, 509, 510, 511, 512, 513, 514, 515, 516, 517, 518, 519, 519, 520, 521, 522, 523, 524, 525, 526, 527, 528, 529, 529, 530, 531, 532, 533, 534, 535, 536, 537, 538, 539, 539, 540, 541, 542, 543, 544, 545, 546, 547, 548, 549, 549, 550, 551, 552, 553, 554, 555, 556, 557, 558, 559, 559, 560, 561, 562, 563, 564, 565, 566, 567, 568, 568, 569, 570, 571, 572, 573, 574, 575, 576, 577, 578, 579, 579, 580, 581, 582, 583, 584, 585, 586, 587, 588, 589, 589, 590, 591, 592, 593, 594, 595, 596, 597, 598, 599, 599, 600, 601, 602, 603, 604, 605, 606, 607, 608, 609, 609, 610, 611, 612, 613, 614, 615, 616, 617, 618, 619, 619, 620, 621, 622, 623, 624, 625, 626, 627, 628, 629, 629, 630, 631, 632, 633, 634, 635, 636, 637, 638, 639, 639, 640, 641, 642, 643, 644, 645, 646, 647, 648, 649, 649, 650, 651, 652, 653, 654, 655, 656, 657, 658, 659, 659, 660, 661, 662, 663, 664, 665, 666, 667, 668, 668, 669, 670, 671, 672, 673, 674, 675, 676, 677, 678, 679, 679, 680, 681, 682, 683, 684, 685, 686, 687, 688, 689, 689, 690, 691, 692, 693, 694, 695, 696, 697, 698, 699, 699, 700, 701, 702, 703, 704, 705, 706, 707, 708, 709, 709, 710, 711, 712, 713, 714, 715, 716, 717, 718, 719, 719, 720, 721, 722, 723, 724, 725, 726, 727, 728, 729, 729, 730, 731, 732, 733, 734, 735, 736, 737, 738, 739, 739, 740, 741, 742, 743, 744, 745, 746, 747, 748, 749, 749, 750, 751, 752, 753, 754, 755, 756, 757, 758, 759, 759, 760, 761, 762, 763, 764, 765, 766, 767, 768, 768, 769, 770, 771, 772, 773, 774, 775, 776, 777, 778, 779, 779, 780, 781, 782, 783, 784, 785, 786, 787, 788, 789, 789, 790, 791, 792, 793, 794, 795, 796, 797, 798, 799, 799, 800, 801, 802, 803, 804, 805, 806, 807, 808, 809, 809, 810, 811, 812, 813, 814, 815, 816, 817, 818, 819, 819, 820, 821, 822, 823, 824, 825, 826, 827, 828, 829, 829, 830, 831, 832, 833, 834, 835, 836, 837, 838, 839, 839, 840, 841, 842, 843, 844, 845, 846, 847, 848, 849, 849, 850, 851, 852, 853, 854, 855, 856, 857, 858, 859, 859, 860, 861, 862, 863, 864, 865, 866, 867, 868, 868, 869, 870, 871, 872, 873, 874, 875, 876, 877, 878, 879, 879, 880, 881, 882, 883, 884, 885, 886, 887, 888, 889, 889, 890, 891, 892, 893, 894, 895, 896, 897, 898, 899, 899, 900, 901, 902, 903, 904, 905, 906, 907, 908, 909, 909, 910, 911, 912, 913, 914, 915, 916, 917, 918, 919, 919, 920, 921, 922, 923, 924, 925, 926, 927, 928, 929, 929, 930, 931, 932, 933, 934, 935, 936, 937, 938, 939, 939, 940, 941, 942, 943, 944, 945, 946, 947, 948, 949, 949, 950, 951, 952, 953, 954, 955, 956, 957, 958, 959, 959, 960, 961, 962, 963, 964, 965, 966, 967, 968, 968, 969, 970, 971, 972, 973, 974, 975, 976, 977, 978, 979, 979, 980, 981, 982, 983, 984, 985, 986, 987, 988, 989, 989, 990, 991, 992, 993, 994, 995, 996, 997, 998, 998, 999, 999, 1000, 1001, 1002, 1003, 1004, 1005, 1006, 1007, 1008, 1009, 1009, 1010, 1011, 1012, 1013, 1014, 1015, 1016, 1017, 1018, 1019, 1019, 1020, 1021, 1022, 1023, 1024, 1025, 1026, 1027, 1028, 1029, 1029, 1030, 1031, 1032, 1033, 1034, 1035, 1036, 1037, 1038, 1039, 1039, 1040, 1041, 1042, 1043, 1044, 1045, 1046, 1047, 1048, 1049, 1049, 1050, 1051, 1052, 1053, 1054, 1055, 1056, 1057, 1058, 1059, 1059, 1060, 1061, 1062, 1063, 1064, 1065, 1066, 1067, 1068, 1068, 1069, 1070, 1071, 1072, 1073, 1074, 1075, 1076, 1077, 1078, 1079, 1079, 1080, 1081, 1082, 1083, 1084, 1085, 1086, 1087, 1088, 1089, 1089, 1090, 1091, 1092, 1093, 1094, 1095, 1096, 1097, 1098, 1098, 1099, 1099, 1100, 1101, 1102, 1103, 1104, 1105, 1106, 1107, 1108, 1109, 1109, 1110, 1111, 1112, 1113, 1114, 1115, 1116, 1117, 1118, 1119, 1119, 1120, 1121, 1122, 1123, 1124, 1125, 1126, 1127, 1128, 1129, 1129, 1130, 1131, 1132, 1133, 1134, 1135, 1136, 1137, 1138, 1139, 1139, 1140, 1141, 1142, 1143, 1144, 1145, 1146, 1147, 1148, 1149, 1149, 1150, 1151, 1152, 1153, 1154, 1155, 1156, 1157, 1158, 1159, 1159, 1160, 1161, 1162, 1163, 1164, 1165, 1166, 1167, 1168, 1168, 1169, 1170, 1171, 1172, 1173, 1174, 1175, 1176, 1177, 1178, 1179, 1179, 1180, 1181, 1182, 1183, 1184, 1185, 1186, 1187, 1188, 1189, 1189, 1190, 1191, 1192, 1193, 1194, 1195, 1196, 1197, 1198, 1198, 1199, 1199, 1200, 1201, 1202, 1203, 1204, 1205, 1206, 1207, 1208, 1209, 1209, 1210, 1211, 1212, 1213, 1214, 1215, 1216, 1217, 1218, 1219, 1219, 1220, 1221, 1222, 1223, 1224, 1225, 1226, 1227, 1228, 1229, 1229, 1230, 1231, 1232, 1233, 1234, 1235, 1236, 1237, 1238, 1239, 1239, 1240, 1241, 1242, 1243, 1244, 1245, 1246, 1247, 1248, 1249, 1249, 1250, 1251, 1252, 1253, 1254, 1255, 1256, 1257, 1258, 1259, 1259, 1260, 1261, 1262, 1263, 1264, 1265, 1266, 1267, 1268, 1268, 1269, 1270, 1271, 1272, 1273, 1274, 1275, 1276, 1277, 1278, 1279, 1279, 1280, 1281, 1282, 1283, 1284, 1285, 1286, 1287, 1288, 1289, 1289, 1290, 1291, 1292, 1293, 1294, 1295, 1296, 1297, 1298, 1298, 1299, 1299, 1300, 1301, 1302, 1303, 1304, 1305, 1306, 1307, 1308, 1309, 1309, 1310, 1311, 1312, 1313, 1314, 1315, 1316, 1317, 1318, 1319, 1319, 1320, 1321, 1322, 1323, 1324, 1325, 1326, 1327, 1328, 1329, 1329, 1330, 1331, 1332, 1333, 1334, 1335, 1336, 1337, 1338, 1339, 1339, 1340, 1341, 1342, 1343, 1344, 1345, 1346, 1347, 1348, 1349, 1349, 1350, 1351, 1352, 1353, 1354, 1355, 1356, 1357, 1358, 1359, 1359, 1360, 1361, 1362, 1363, 1364, 1365, 1366, 1367, 1368, 1368, 1369, 1370, 1371, 1372, 1373, 1374, 1375, 1376, 1377, 1378, 1379, 1379, 1380, 1381, 1382, 1383, 1384, 1385, 1386, 1387, 1388, 1389, 1389, 1390, 1391, 1392, 1393, 1394, 1395, 1396, 1397, 1398, 1398, 1399, 1399, 1400, 1401, 1402, 1403, 1404, 1405, 1406, 1407, 1408, 1409, 1409, 1410, 1411, 1412, 1413, 1414, 1415, 1416, 1417, 1418, 1419, 1419, 1420, 1421, 1422, 1423, 1424, 1425, 1426, 1427, 1428, 1429, 1429, 1430, 1431, 1432, 1433, 1434, 1435, 1436, 1437, 1438, 1439, 1439, 1440, 1441, 1442, 1443, 1444, 1445, 1446, 1447, 1448, 1449, 1449, 1450, 1451, 1452, 1453, 1454, 1455, 1456, 1457, 1458, 1459, 1459, 1460, 1461, 1462, 1463, 1464, 1465, 1466, 1467, 1468, 1468, 1469, 1470, 1471, 1472, 1473, 1474, 1475, 1476, 1477, 1478, 1479, 1479, 1480, 1481, 1482, 1483, 1484, 1485, 1486, 1487, 1488, 1489, 1489, 1490, 1491, 1492, 1493, 1494, 1495, 1496, 1497, 1498, 1498, 1499, 1499, 1500, 1501, 1502, 1503, 1504, 1505, 1506, 1507, 1508, 1509, 1509, 1510, 1511, 1512, 1513, 1514, 1515, 1516, 1517, 1518, 1519, 1519, 1520, 1521, 1522, 1523, 1524, 1525, 1526, 1527, 1528, 1529, 1529, 1530, 1531, 1532, 1533, 1534, 1535, 1536, 1537, 1538, 1539, 1539, 1540, 1541, 1542, 1543, 1544, 1545, 1546, 1547, 1548, 1549, 1549, 1550, 1551, 1552, 1553, 1554, 1555, 1556, 1557, 1558, 1559, 1559, 1560, 1561, 1562, 1563, 1564, 1565, 1566, 1567, 1568, 1568, 1569, 1570, 1571, 1572, 1573, 1574, 1575, 1576, 1577, 1578, 1579, 1579, 1580, 1581, 1582, 1583, 1584, 1585, 1586, 1587, 1588, 1589, 1589, 1590, 1591, 1592, 1593, 1594, 1595, 1596, 1597, 1598, 1598, 1599, 1599, 1600, 1601, 1602, 1603, 1604, 1605, 1606, 1607, 1608, 1609, 1609, 1610, 1611, 1612, 1613, 1614, 1615, 1616, 1617, 1618, 1619, 1619, 1620, 1621, 1622, 1623, 1624, 1625, 1626, 1627, 1628, 1629, 1629, 1630, 1631, 1632, 1633, 1634, 1635, 1636, 1637, 1638, 1639, 1639, 1640, 1641, 1642, 1643, 1644, 1645, 1646, 1647, 1648, 1649, 1649, 1650, 1651, 1652, 1653, 1654, 1655, 1656, 1657, 1658, 1659, 1659, 1660, 1661, 1662, 1663, 1664, 1665, 1666, 1667, 1668, 1668, 1669, 1670, 1671, 1672, 1673, 1674, 1675, 1676, 1677, 1678, 1679, 1679, 1680, 1681, 1682, 1683, 1684, 1685, 1686, 1687, 1688, 1689, 1689, 1690, 1691, 1692, 1693, 1694, 1695, 1696, 1697, 1698, 1698, 1699, 1699, 1700, 1701, 1702, 1703, 1704, 1705, 1706, 1707, 1708, 1709, 1709, 1710, 1711, 1712, 1713, 1714, 1715, 1716, 1717, 1718, 1719, 1719, 1720, 1721, 1722, 1723, 1724, 1725, 1726, 1727, 1728, 1729, 1729, 1730, 1731, 1732, 1733, 1734, 1735, 1736, 1737, 1738, 1739, 1739, 1740, 1741, 1742, 1743, 1744, 1745, 1746, 1747, 1748, 1749, 1749, 1750, 1751, 1752, 1753, 1754, 1755, 1756, 1757, 1758, 1759, 1759, 1760, 1761, 1762, 1763, 1764, 1765, 1766, 1767, 1768, 1768, 1769, 1770, 1771, 1772, 1773, 1774, 1775, 1776, 1777, 1778, 1779, 1779, 1780, 1781, 1782, 1783, 1784, 1785, 1786, 1787, 1788, 1789, 1789, 1790, 1791, 1792, 1793, 1794, 1795, 1796, 1797, 1798, 1798, 1799, 1799, 1800, 1801, 1802, 1803, 1804, 1805, 1806, 1807, 1808, 1809, 1809, 1810, 1811, 1812, 1813, 1814, 1815, 1816, 1817, 1818, 1819, 1819, 1820, 1821, 1822, 1823, 1824, 1825, 1826, 1827, 1828, 1829, 1829, 1830, 1831, 1832, 1833, 1834, 1835, 1836, 1837, 1838, 1839, 1839, 1840, 1841, 1842, 1843, 1844, 1845, 1846, 1847, 1848, 1849, 1849, 1850, 1851, 1852, 1853, 1854, 1855, 1856, 1857, 1858, 1859, 1859, 1860, 1861, 1862, 1863, 1864, 1865, 1866, 1867, 1868, 1868, 1869, 1870, 1871, 1872, 1873, 1874, 1875, 1876, 1877, 1878, 1879, 1879, 1880, 1881, 1882, 1883, 1884, 1885, 1886, 1887, 1888, 1889, 1889, 1890, 1891, 1892, 1893, 1894, 1895, 1896, 1897, 1898, 1898, 1899, 1899, 1900, 1901, 1902, 1903, 1904, 1905, 1906, 1907, 1908, 1909, 1909, 1910, 1911, 1912, 1913, 1914, 1915, 1916, 1917, 1918, 1918, 1919, 1920, 1921, 1922, 1923, 1924, 1925, 1926, 1927, 1928, 1929, 1929, 1930, 1931, 1932, 1933, 1934, 1935, 1936, 1937, 1938, 1939, 1939, 1940, 1941, 1942, 1943, 1944, 1945, 1946, 1947, 1948, 1949, 1949, 1950, 1951, 1952, 1953, 1954, 1955, 1956, 1957, 1958, 1959, 1959, 1960, 1961, 1962, 1963, 1964, 1965, 1966, 1967, 1968, 1968, 1969, 1970, 1971, 1972, 1973, 1974, 1975, 1976, 1977, 1978, 1979, 1979, 1980, 1981, 1982, 1983, 1984, 1985, 1986, 1987, 1988, 1989, 1989, 1990, 1991, 1992, 1993, 1994, 1995, 1996, 1997, 1998, 1998, 1999, 1999, 2000, 2001, 2002, 2003, 2004, 2005, 2006, 2007, 2008, 2009, 2009, 2010, 2011, 2012, 2013, 2014, 2015, 2016, 2017, 2018, 2019, 2019, 2020, 2021, 2022, 2023, 2024, 2025, 2026, 2027, 2028, 2029, 2029, 2030, 2031, 2032, 2033, 2034, 2035, 2036, 2037, 2038, 2039, 2039, 2040, 2041, 2042, 2043, 2044, 2045, 2046, 2047, 2048, 2049, 2049, 2050, 2051, 2052,

の円形に仕上げているが、用途は不明である。

C. サンゴ礁加工品（第94図12）

長径8cm、短径4cmの扁平なサンゴ礁の片側側面にノコギリ歯状に刻みを入れたものであるが、欠失している部分も多い。刻み目間に數カ所刺突して凹みを入れている。羅符的なものであろうか。

（本田）

b. 自然遺物

(1) 獣骨

鹿児島大学農学部教授 大塚 開一

〃 助教授 西中川 駿

今回、鹿児島県大島郡笠利町の教育委員会より調査の依頼を受けた「宇宙貝塚」出土の動物遺物標本のうち、陸棲の哺乳動物と思われるものについて、別表のように鑑定した。

出土した獣骨のうち、大多数はイノシシの骨である。イノシシは本土や九州産のものよりも小型で、リュウキュウイノシシと推定できるが、骨端軟骨の消失した成熟イノシシと推定できる骨からみると非常に小型のイノシシが生息していたようである。

つぎに、骨の点数からみると多数のウシの骨片がM-19区-1層から発掘されている。これらは一頭のウシの四肢骨と推定できるが、表面近くから出土しており、骨質のいたみもそれほど著しくなく、古い時代のウシとは考え難い。ウシの大きさは、先年同じ宇宙貝塚より出土し、鹿児島県教育委員会に保存されていたウシの骨と比較すると小型であるが、現在の和牛より幾分か小さい程度である。

M-16区-7層より出土したと記録されたウシの右側大腿骨の骨頭部分はM-19区-1層出土のウシの左側大腿骨頭と同大で、同一個体のものと考えられ、なんらかの偶然で、隣のM-16区にまぎれこんだのではないかと疑われる。Aトレンチ出土のウシの骨と齒はM-19区-1層出土のウシより小型で、明らかに別の個体のものであるが、擾乱層と集石部から出てきているので、何時頃のウシか不明である。

また、大きさと形状から同一個体のものと推定できるウマの後臼歯3個がAトレンチの擾乱層と集石部から得られている。このウマは小型で、現在のトカラ馬程度の大きさと推測する。

さらに、ただ1個鹿の角がN-7区-7層より出土している。これには、人工的な丸い孔があけられている。この他には1点の鹿の骨もみられていない。出土層にあたる時代に奄美大島に鹿が生息していた証拠とは考え難い。

第8表 地点、トレンチ、地層別
魚骨出土個数

pm：前上頸骨 pm：後上頸骨 ap：前齒骨 ant：頭頂骨 np：上頸骨 lg：下頸骨 lg：舌形骨 lm：舌形骨
 m：後上頸骨 m：後齒骨 m：頭頂骨 np：上頸骨 lg：下頸骨 lg：舌形骨
 m：後上頸骨 m：後齒骨 m：頭頂骨 np：上頸骨 lg：下頸骨 lg：舌形骨
 m：後上頸骨 m：後齒骨 m：頭頂骨 np：上頸骨 lg：下頸骨 lg：舌形骨

第9表 地点、トレンチ、地層別魚骨出土個数

第19表 地点、トレンチ、地層別魚骨出土個数

卷之三

(3) 貝類

鹿児島大学名誉教授 理学博士 平田国雄

1. 次に掲げる貝類目録は、昭和53年8月5日から8月23日にわたって行われた、宇宿貝塚発掘調査の出土貝類目録である。

2. 出土貝類は、38科120種に及ぶ。すべて、現在、奄美の海と陸と川に生息する種類である。このうち種類の多い9科を、種数順に並べると、次のとおりである。

1. イモガイ科	12種	27個体	6. リュウテンザザエ科	5種	22個体
2. タカラガイ科	10	31	7. オオカサガイ科	5	15
3. アマオブネガイ科	9	193	8. アクキガイ科	5	9
4. マルスダレガイ科	8	51	9. イトマキボラ科	5	7
5. スイショウガイ科	6	20			

3. アクキガイ科の貝は、サンゴ礁など岩礁性の海岸に圧倒的に多産する貝であるが、味が苦いので、現在も、この苦味を好む特殊な味覚の人以外は、あまり食べない。この遺跡の採集品では、8位の5種9個体で、あまり多くない。

4. 種別に個体数の多いもの6種をならべると、次のとおりである。

1. アマオブネ	159個	2. オハグロガキ	106個	3. イシダタミ	83個
4. イソハマグリ	39個	5. ニシキアマオブネ	24個	6. ハナマルユキ	15個

アマオブネ、オハグロガキ、イシダタミ、いずれも味がよく、現在も多産する。

5. このほかに、ウスカワマイマイ80個、タメトモマイマイ64個も、個体数が多いが、この2種をふくむ貝塚産出の陸産貝は、すべて食物としたものではなく、ちりだめに集まつた生貝の遺骸であると考えるべきである。

6. シレナシジミが1個ふくまれていた。この貝は現在、住用の河口干潟が生息北限とされている。

第11表 宇宿遺跡出土貝類目録

貝の種類 ■貝	出 土 地 点 区 分			個体数
1. ちゅうがきかい科 リュウテンザザエ科	I. M-10, 6F(1) pit, P-7, 6(2)			3
2. おひらさがい科 フタノハ 2' オオフタノハ	I. M-2, 1, (1) I, M-5, 5(1), M-20, 1(1) I, P-7, 4(1) I. N-7, 2(1)			4
3. ヨメガカサ	I. M-10, 7(1) pit, P-7, 6F(2)	P-7, 6(1)		3
4. オチバガサ	I. M-10, 6(1) I, M-10, 6F(1) I, pit, O-7, 6, (1) pit,			
5. オオベコウガサ	6(1)			4
	I. M-5, 7(2) pit, O-7, 6(1)			3
6. みあがい科 ミミガイ	I. G-7, 6(1)			1
7. イボアナゴ	I. M-9, 7(1) pit, O-7, 6(1) pit, O-7, 7(1)			3
8. にしきうずがい科 イシダタミ	I. G-7, 1(1) I, M-10, 6F(1) pit, P-7, 6(42) pit, P-7, 6F(39)			83
9. ムラサキウズ	I. M-4, 7(1) I, M-5, 7(1) I, M-10, 6(1)			3
10. ギンタカハマ	I. M-5, 7(2) I, M-16, 1(1) I, M-16, 7(1) I, O-7, 4(1)			5

第4章 総 説

笠利町東海岸における遺跡の分布が明らかになったことから、海岸砂丘が内陸部から形成がはじまり、外洋へ向かって進んで行ったことが明らかになった。一方宇宿貝塚においても、日本全城において明らかにされつつあるクロスナ層に該当する層の存在がたしかめられたが、反面奄美の太平洋岸砂丘遺跡は、遺物の新旧共存の現象が見られ、これは人為的なものではなく、強風による自然現象の結果と判断され、その原因の一半は、風力による deflation によるものであることが推定された。このことから砂丘遺跡の調査は、特に広範囲にわたって実施することが、必要条件となることが認められた。

昭和30年の調査によって、宇宿貝塚において、奄美における最初の、住居址の発見が行なわれ、続いて沖永良部島住居貝塚でも発見された。共に1辺約2mの方形石組住居址であった。時期はいずれも宇宿上層式に属するものである。今回もまた宇宿貝塚において、前回発見の石組住居址と、10mの間隔をおいて、北々西方向に、全く同形式、同時期、同規模の石組住居址が発見された。この住居址の北西約6mには、石をあしらった、同時期の落ち込みの一部が発見されている。更にその北西に隣接して、同時期の土壙墓が配置されていた。これによって見ると、宇宿の砂丘台地は、宇宿上層式の時期の、埋葬墓を伴う集落地であったことがわかる。ここでは、この時期はまだ集落と墓域は、未分化の状態にあったと見られる。

両石組住居址には、いくつかの共通点があるが、最も注意を惹かれたのは、両者が共に、夥しい疊群に覆われていたことである。住居址のある地点に限って、疊群に被覆されていることは、住居址と疊群との間に、何らかの結びつきがあったことを示すものであろう。

一般に、遺構に疊が多く使用されていることは、砂丘の固定化に石が適していたことによるものと思われるが、石組住居址もそのような原因によるものかもしれない。方形の住居は、切妻の屋根形と考えられるが、夏期に南からの強風にさらされる奄美において、風の来襲方向に屋根の傾斜面を構築し、疊を屋根に置いて風害を防除したものかもしれない。

現代においても防風林、防風石垣、屋根の特殊構造など、風に対する配慮は大きい。

石組住居址より下層から、面縄東洞式と市来式を伴う集石群が、M-5区7層から検出されたが、僅約2mの円形石組の一部と考えられる。中央部がくぼみ、北側に木炭の集積部、それに隣接して貯蔵穴らしい遺構があり、床面に3点のまとまった土器が置かれるなど、敷石住居址の可能性がある。これは明らかに市来式の時期のものであった。この集石群の南、約3mには、宇宿下層式の時期の貯蔵穴群が配置されており、宇宿下層式の時期の集落層が、前述の宇宿上層式の集落層の下に、重なっていることを示している。

出土遺物については、本土との交流が長期にわたって、継続的に行なわれたことがあとづけられ、さらにその影響を受けながら南島の先史文化が推移して行った状態が認められた。

従来宇宿貝塚では、南九州から移入された、縄文後期の市来式土器が最も古いものと思われていたが、今回は曾畠式かと思われる土器が、X-7区の最下層から出土したが、壁の崩壊によって粉

失し、確認するに至らなかった。

P-7区第9層、N-7区第7層からは、貝殻条痕を有する薄手の直口で、口唇部に刺突連点を有する土器、口縁部に細い凸帯を貼り付け、凸帯には連点、器面には爪形文を施すなど古い様相を示す移入土器が出土した。おそらく中期を下らないものと思われる。

後期になっては、比較的に多く市来式土器が移入されており、引き続いて草野式が若干見られ、繩文晩期の黒川式が出土し、弥生時代になっては、前期、中期、後期の土器が移入、あるいは製作されている。

移入土器の中で南島土器への影響が大きいのは市来式である。その一つは面繩東洞式と市来式の融合という形であらわれており、今一つは器台付皿形土器の出現である。皿形土器は草野式にもあって、市来に引き続いて影響があったとみられる。

弥生式土器の場合、本遺跡では、影響は明らかではないが、弥生後期の土器と、宇宙上層式土器との共伴関係が明らかにされた。

南島の先史時代土器の推移を見ると、面繩東洞式では、深鉢形土器を主体として、市来式の影響による台付皿形土器の他と、嘉瀬遺跡では、脚台付の二重口縁土器を伴ない、なかなか多彩であるが、主流は深鉢形土器で、面繩西洞式まで、深鉢形が継続する。しかし土器の質の面では、胎土に砂を混ぜて、焼成の良好な、条痕を有する従来の土器に対して、面繩西洞式は、小量ながら、砂粒を含まず、黄褐色で、宇宙上層式土器に類似した質の土器が同じ型式の中に発生する。面繩前底式は丸底または尖底となり、窓窓I式になると、器形が壺形と甕形または鉢形に分れて多様化し、土器の質も宇宙上層式に等しくなり、ついに無文で壺形と甕形からなる宇宙上層式に至るのである。

石器では繩文時代晩期に、南九州で見られるような小形石棒が発見され、弥生時代のものとしては、ノミ形石斧が検出され、土器文化と共に石器の伝播も行なわれたことを示し、技術的な面では、サウチ遺跡で、ふいごの口、紡錘車が発見されて、製鉄・紡織の技術の伝播を示したが、宇宙貝塚では布目麻土器が発見されて、織布技術の伝播が考えられるようになった。

埋葬については、宇宙上層式の時期は、集落と墓域が尚分離しておらず、地域文化の特性を示す一方、その埋葬形態には、注意すべき特色が見られる。袋状の土壤。成人女性の跨間に嬰兒を合葬したこと。嬰兒遺骸上に直接磚が置かれたこと。埋葬中最後の埋土上に、清浄な砂を散布したことなど種々の習俗が見られる。

成人女性が労働に従事した跡形がないという、特異な性格を有し、当時は重宝であると共に、祭器であったと思われるガラス製玉類を、類飾として着装していたこの女性の存在は、当時の社会を考える有力な手がかりともなろう。

埋葬の時期は弥生時代後期に該当するものと考えられるが、ガラス製玉類の分布が、この地域まで分布していたことは驚くべきことである。（河口）

追記C-14年代（日本アイソトープ協会）

コード番号	依頼者のコード	C-14年代
N-3378	No.1 (M-7.6下貝)	3510±65Y.B.P. (3410±65Y.B.P.)
N-3379	No.2 (P-7.7貯藏穴3貝)	3600±90Y.B.P. (3500±85Y.B.P.)
N-3103	サウチD-7第7層	1920±80Y.B.P. (1860±75Y.B.P.)

第12表 挿岡土器一覧表

第13表 植物土壤一览表

第14表 植物土器一覽表

第15表 神岡土器一覧表

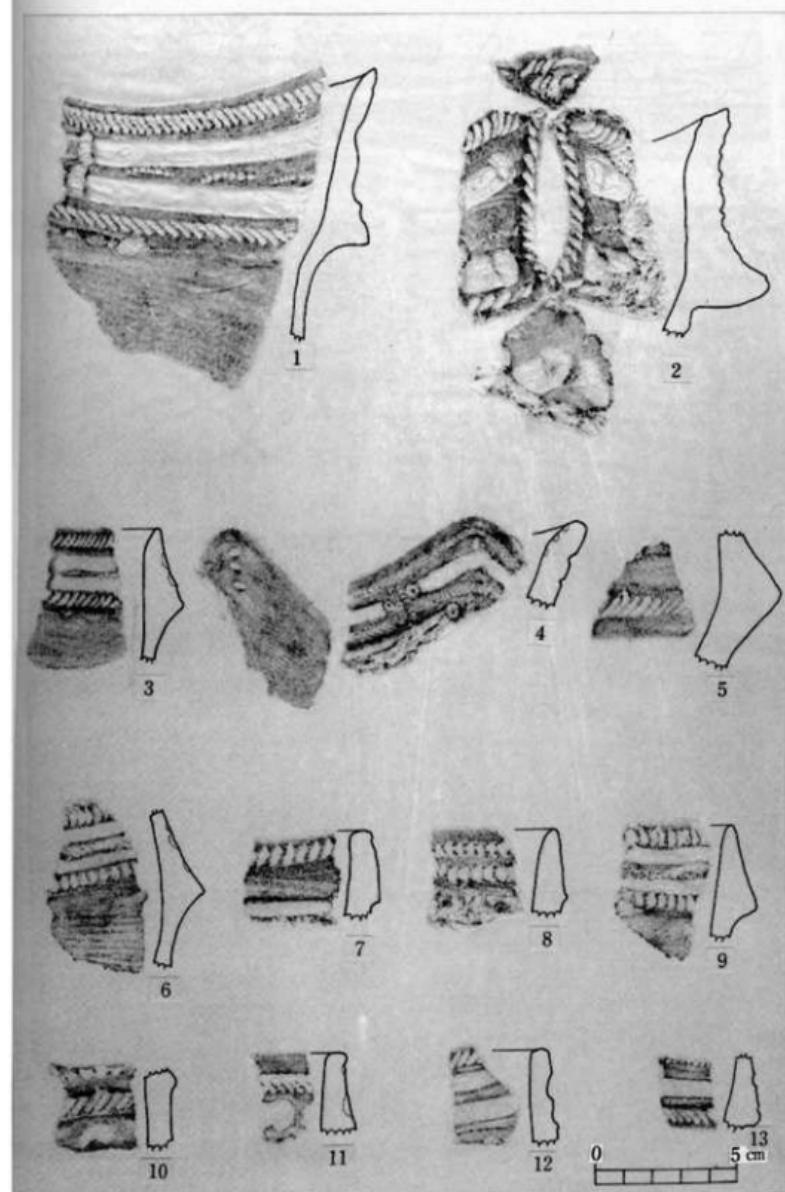
第16表 捷岡土器一覽表

• 100

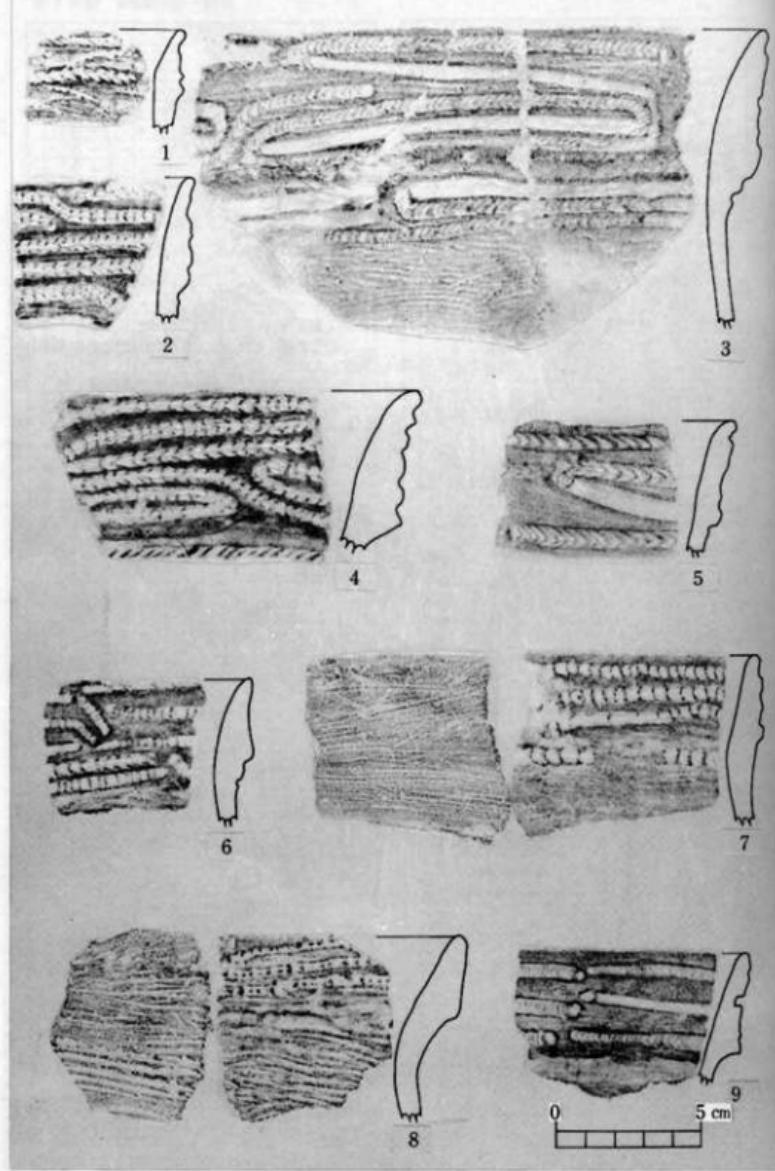
第17表 月器・夢飾品一覧表

第18表 図版・魚骨一覧表

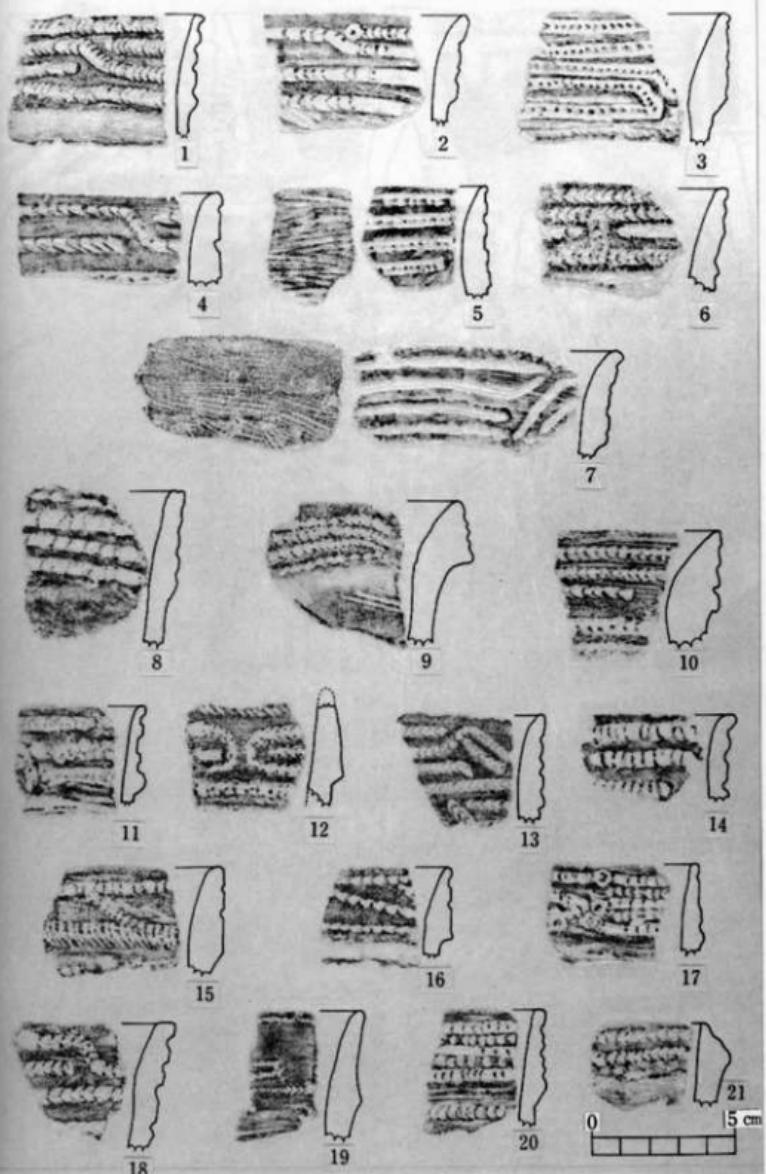
第19表 捷闊石器一覽表



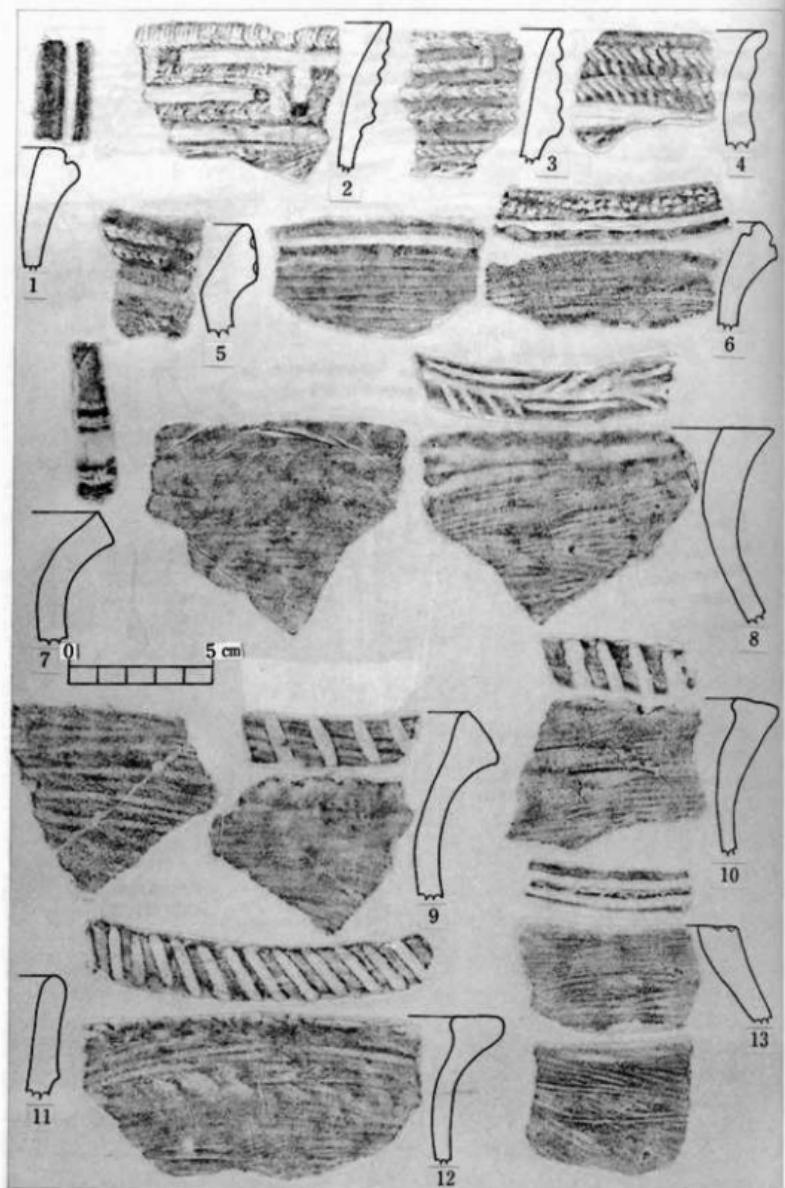
第33図 土 器



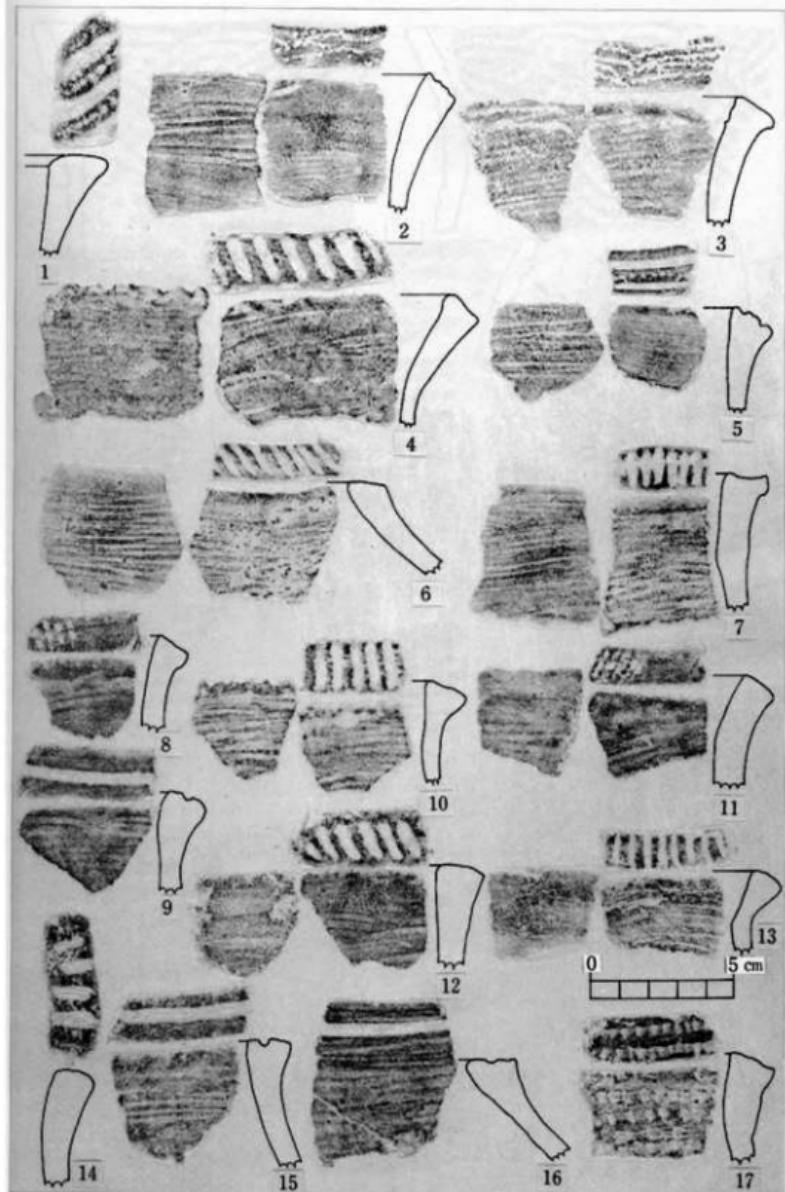
第34図 土 器



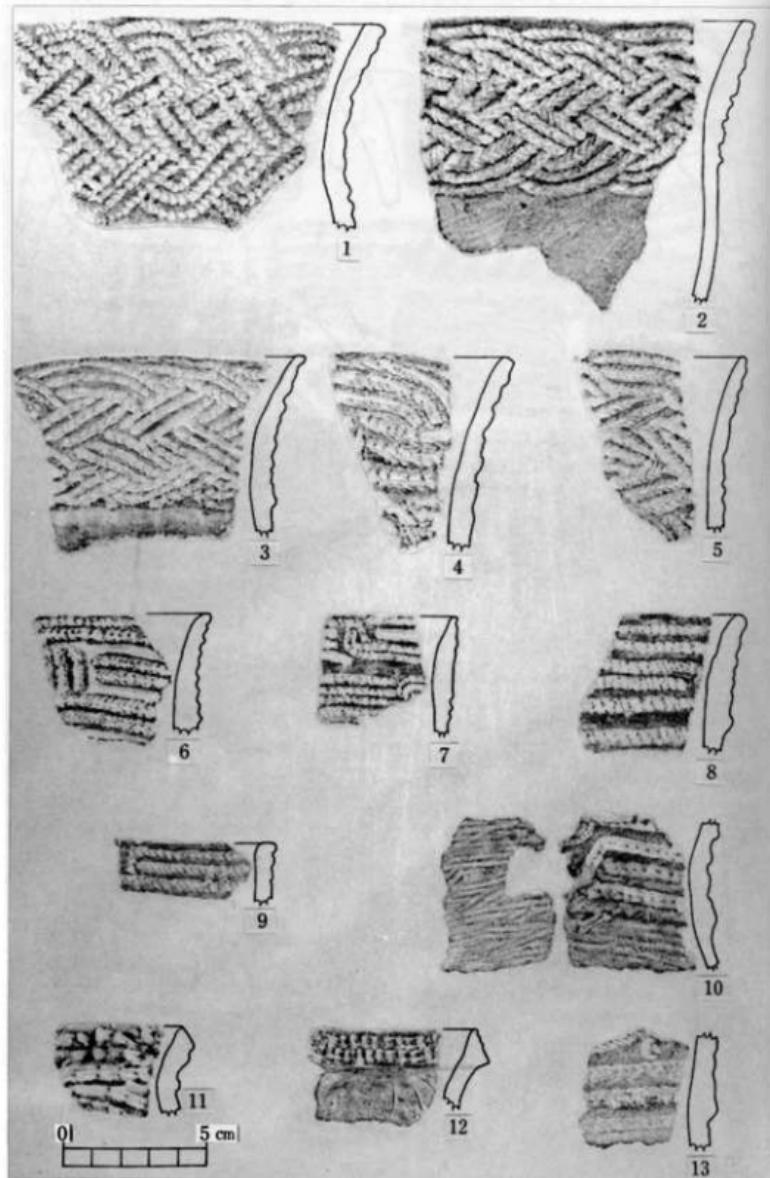
第35図 土 器



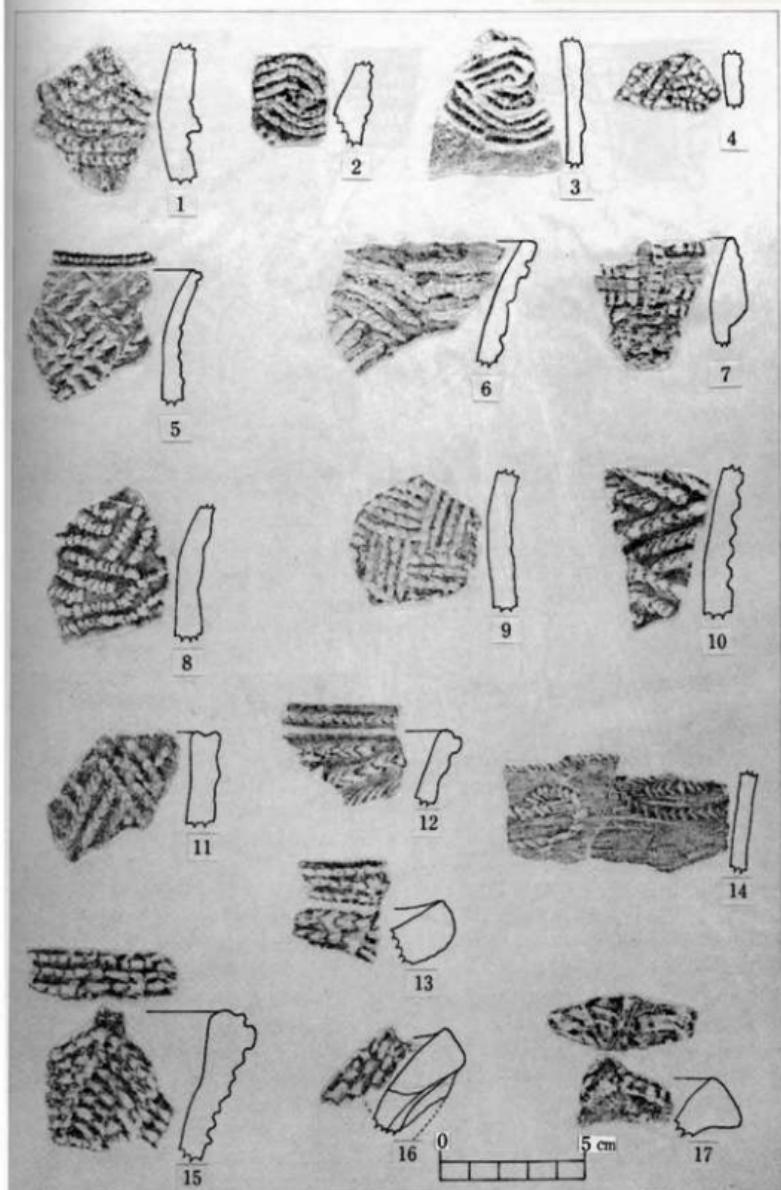
第36図 土 器



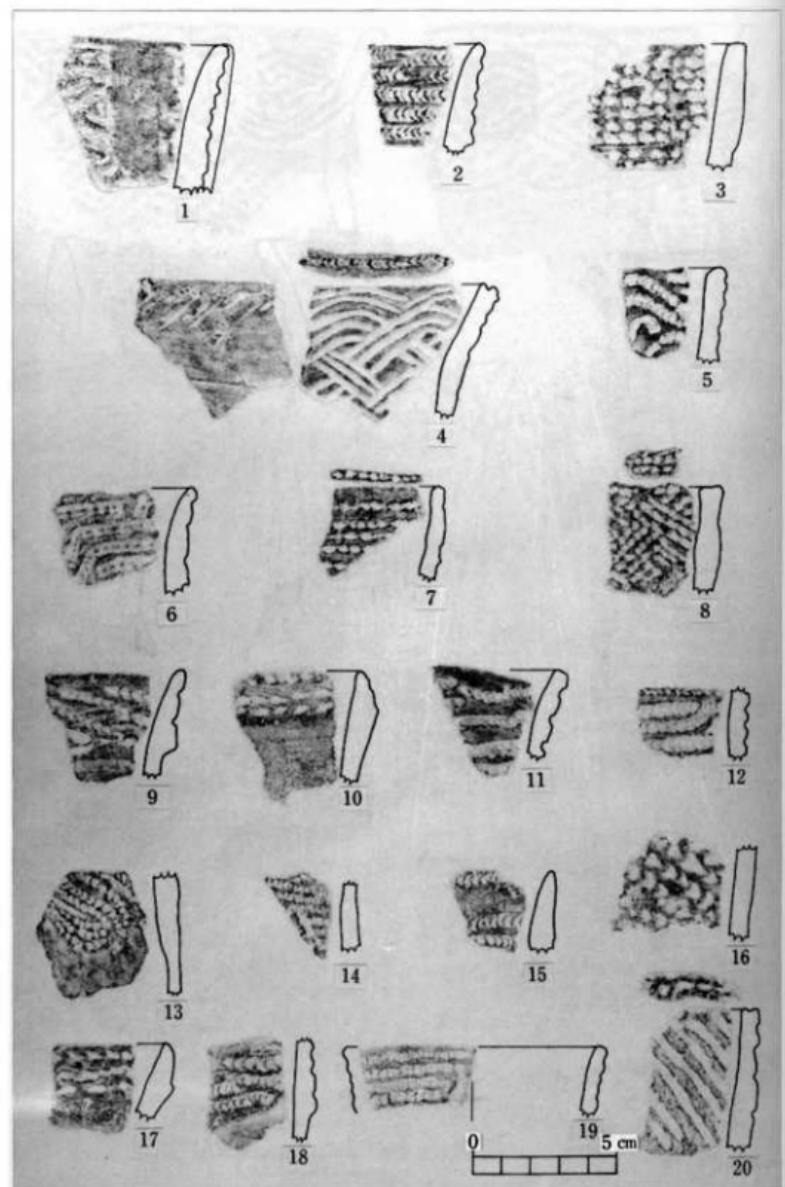
第37図 土 器



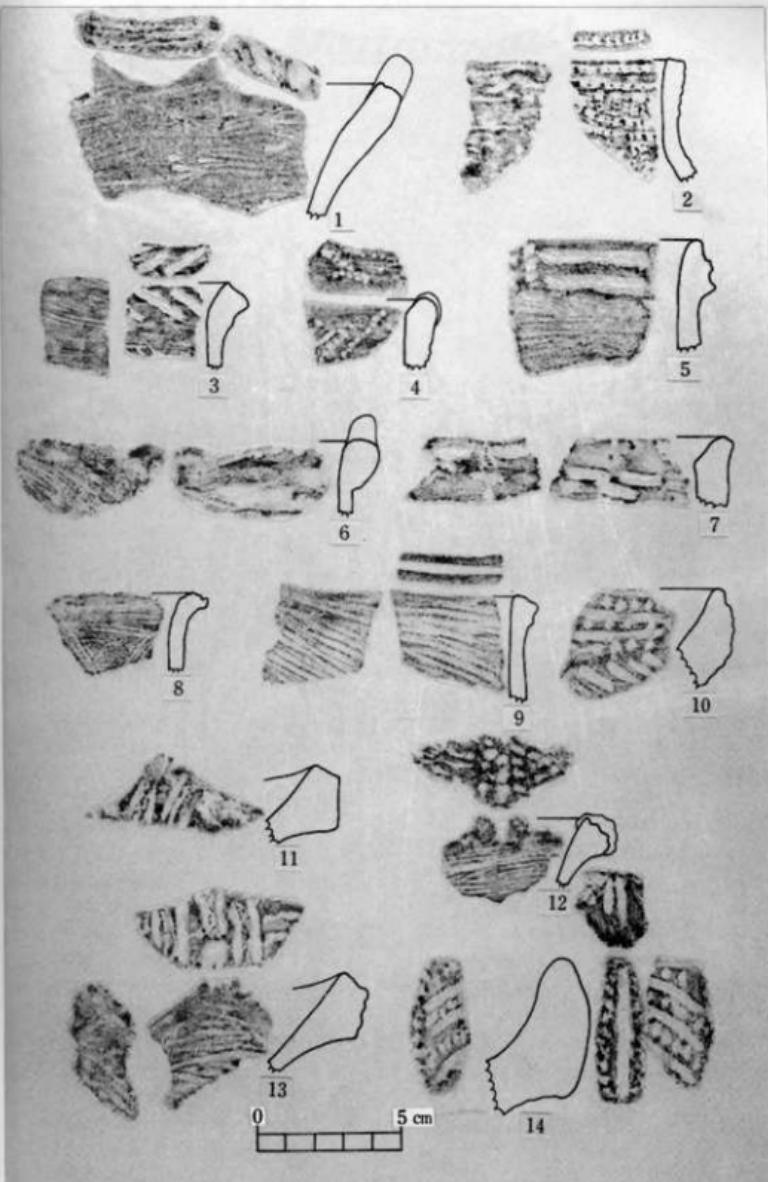
第38図 土器



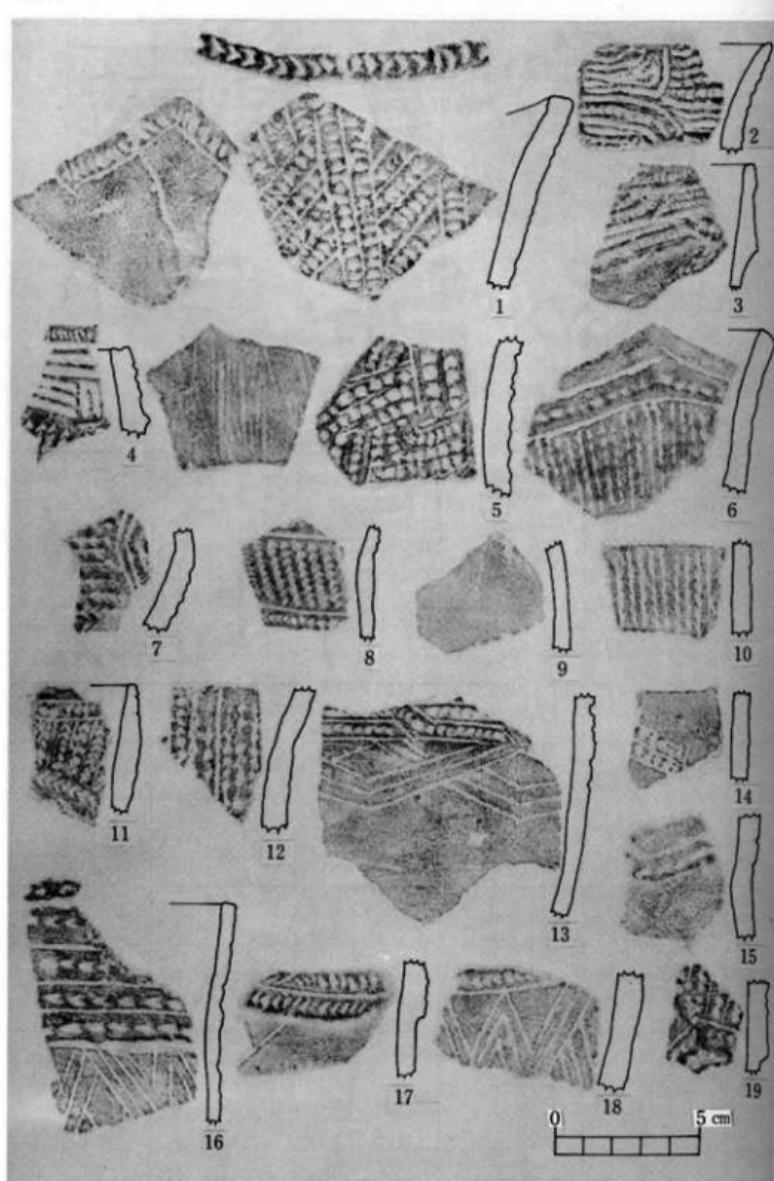
第39図 土 器



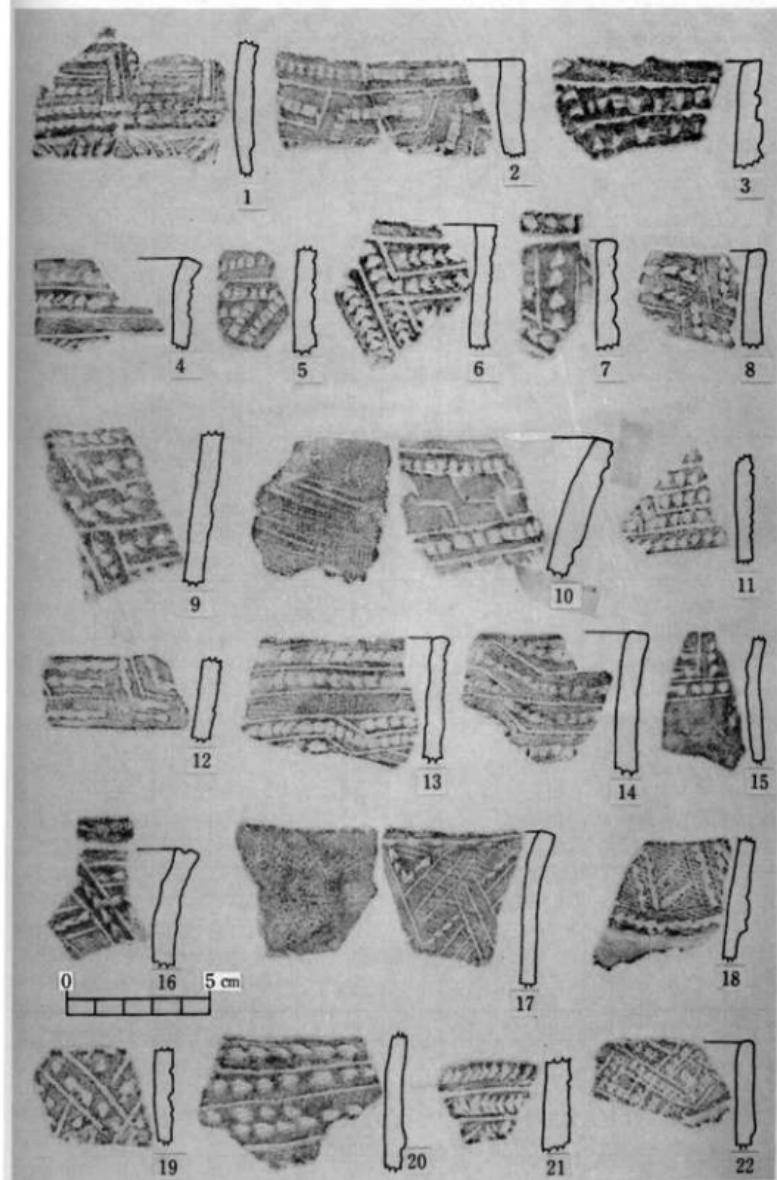
第40図 土 器



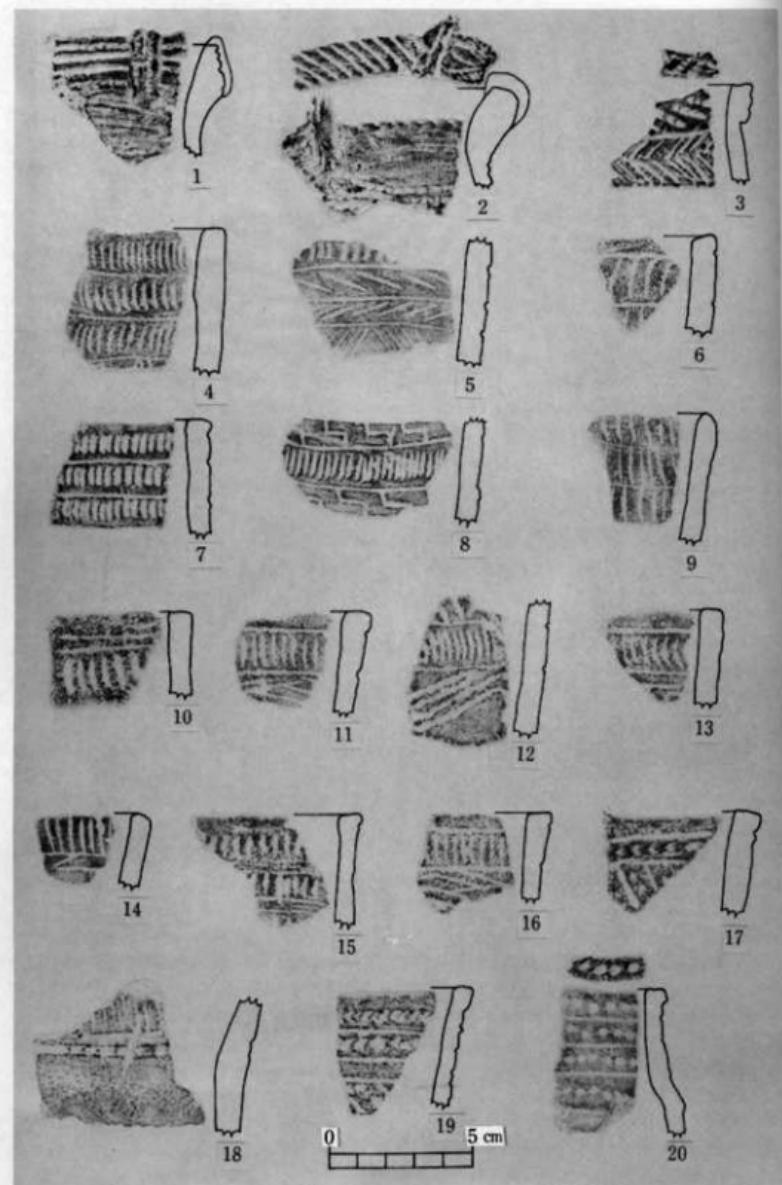
第41図 土 壑



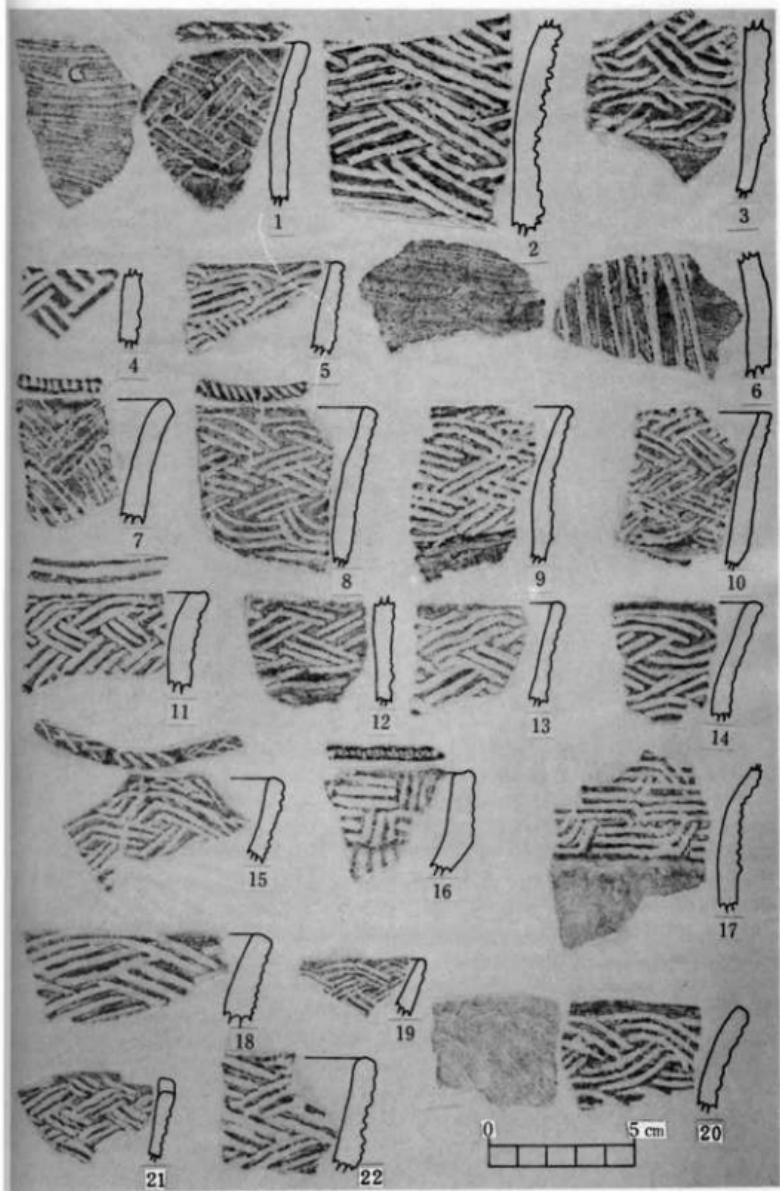
第42図 土 器



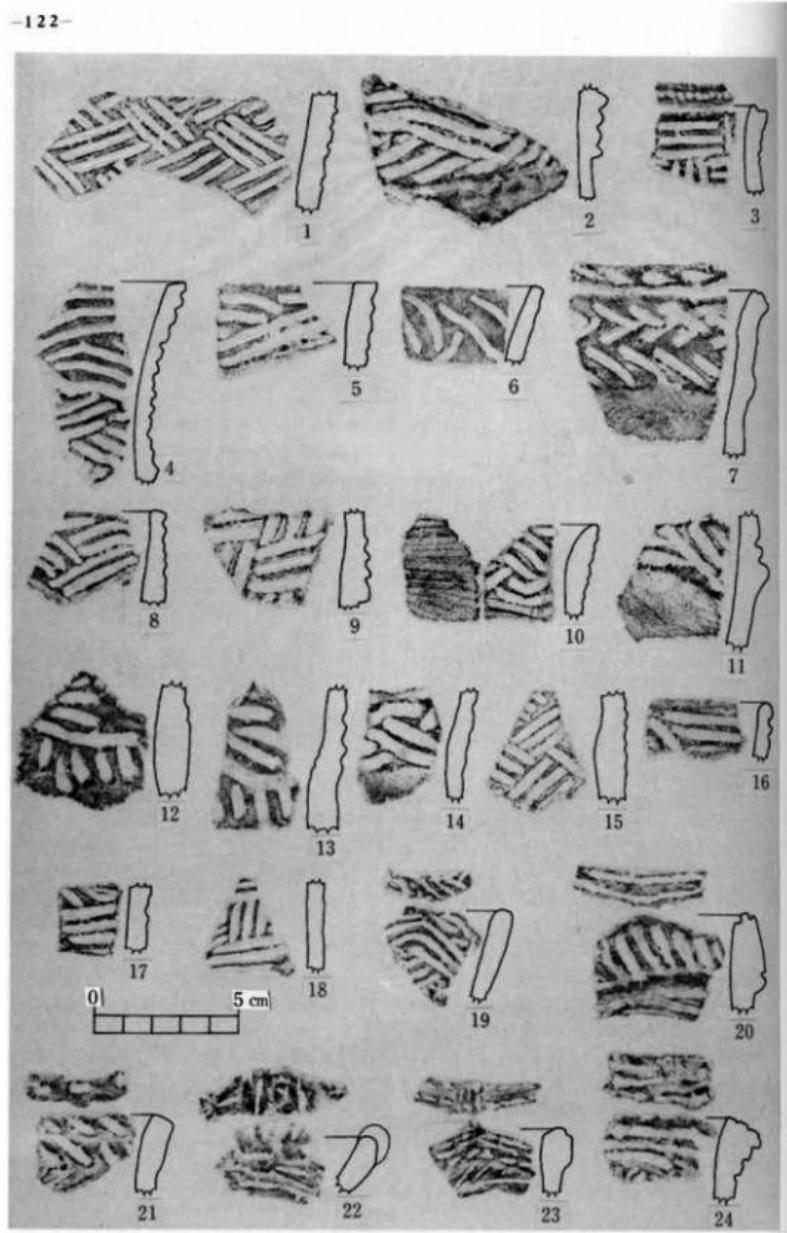
第43図 土器



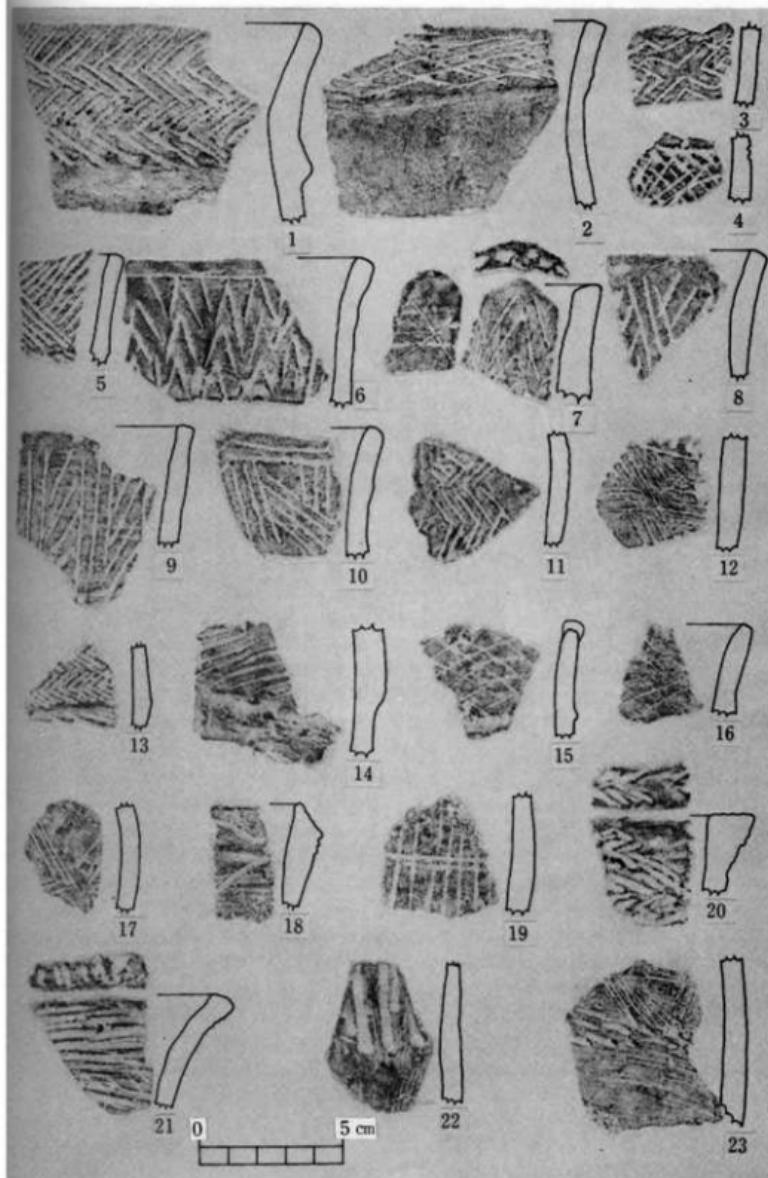
第44図 土 器



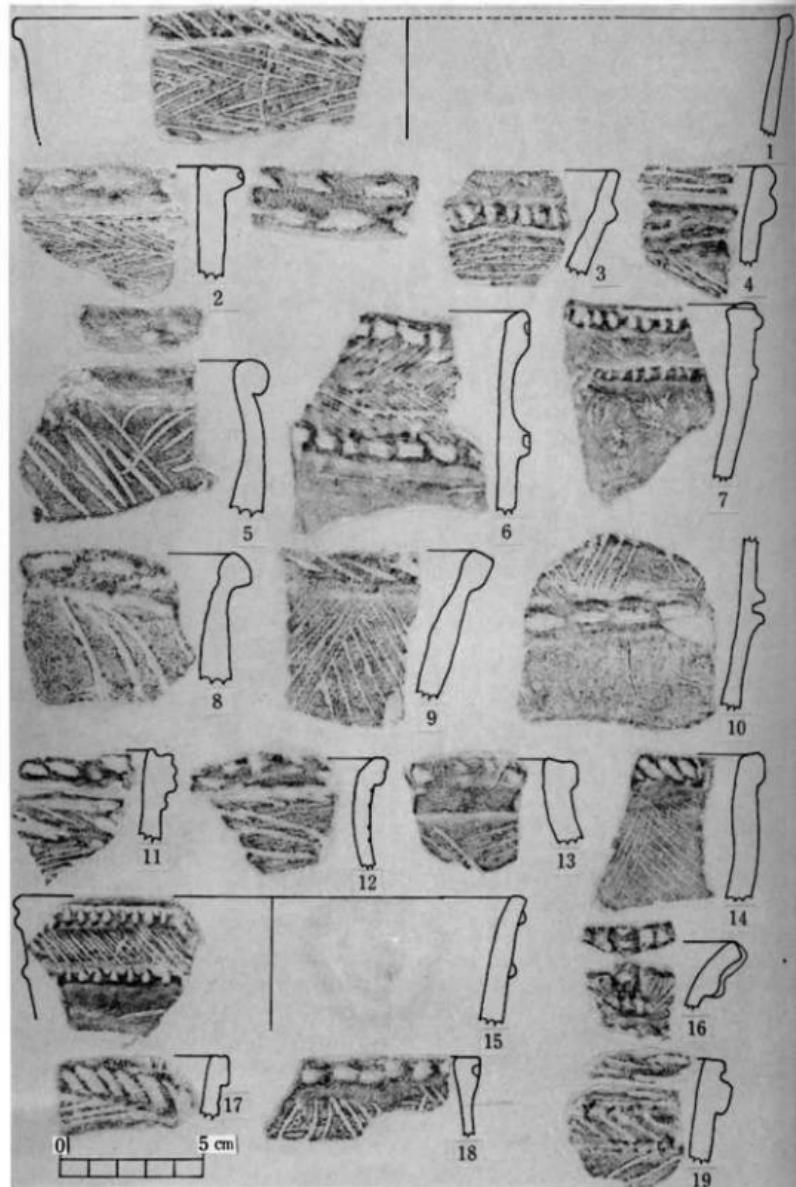
第45図 土 器



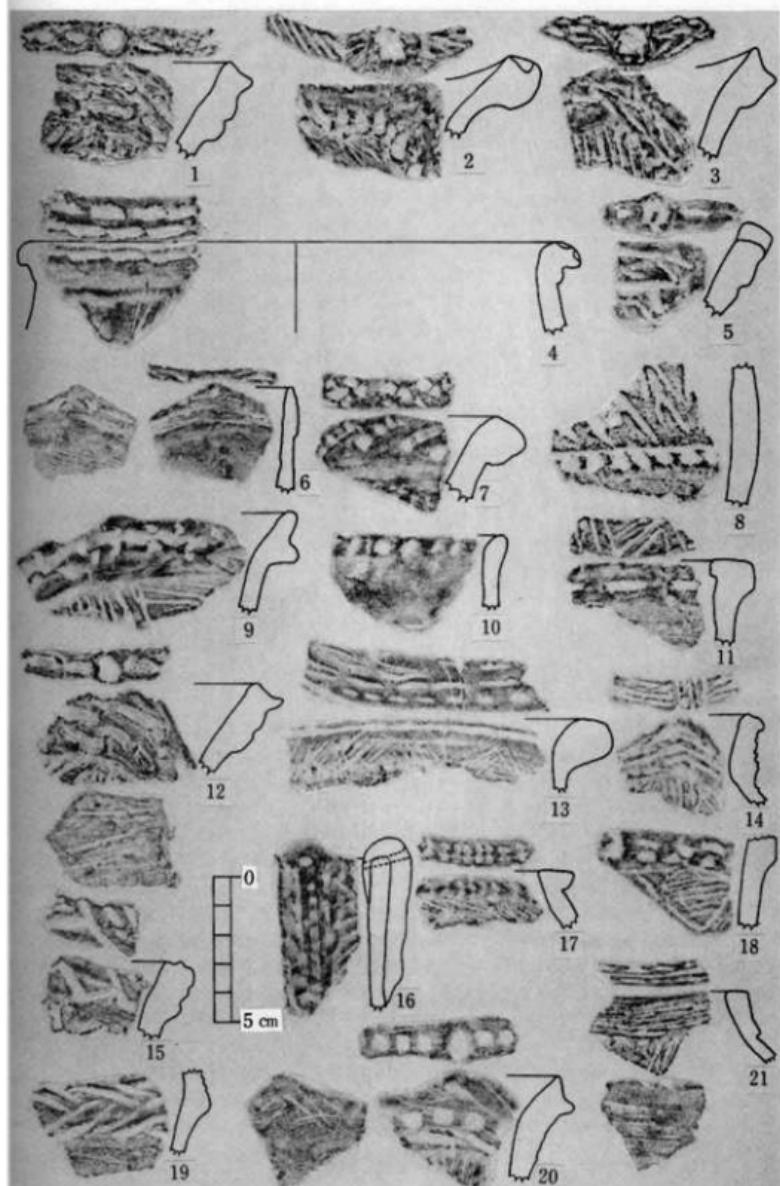
第46図 土器



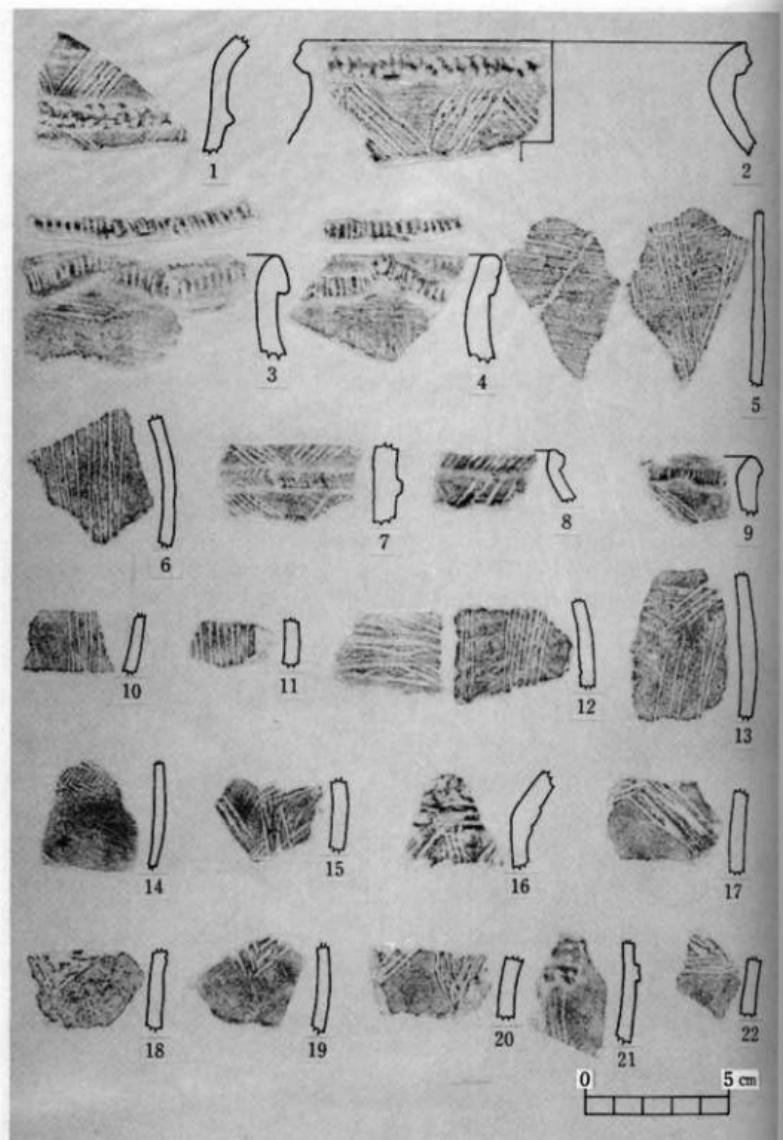
第47図 土 器



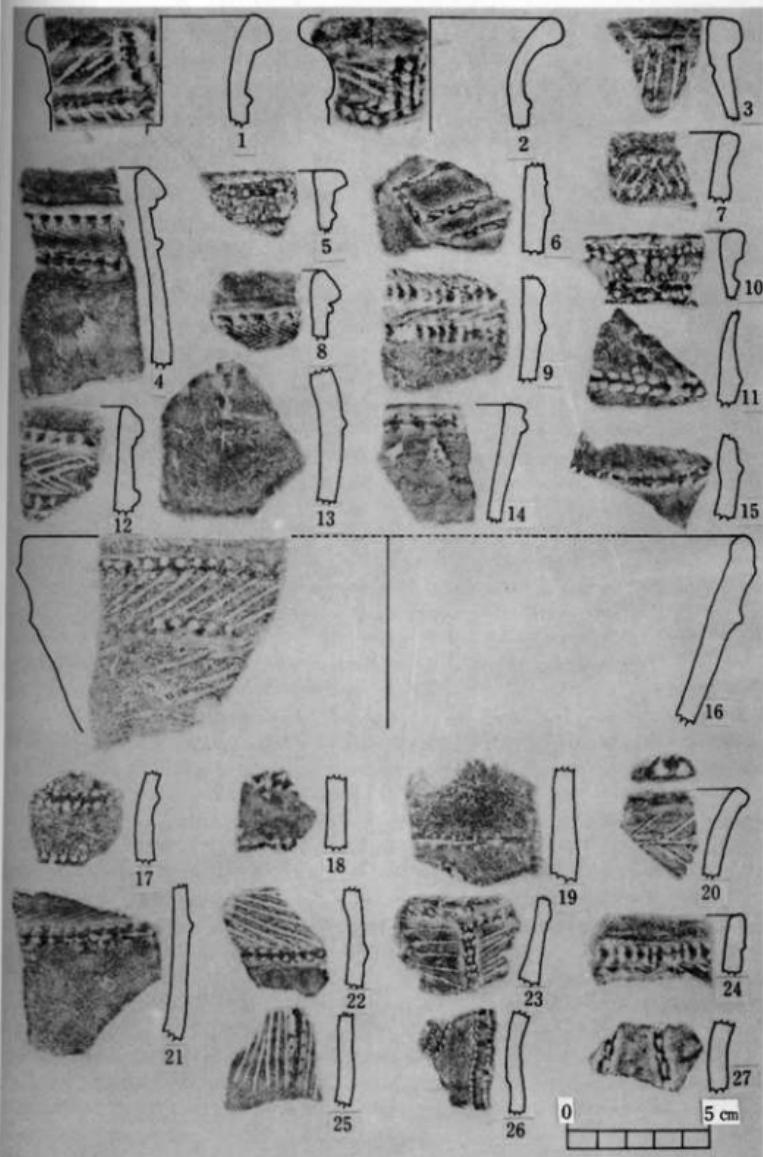
第48図 土 器



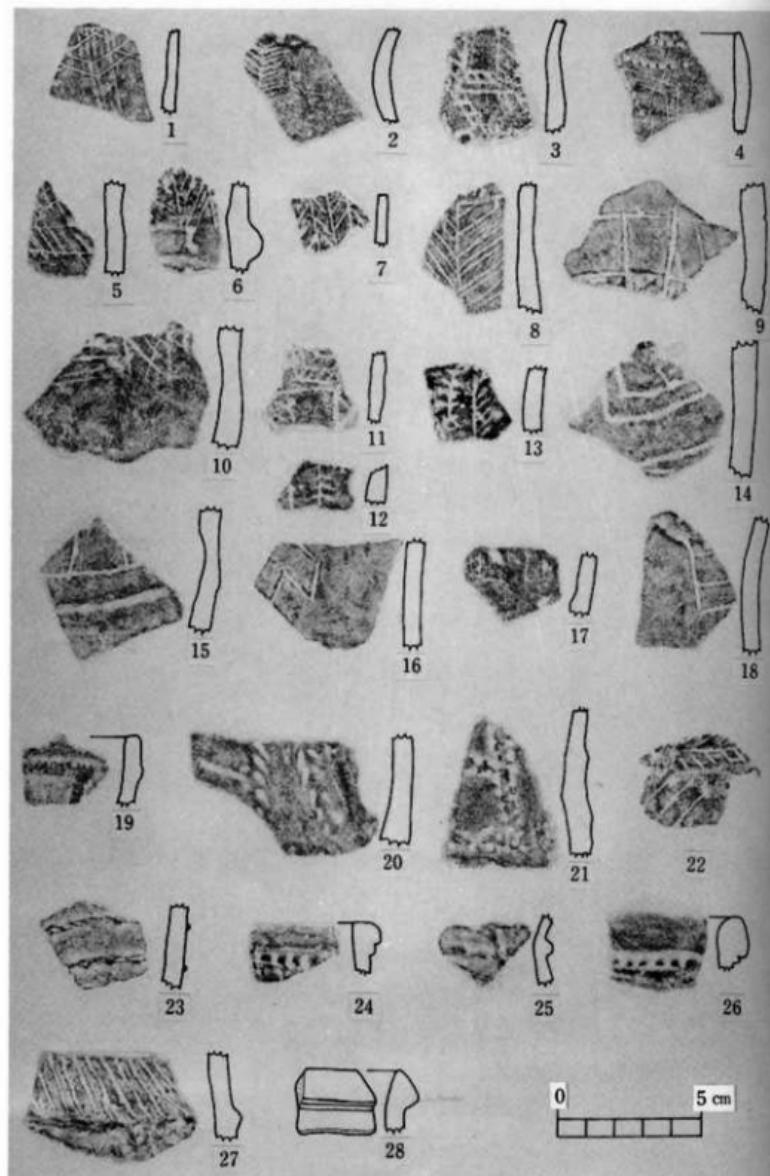
第49図 土 器



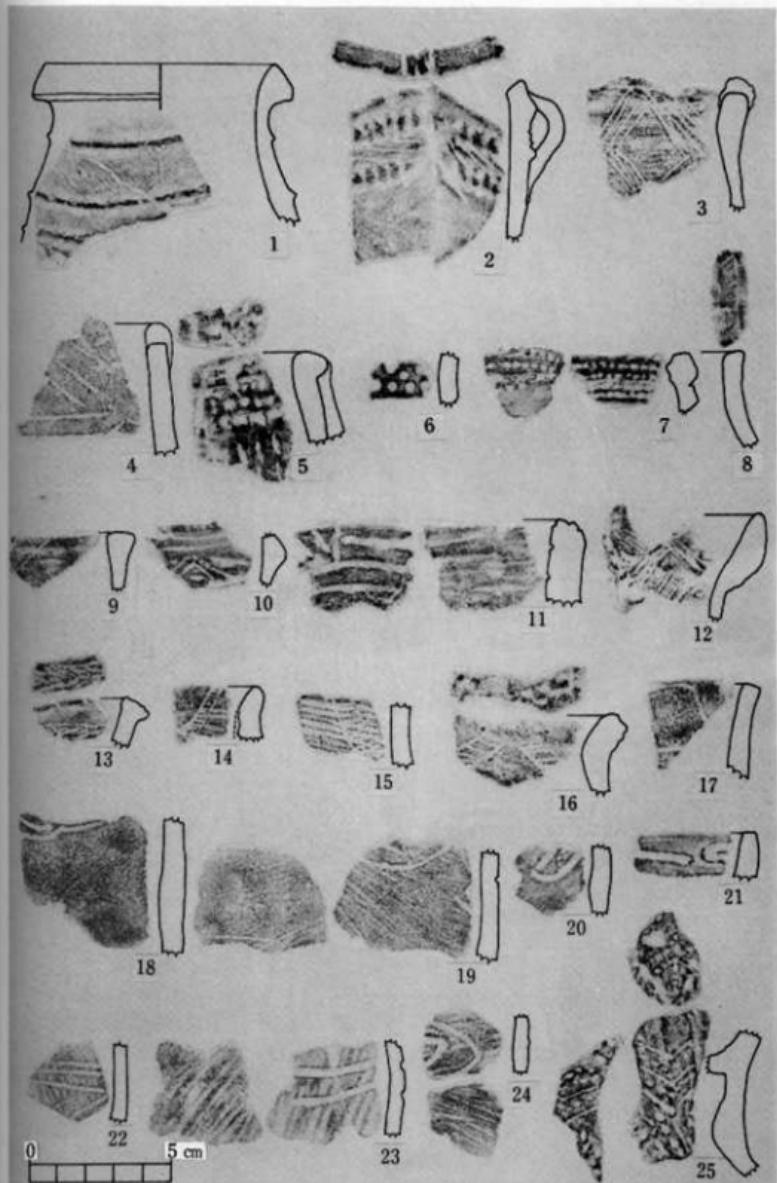
第50図 土 器



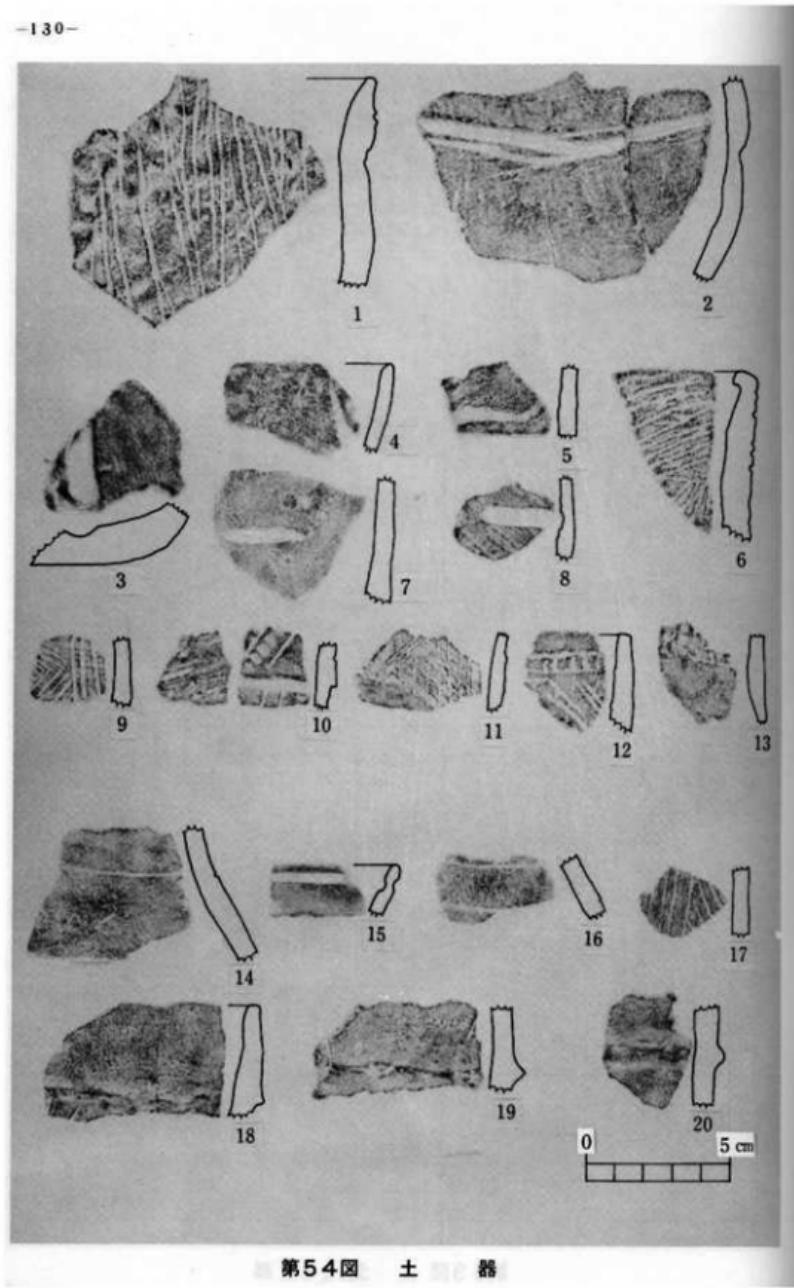
第51図 土 器



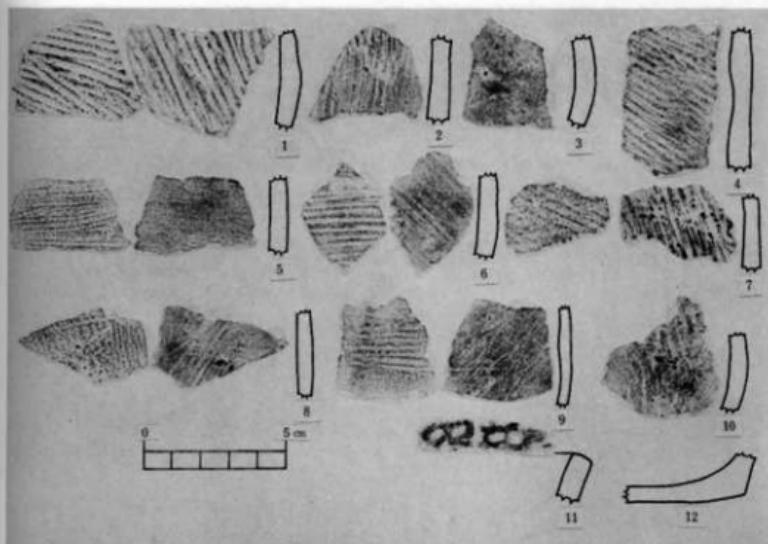
第52図 土 器



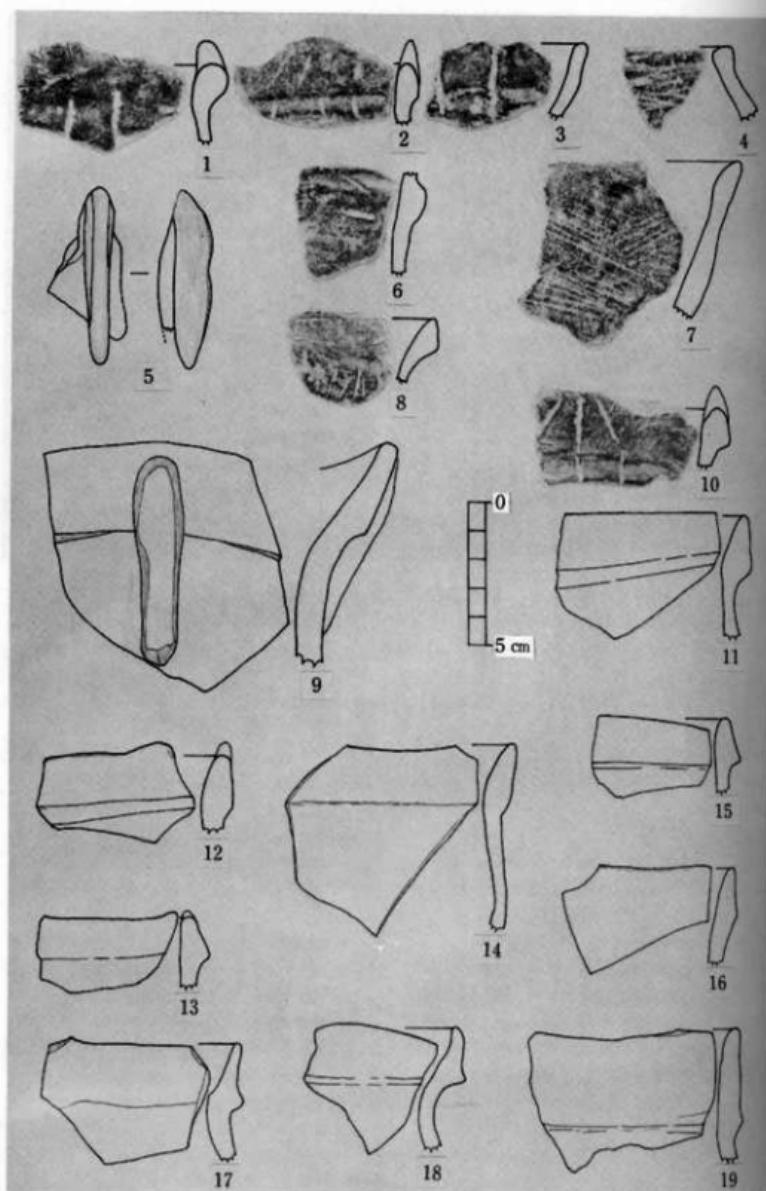
第53図 土器



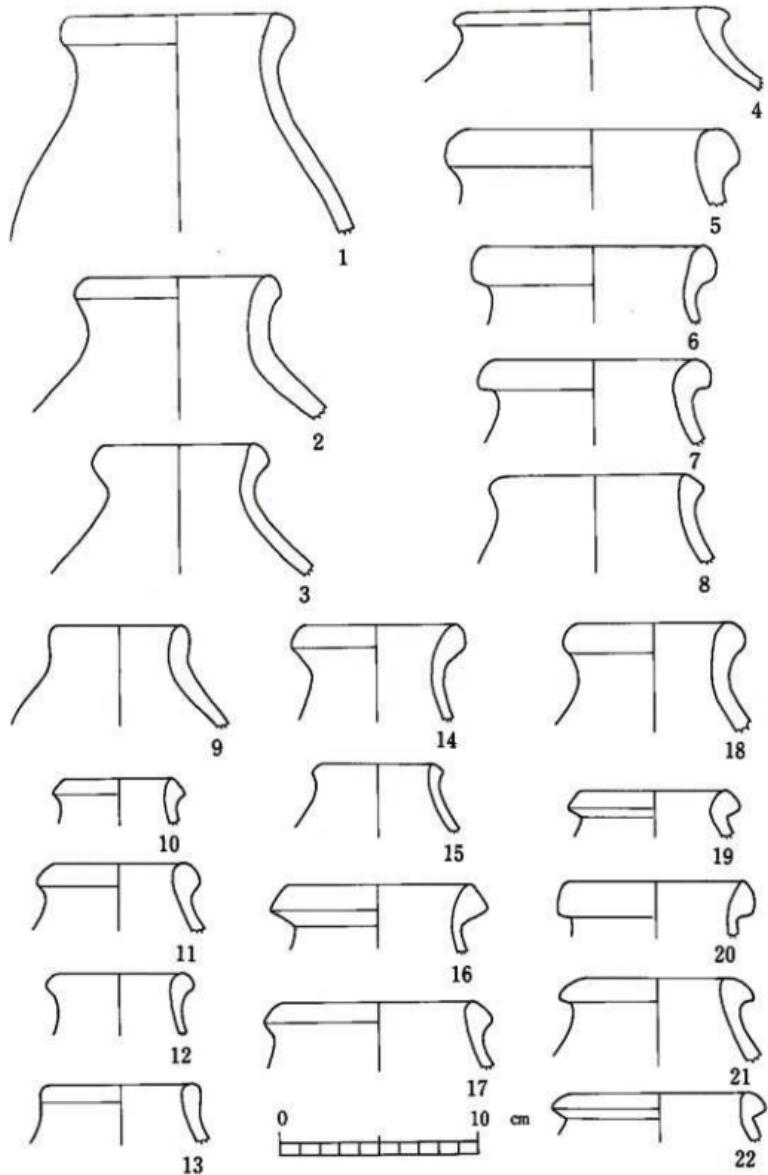
第54図 土器



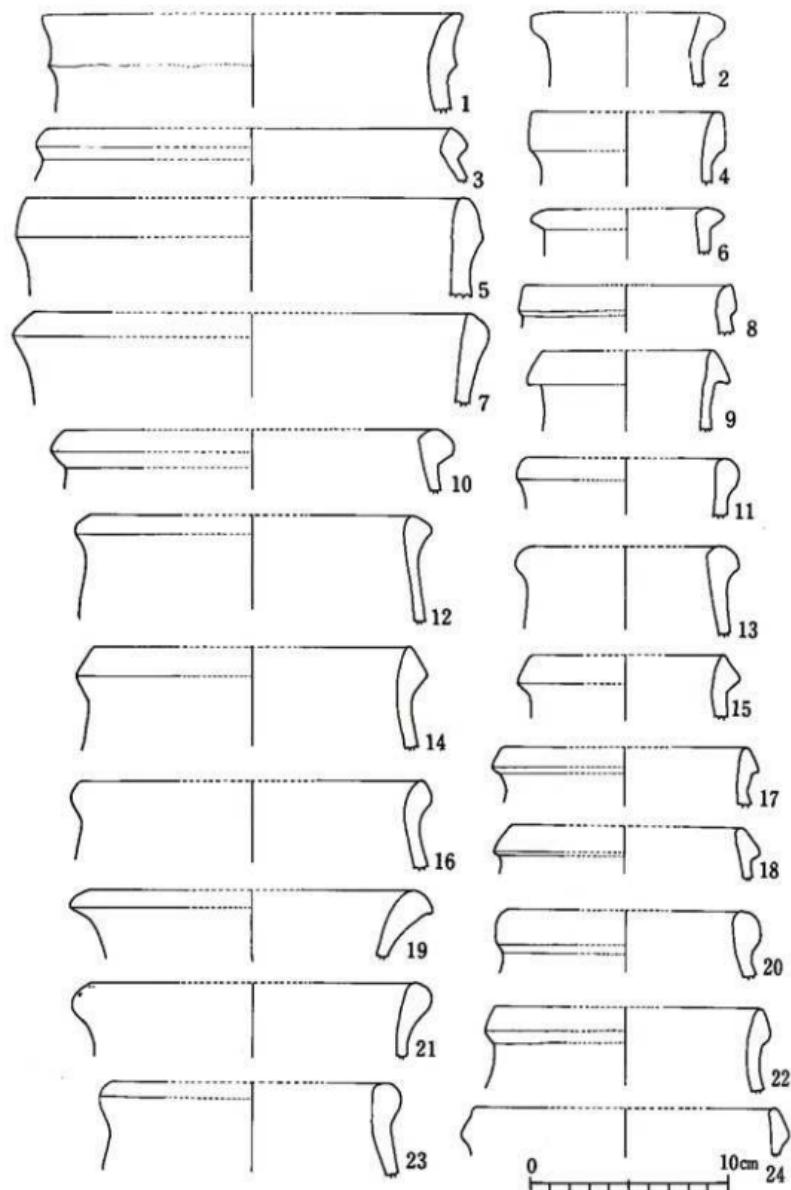
第55図 土 器



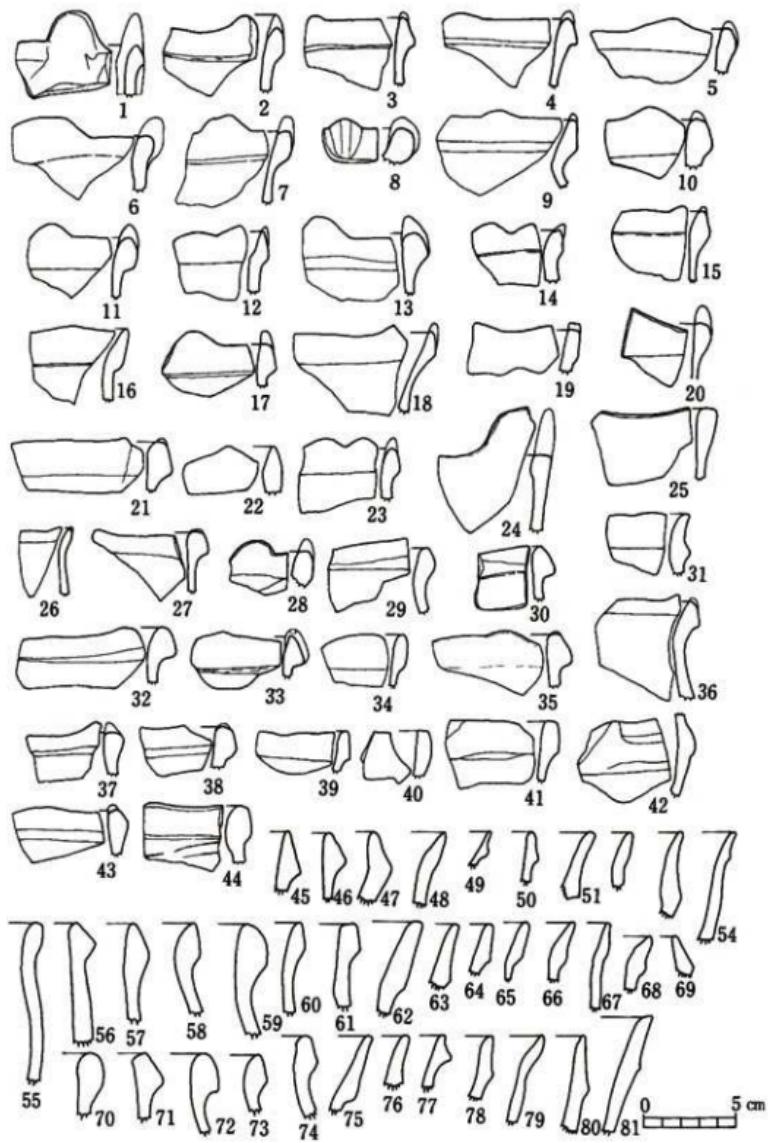
第56図 土 器



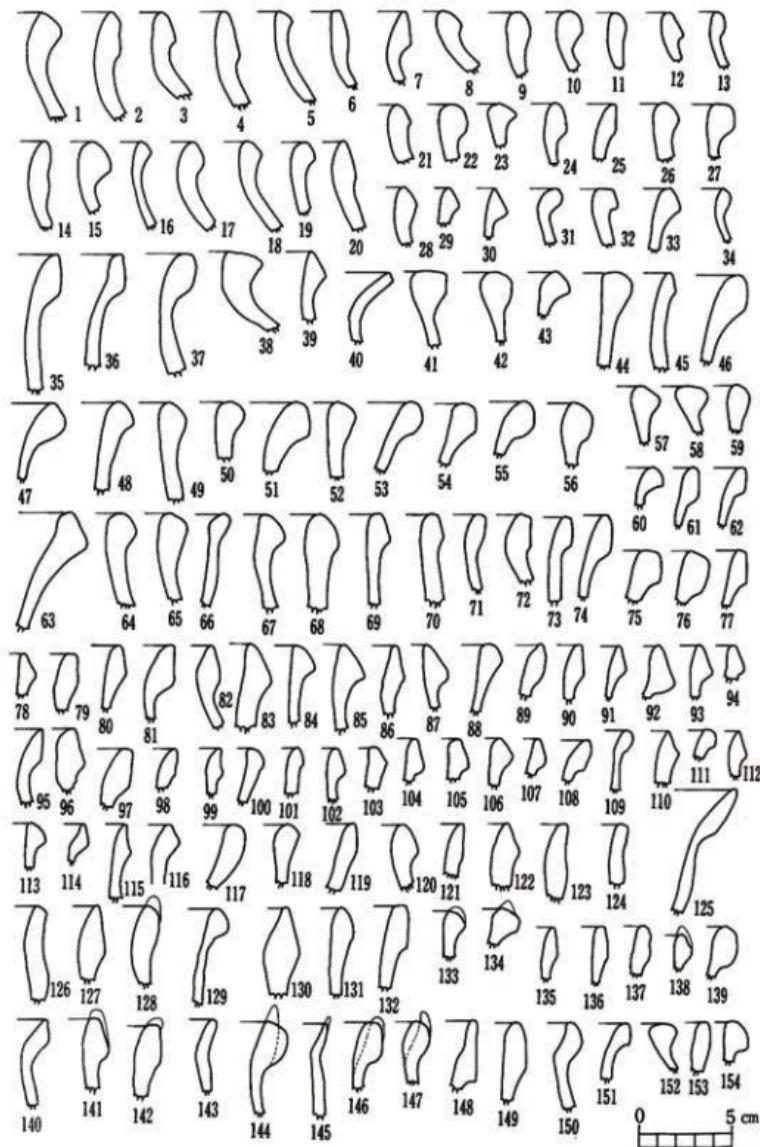
第57図 土 器



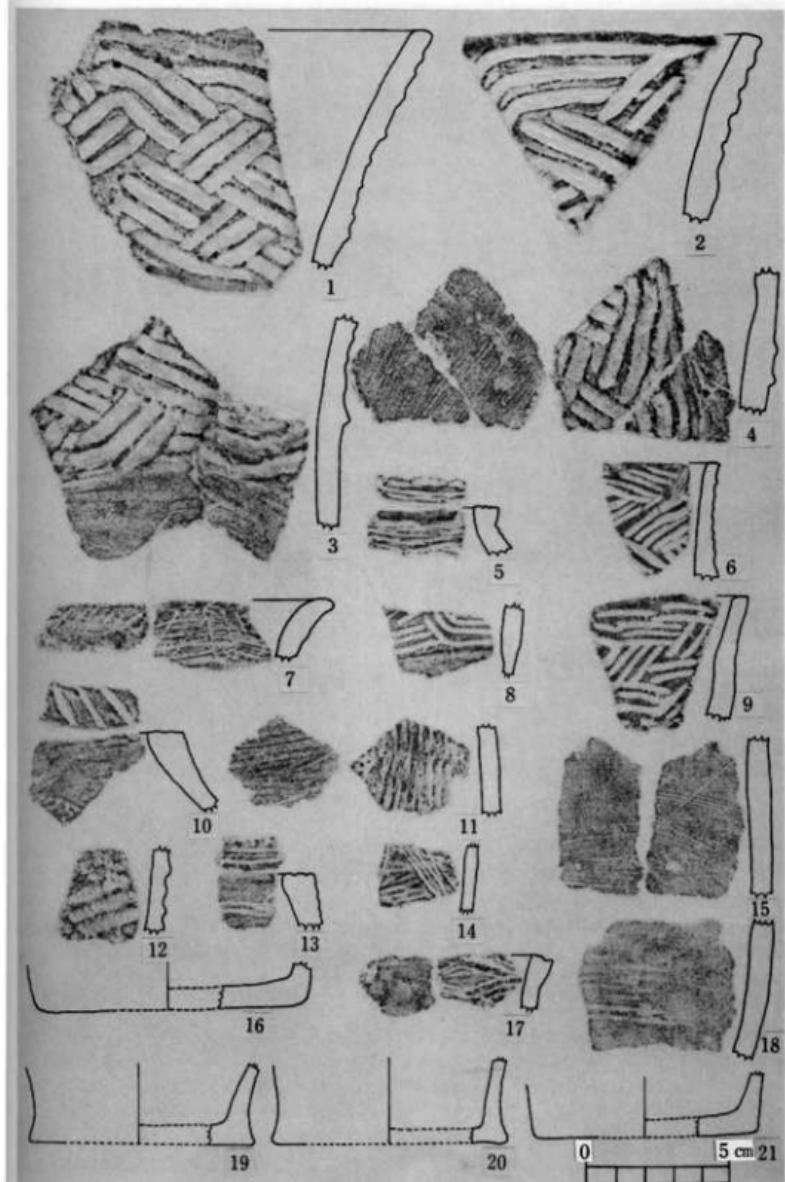
第58図 土 器



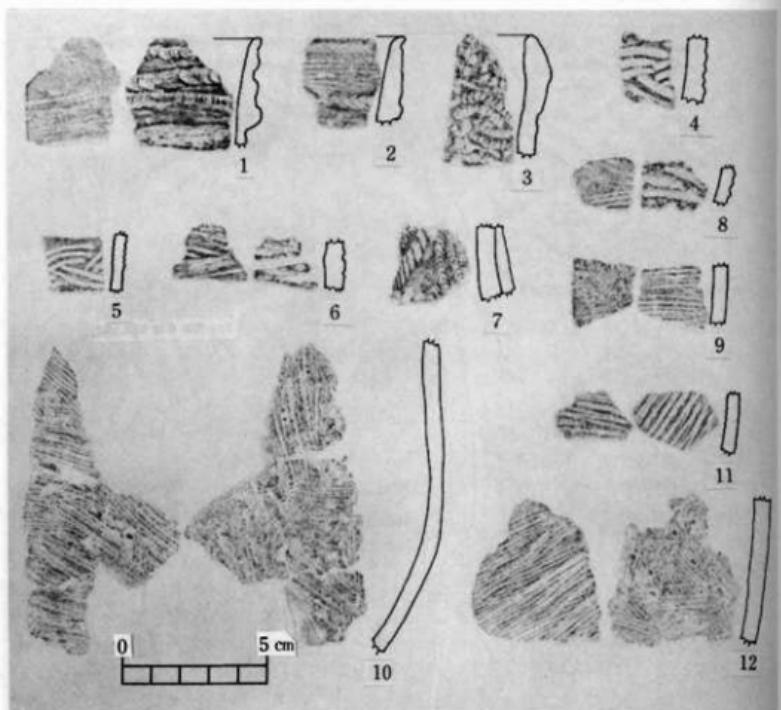
第59図 土 器



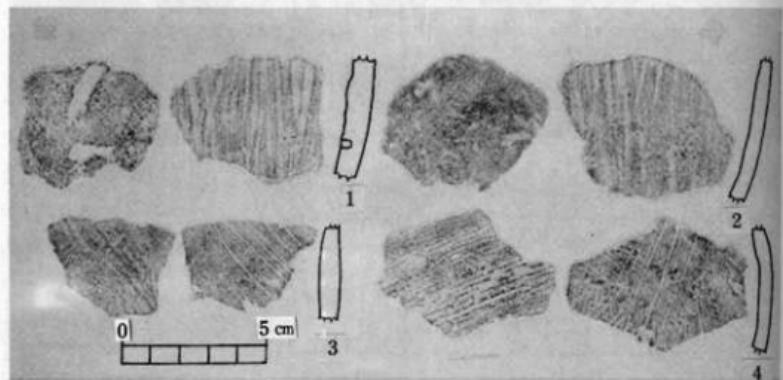
第60図 土 器



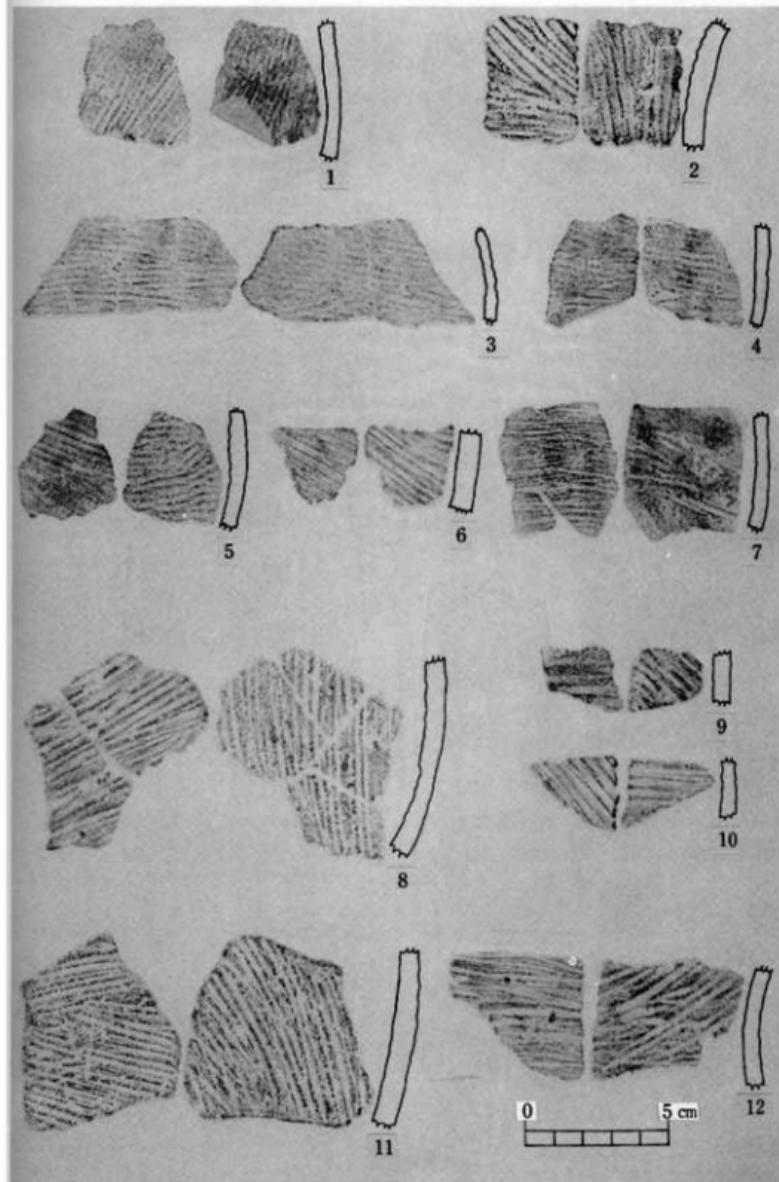
第61図 土 器



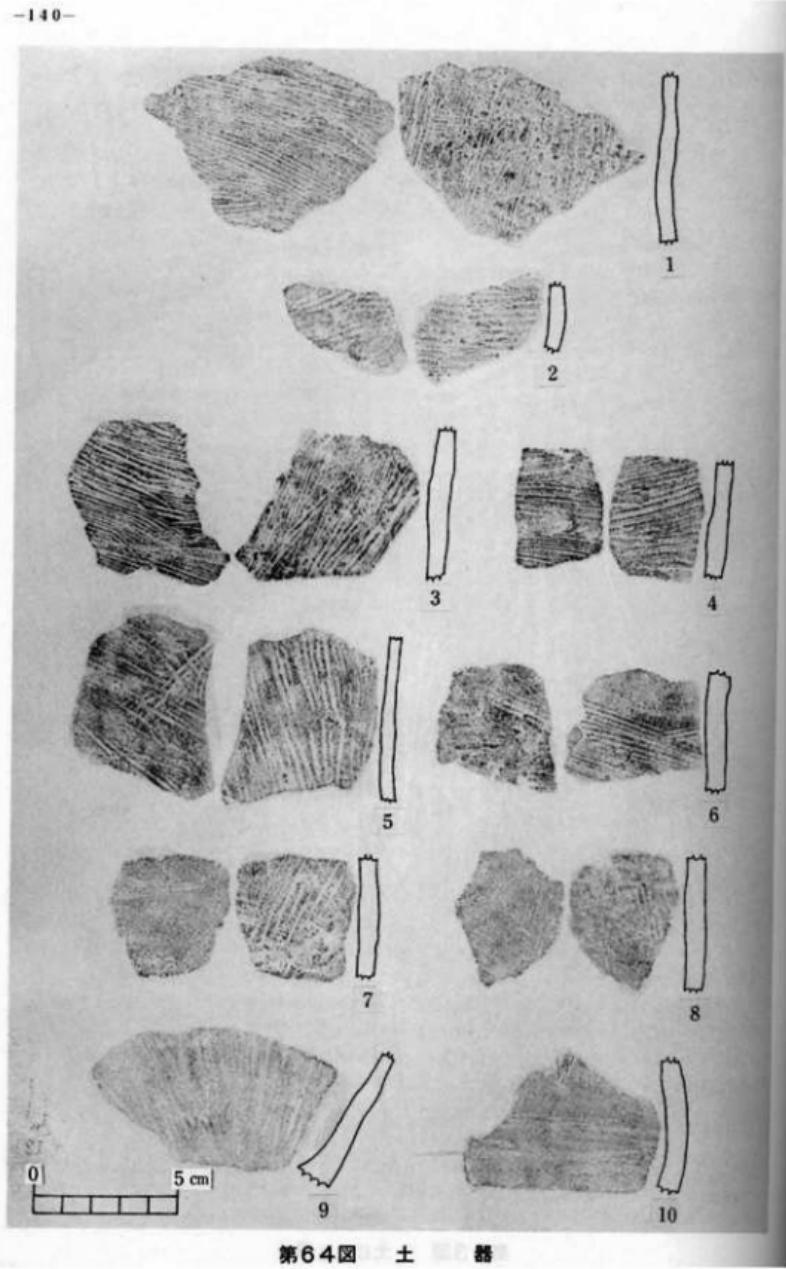
第62図A 土 器



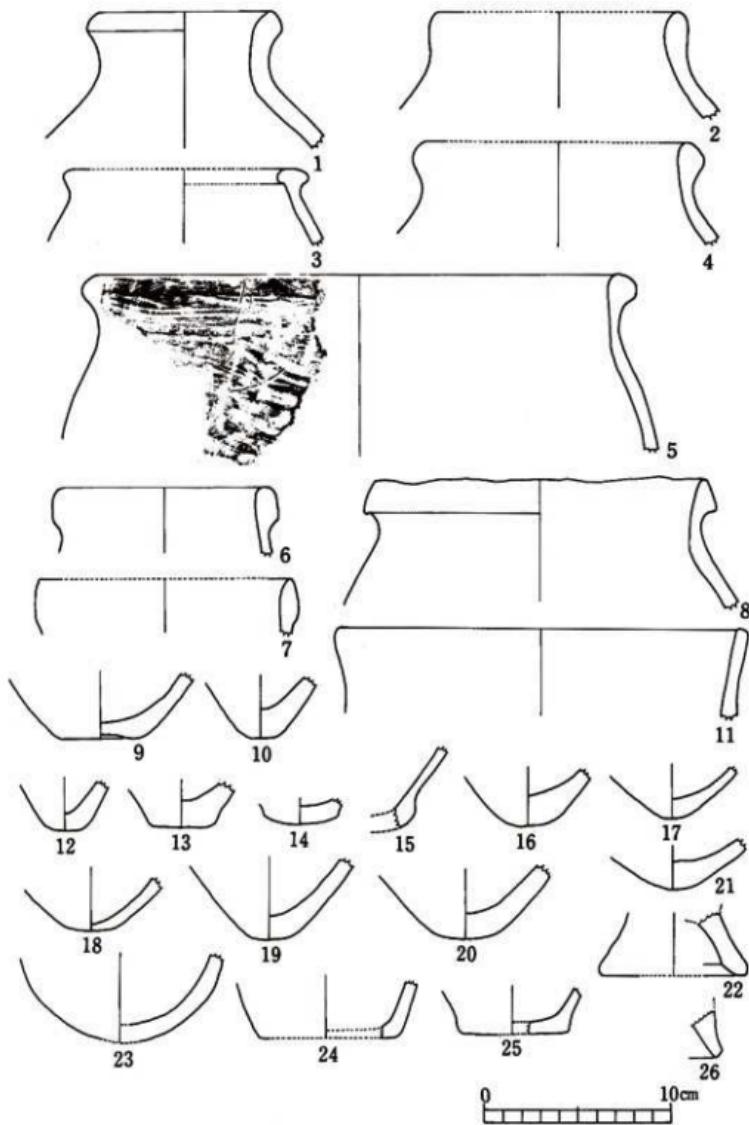
第62図B 土 器



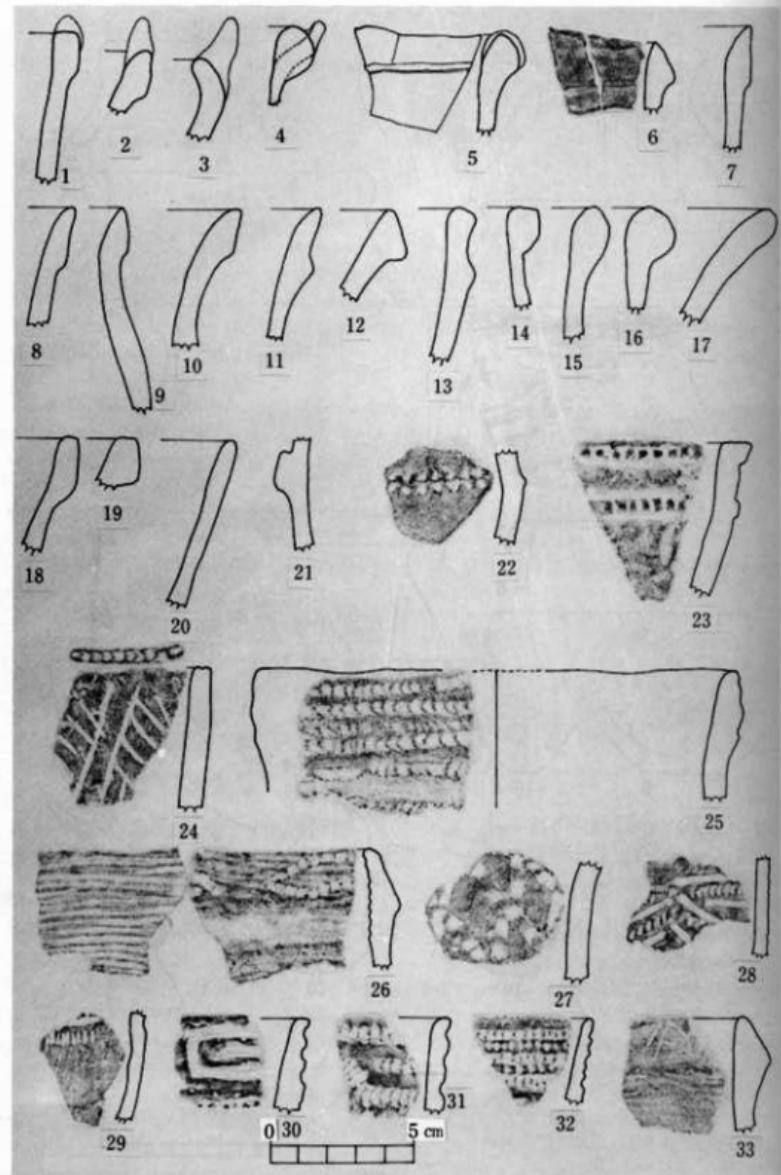
第63図 土 器



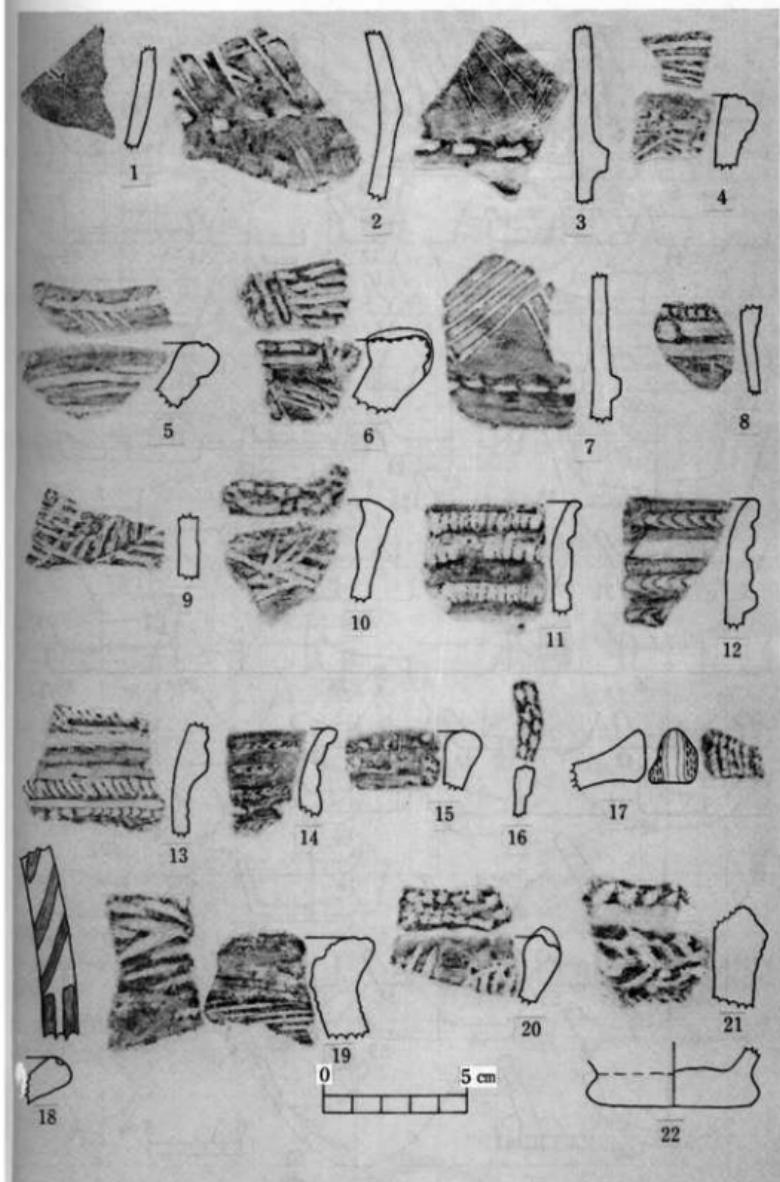
第64図 土器



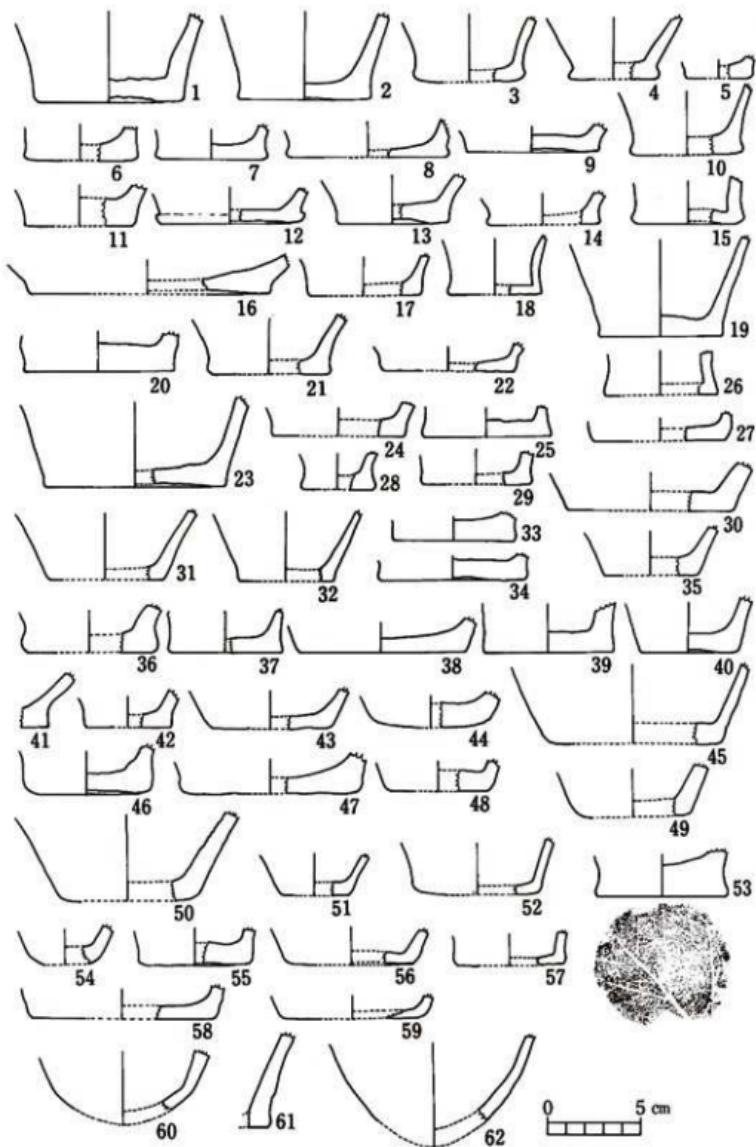
第65図 土 器



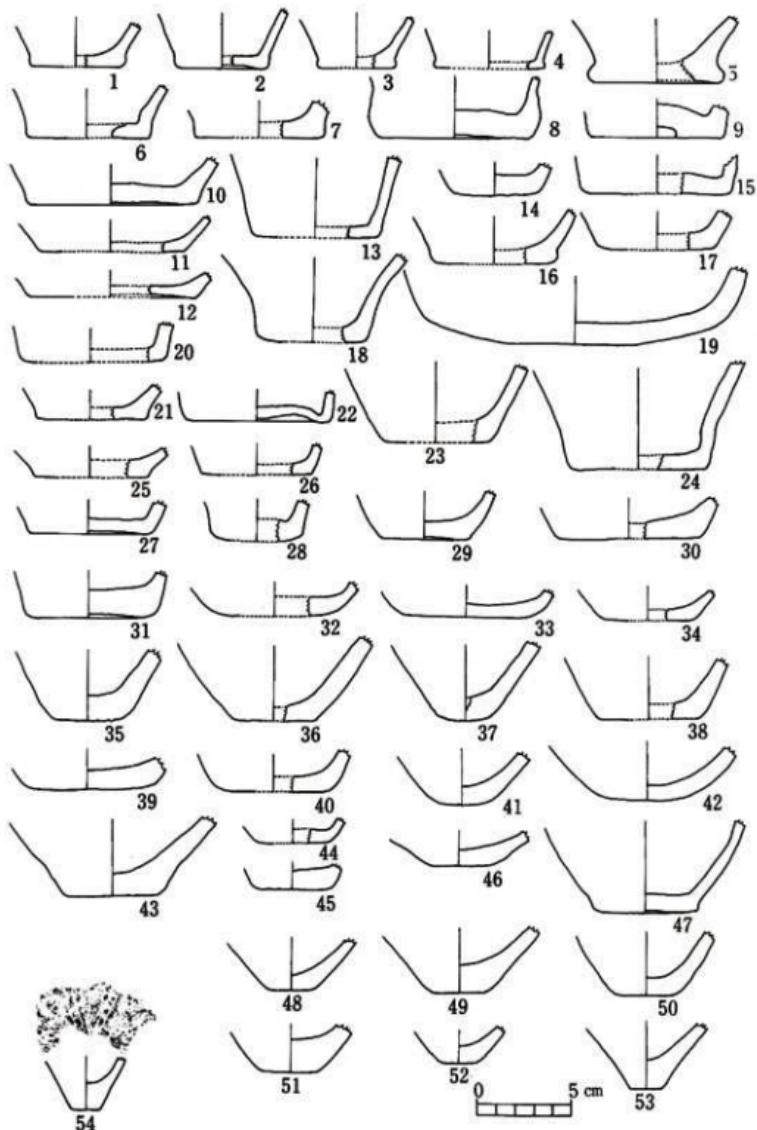
第66図 土 器



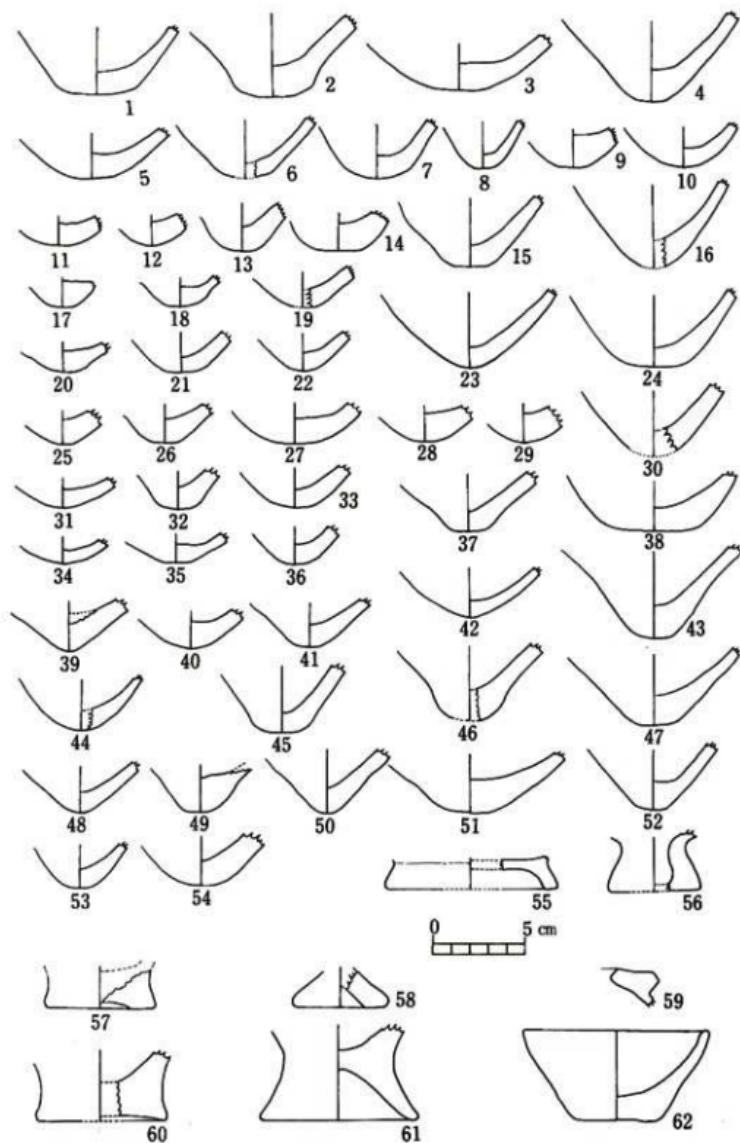
第67図 土器



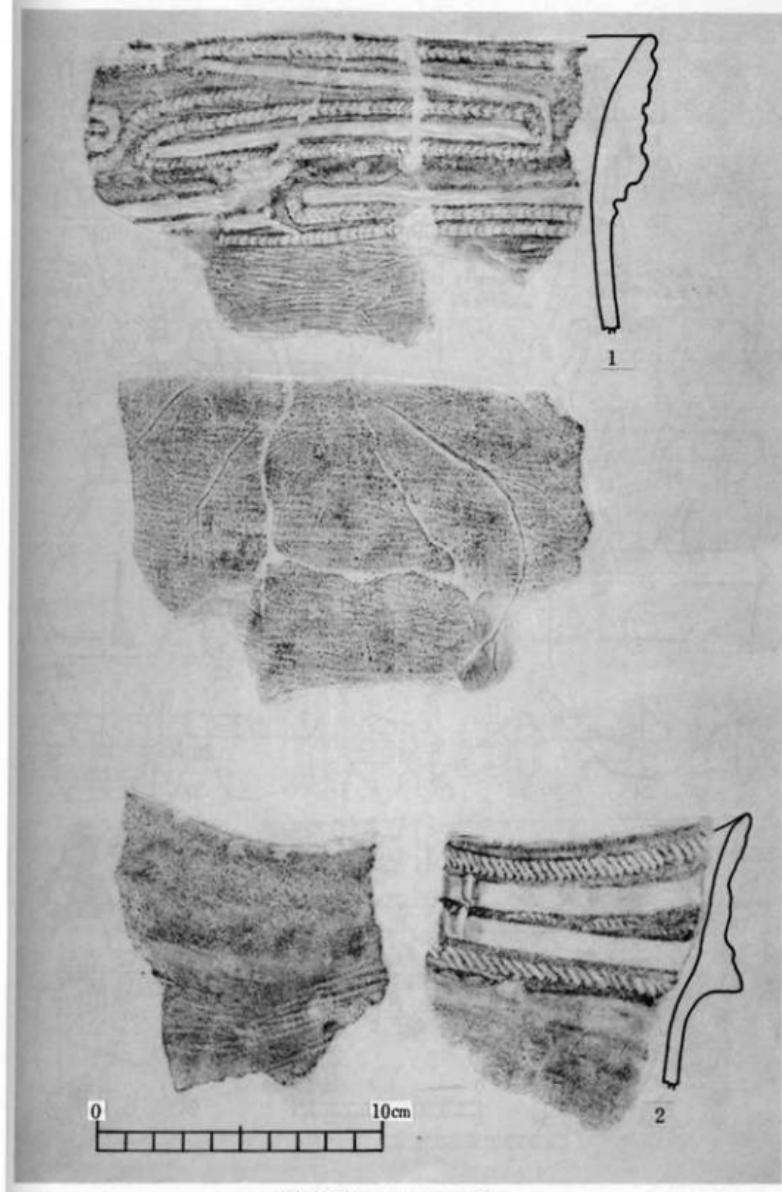
第68図 土器



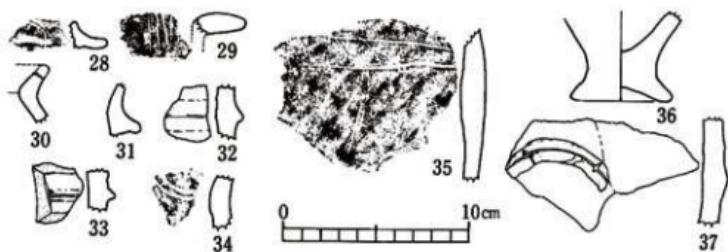
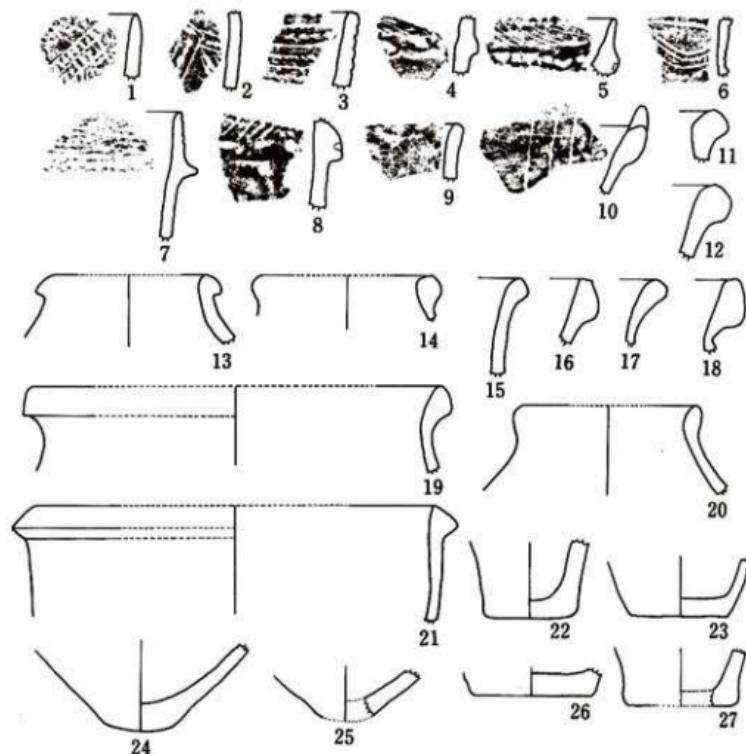
第69図 土 器



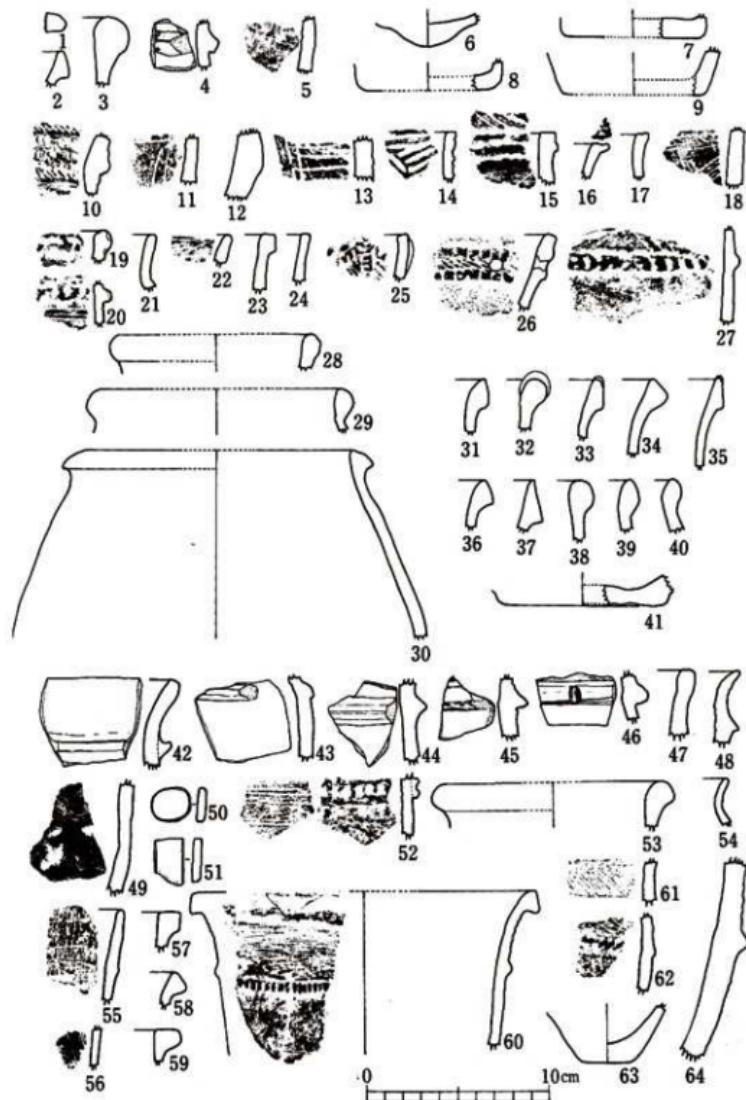
第70図 土 器



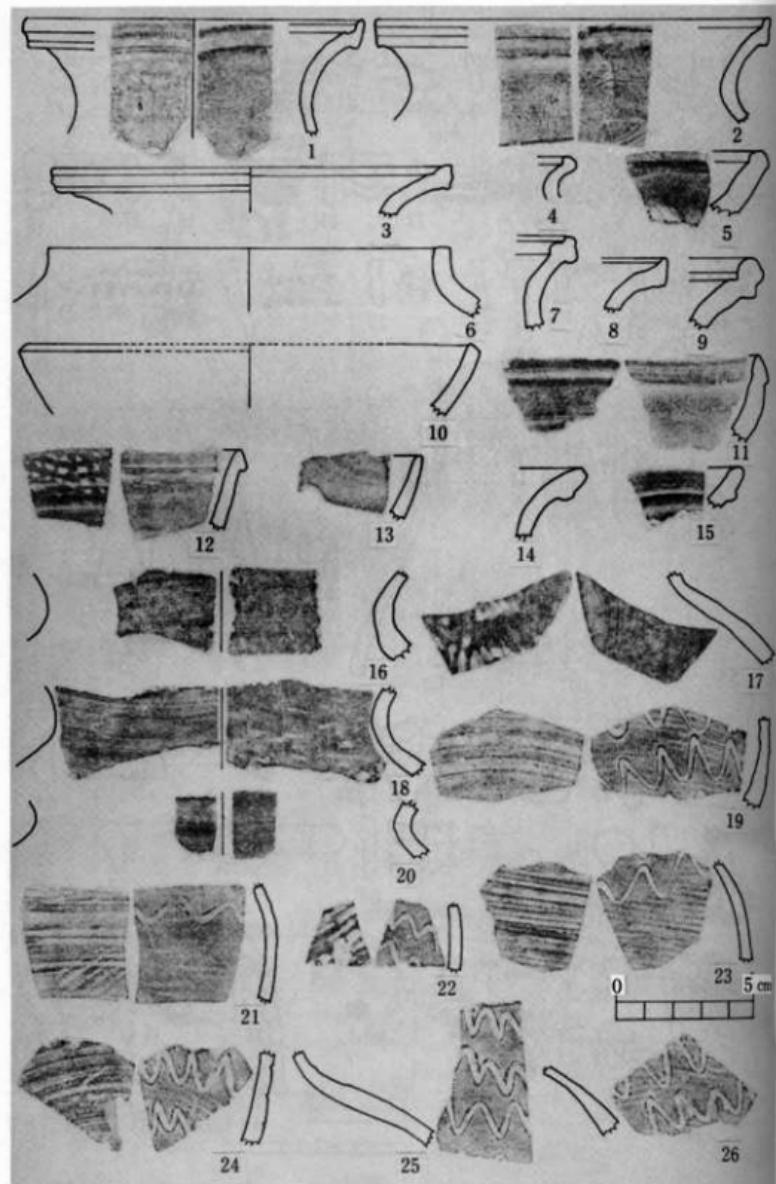
第71図 土器



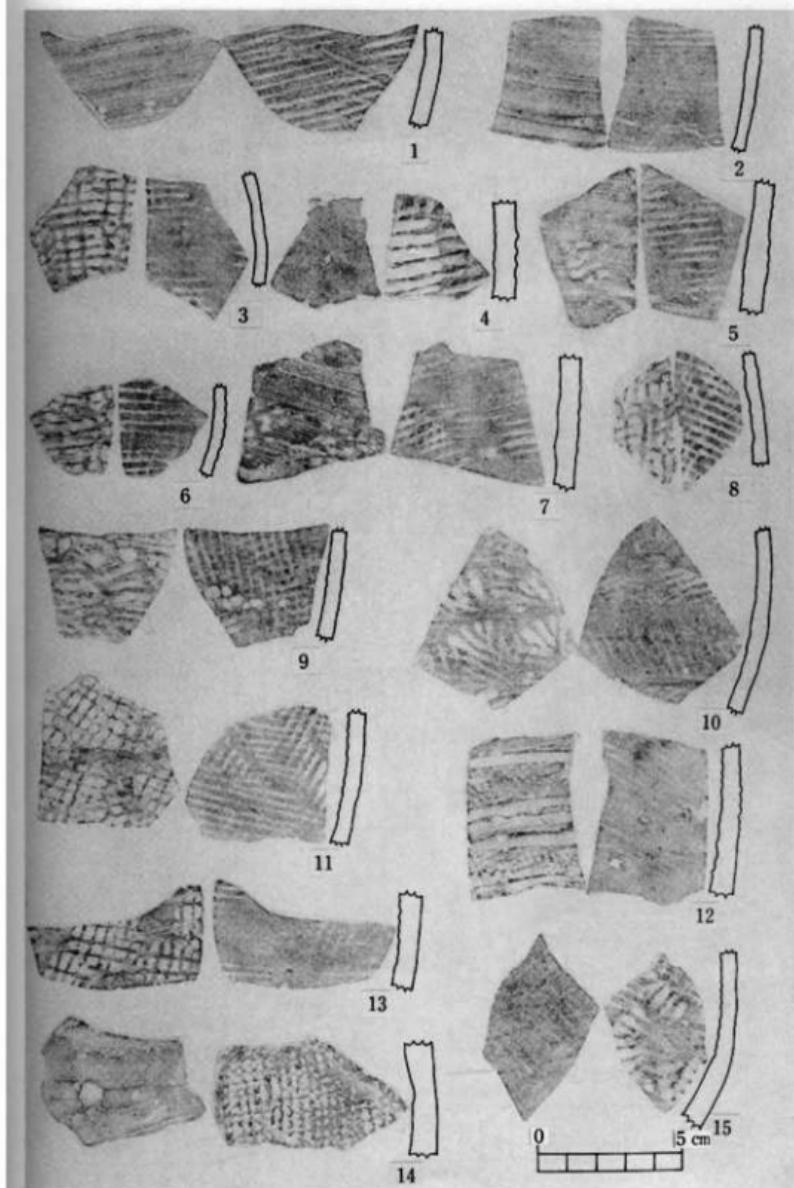
第72図 土 器



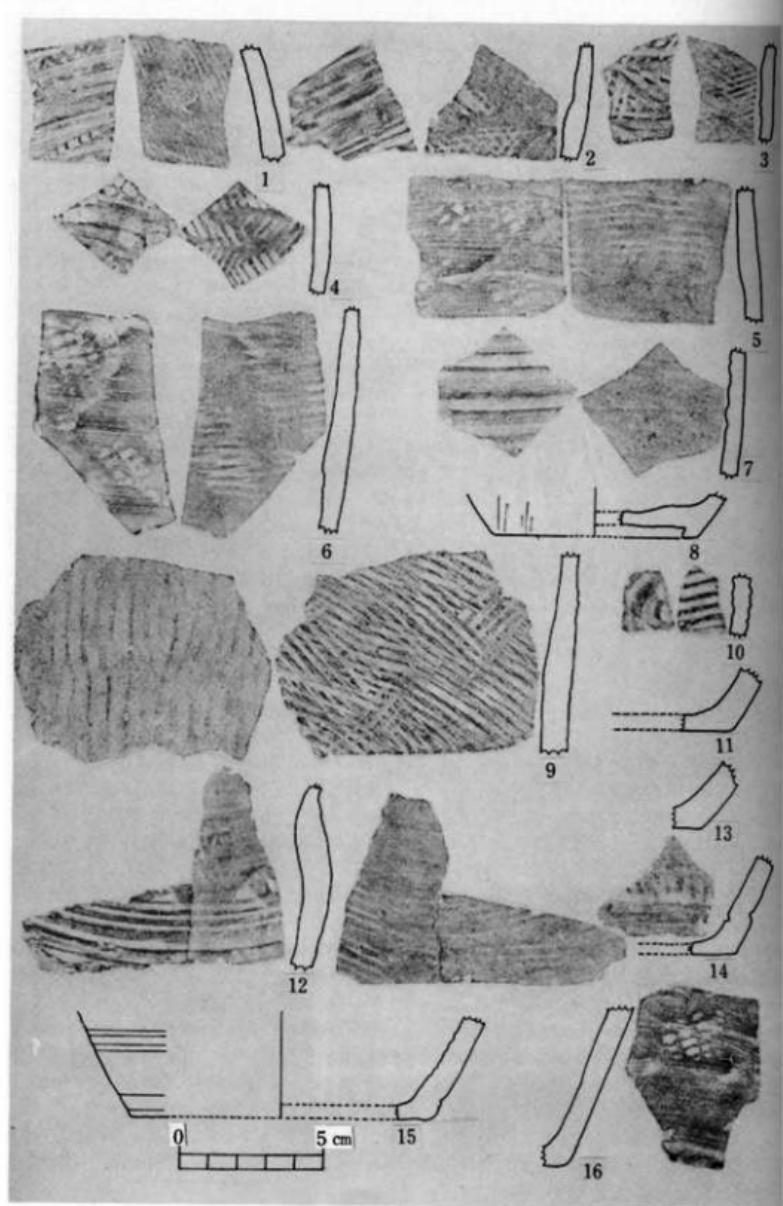
第73図 土 器



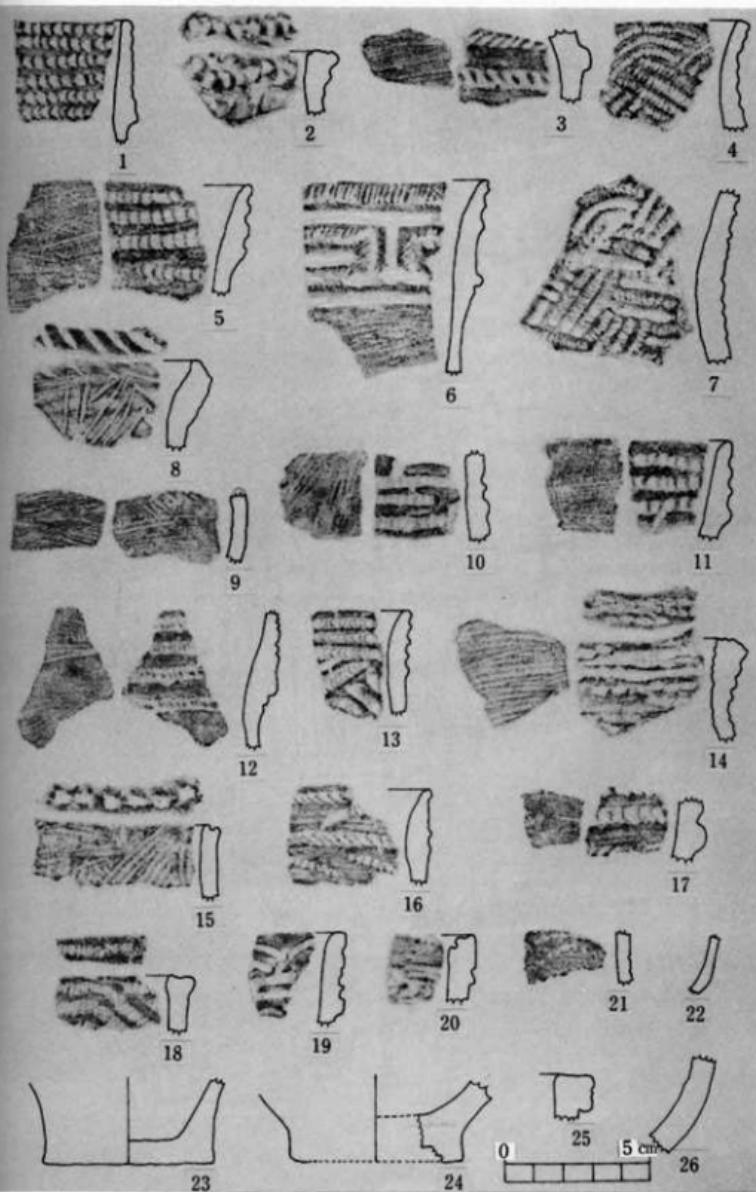
第74図 須恵器



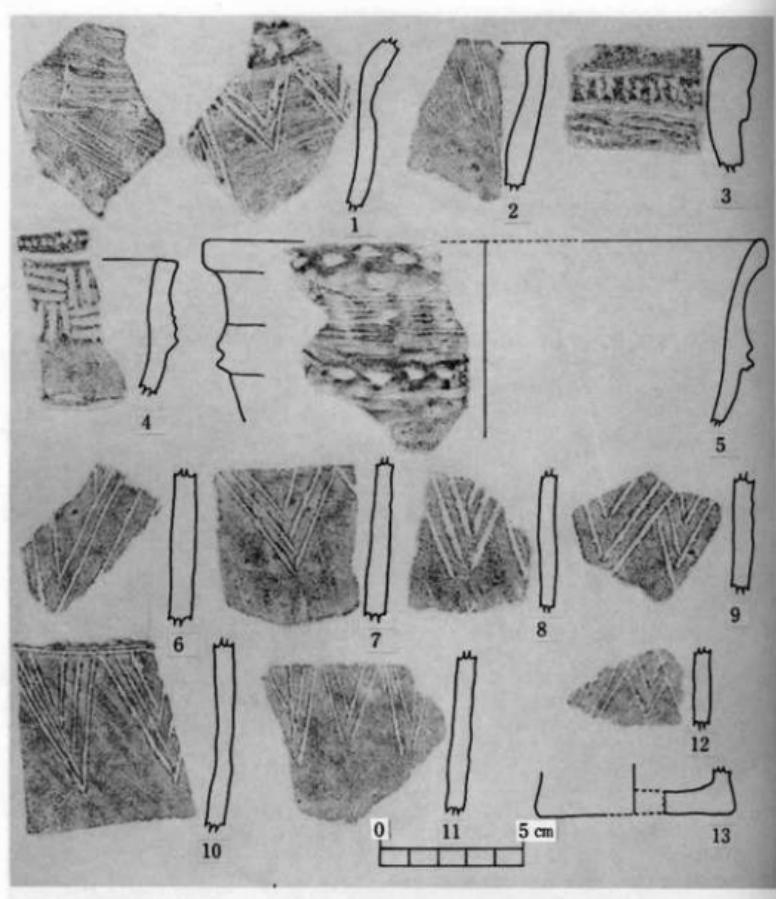
第75図 須恵器



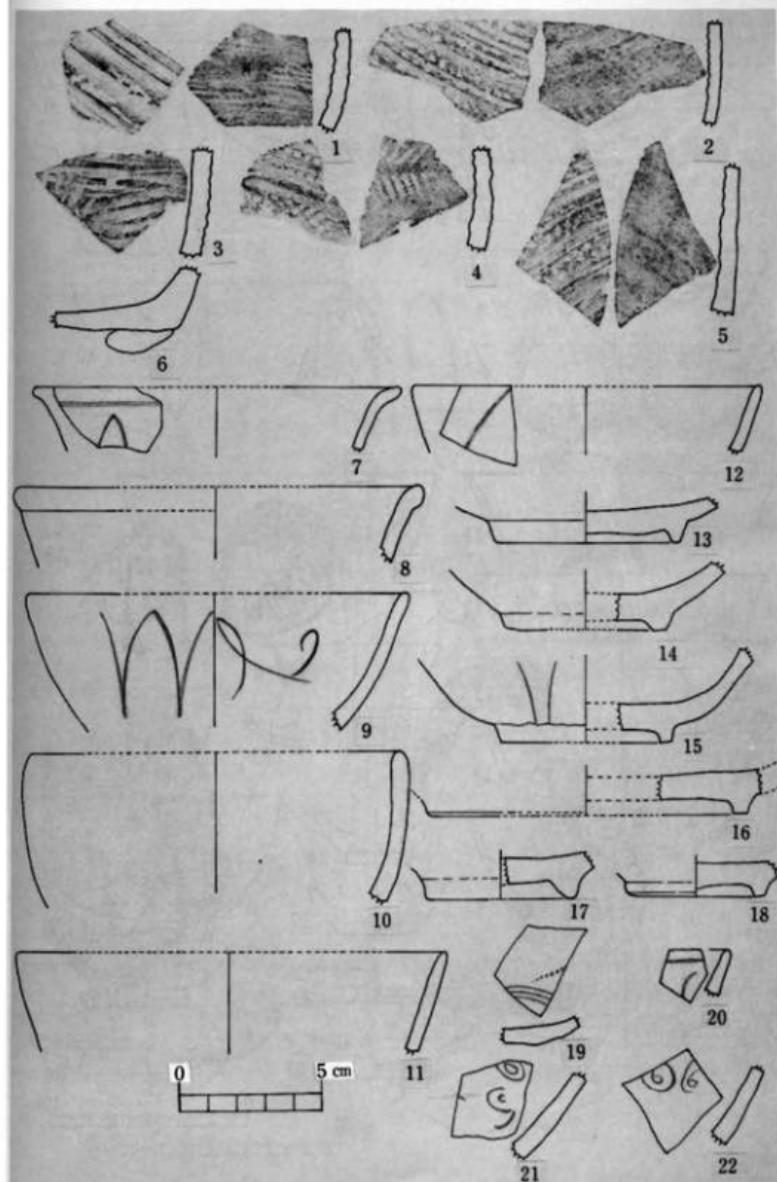
第76図 須恵器



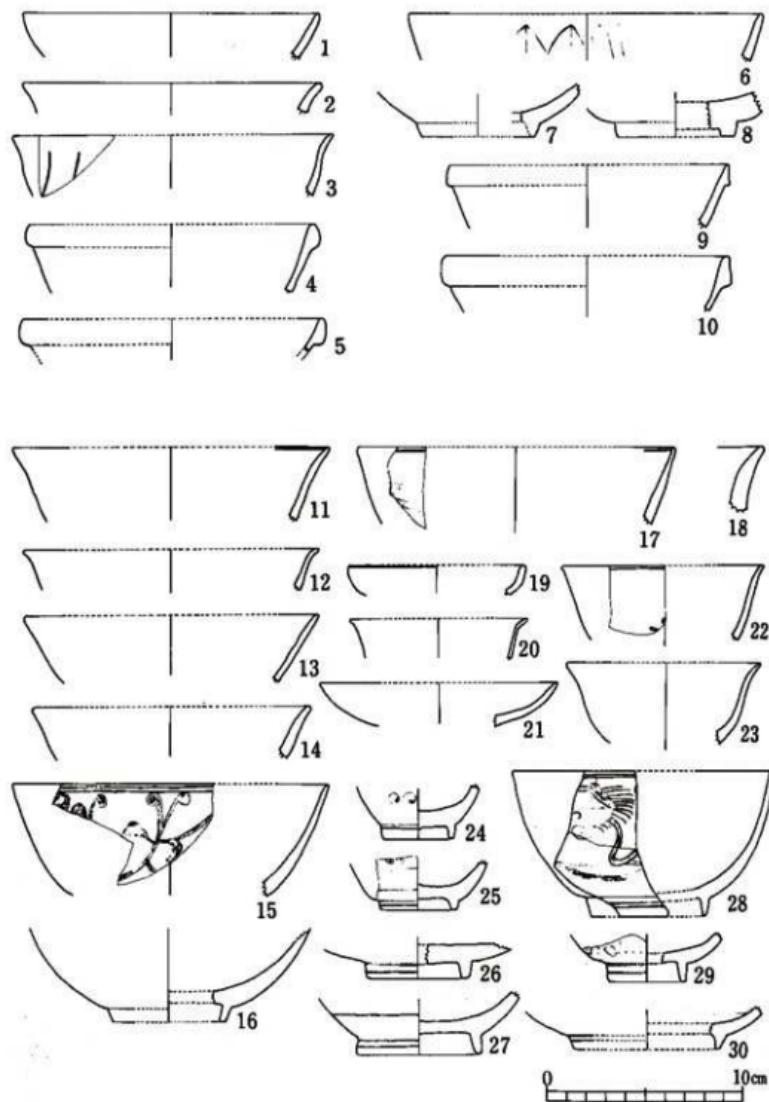
第77図 土器



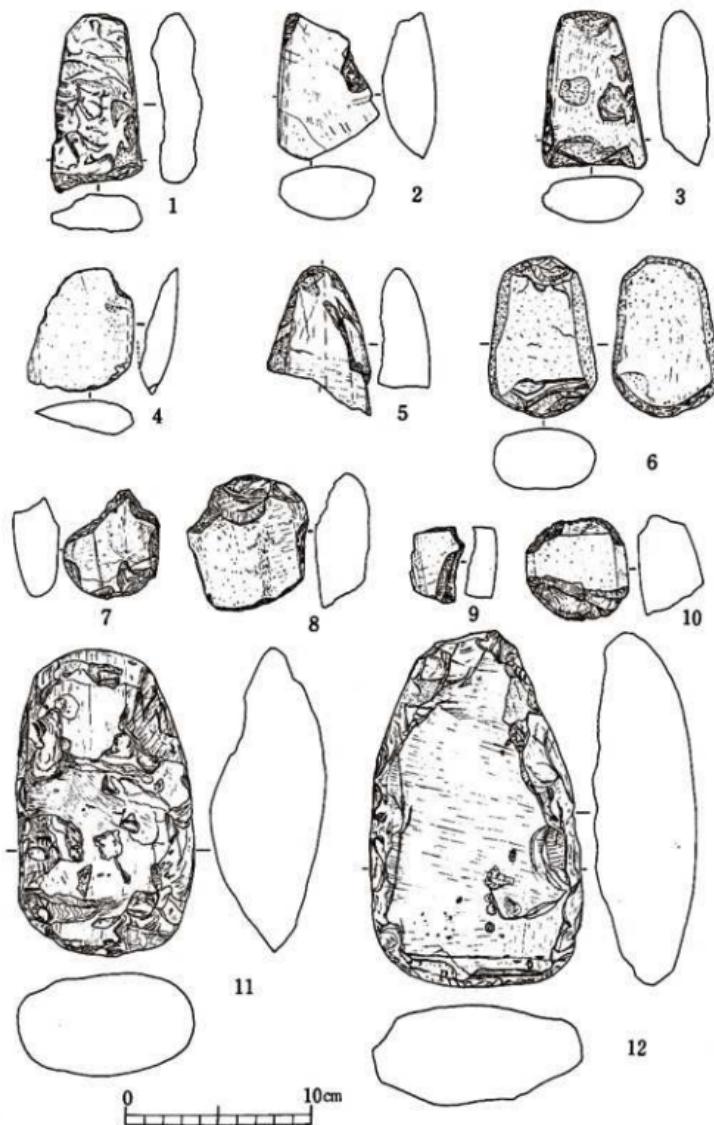
第78図 土 器



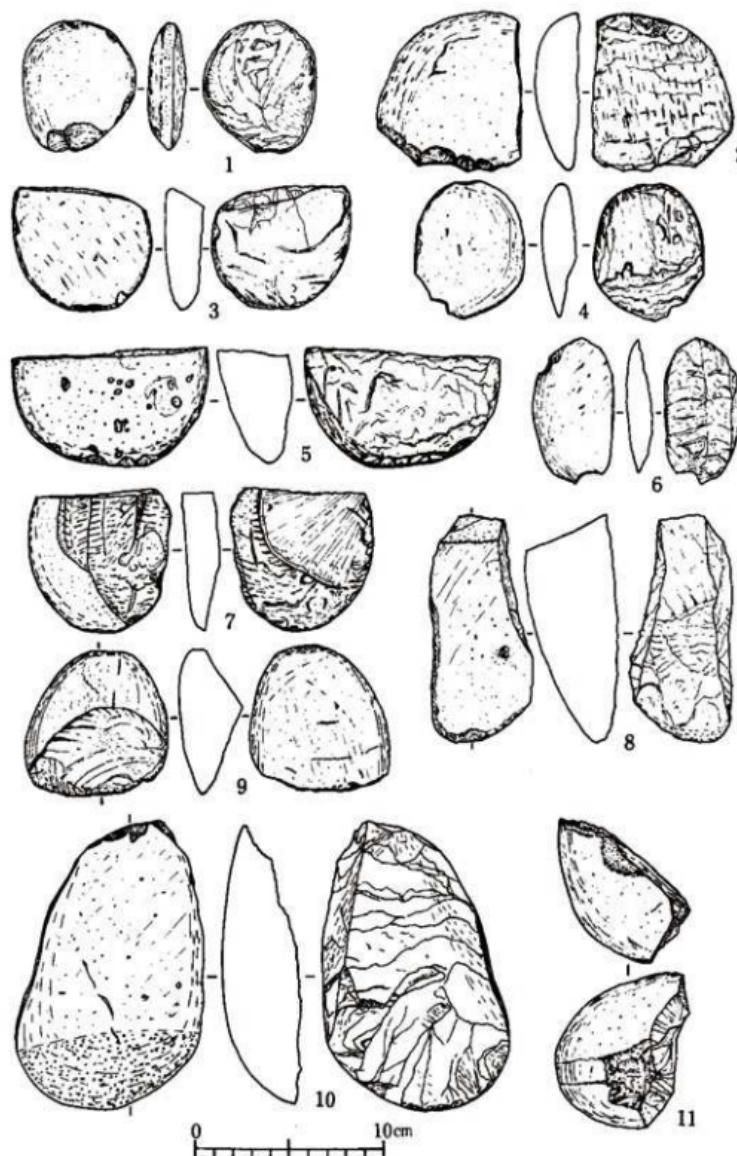
第79図 須恵器・青瓷



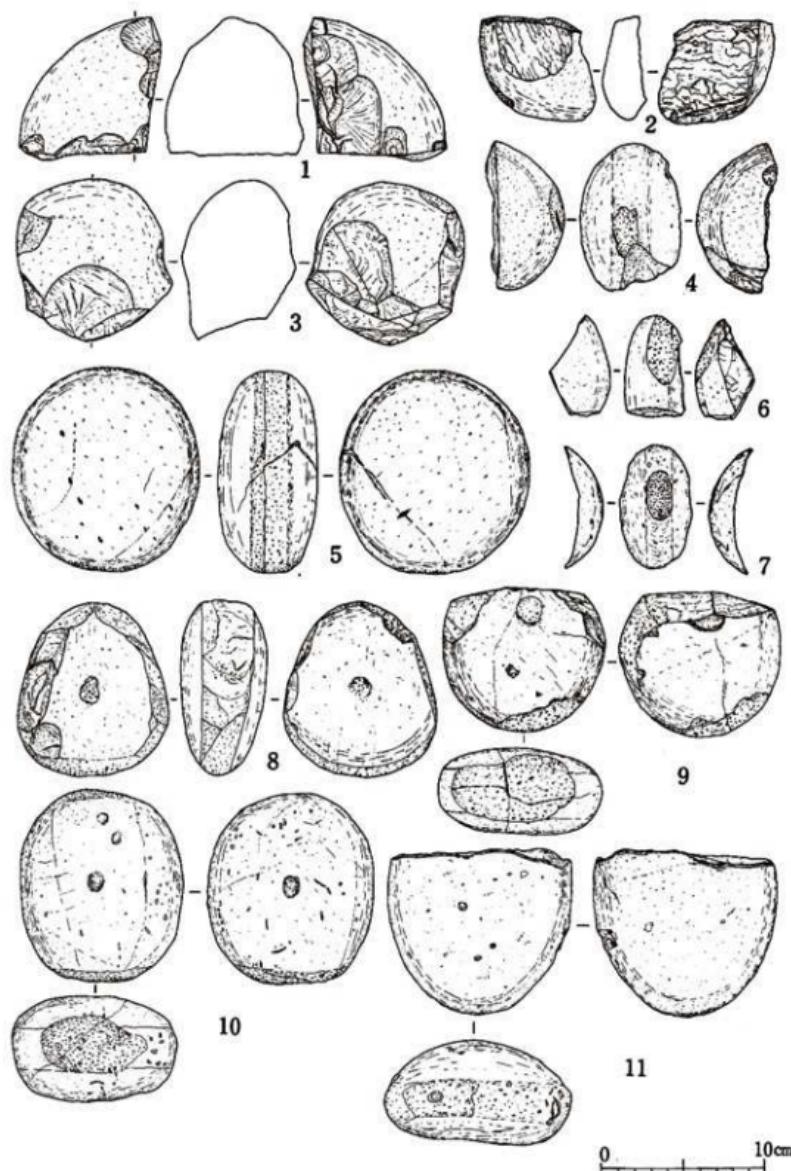
第80図 土 器



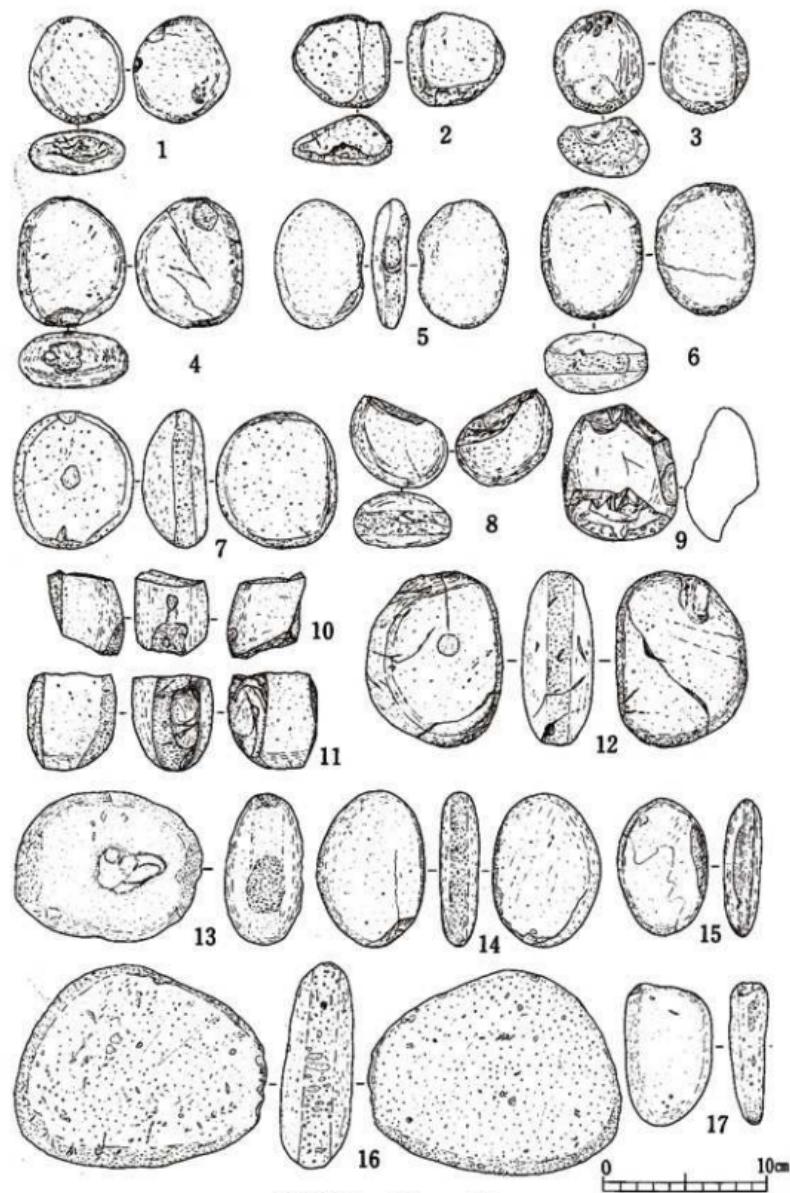
第81図 石 器



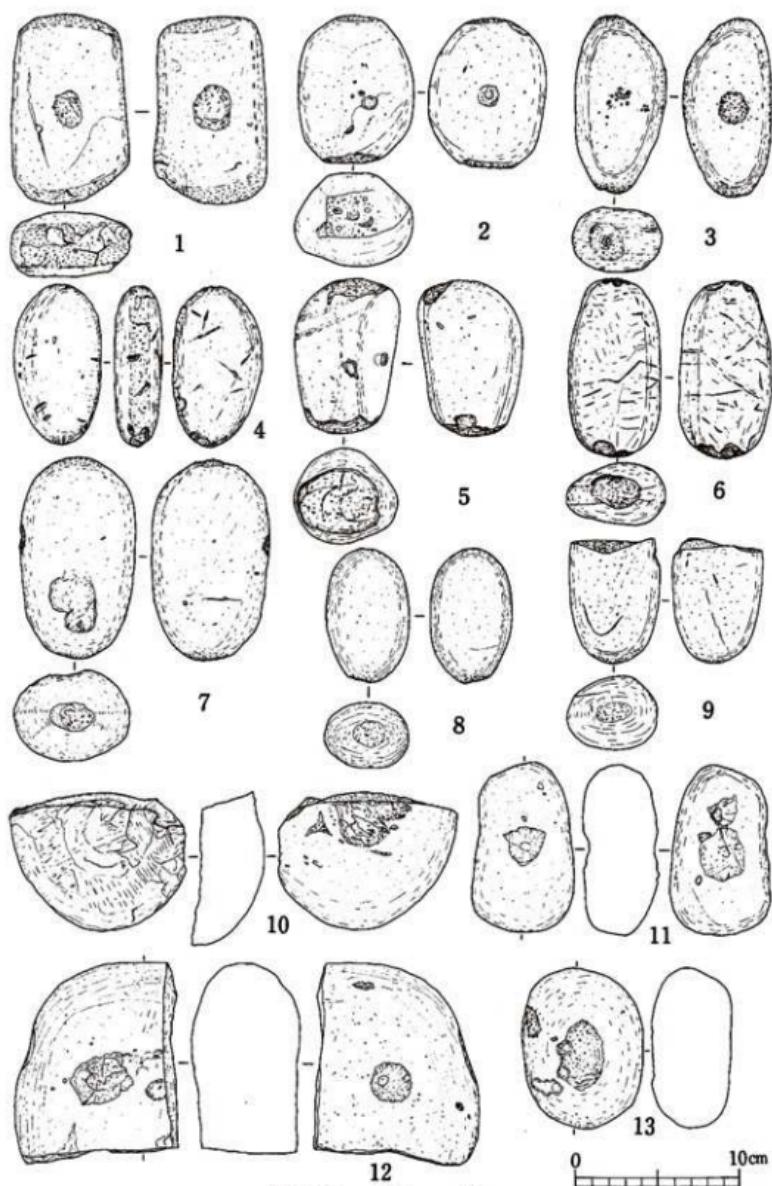
第82図 石 器



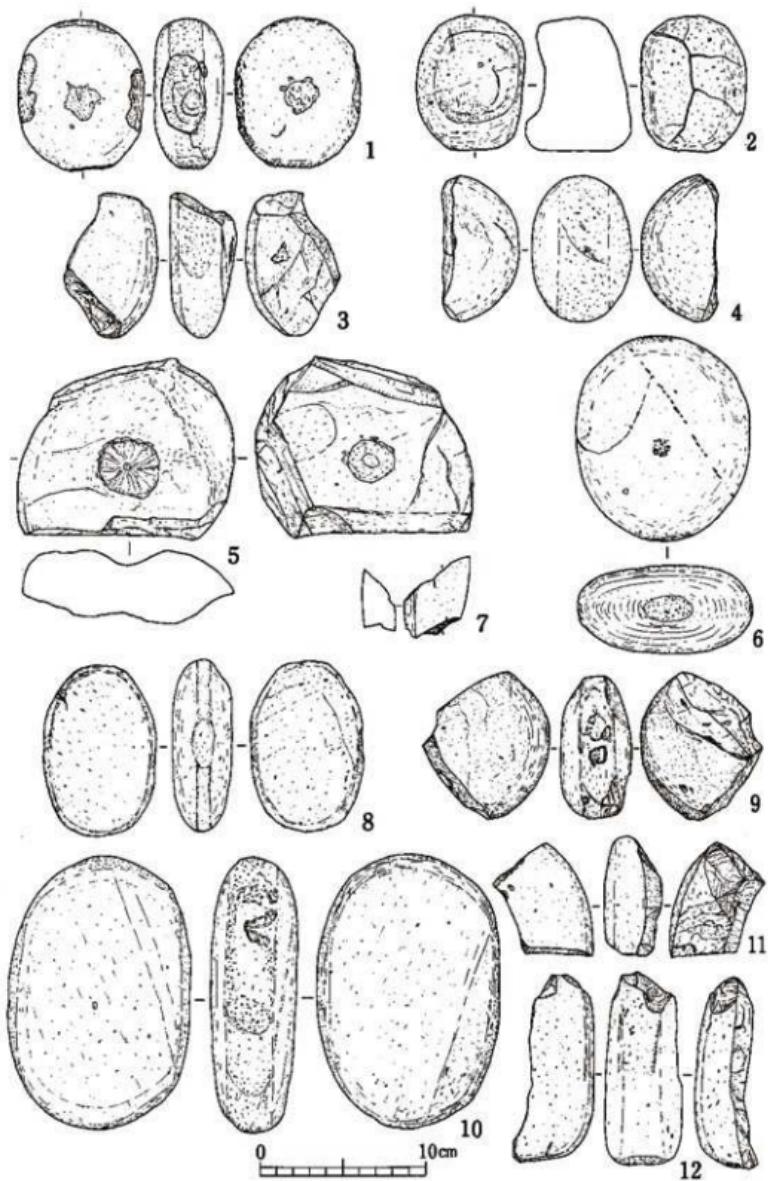
第83図 石 器



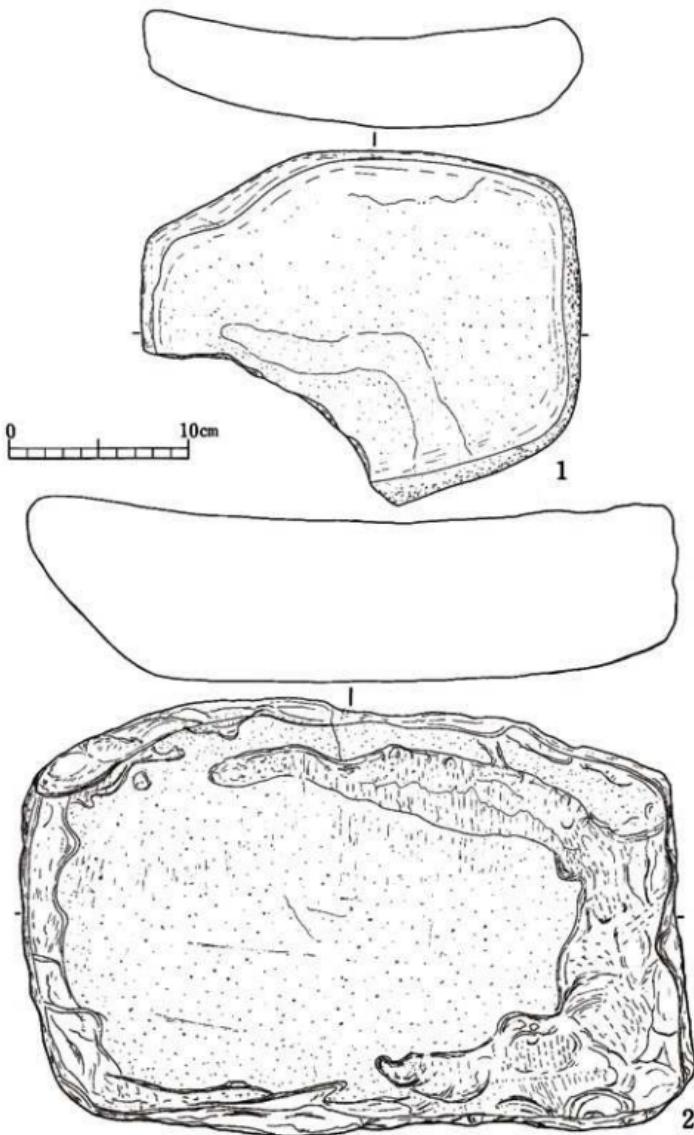
第84図 石 器



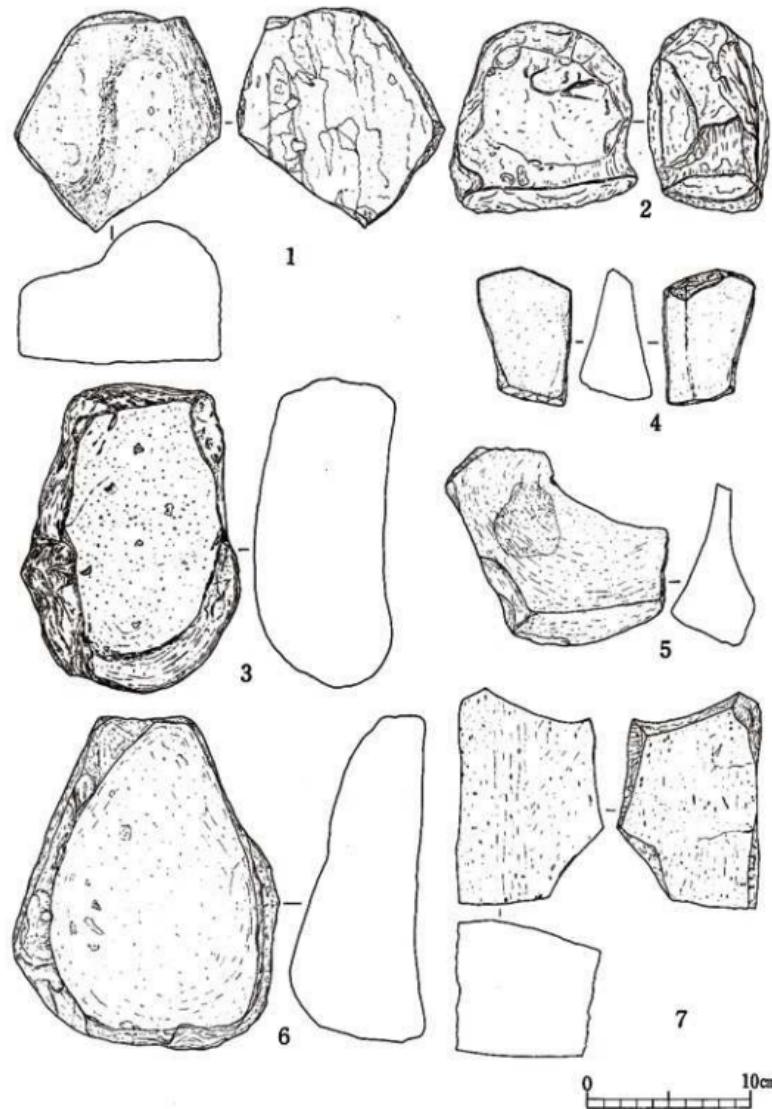
第85図 石 器



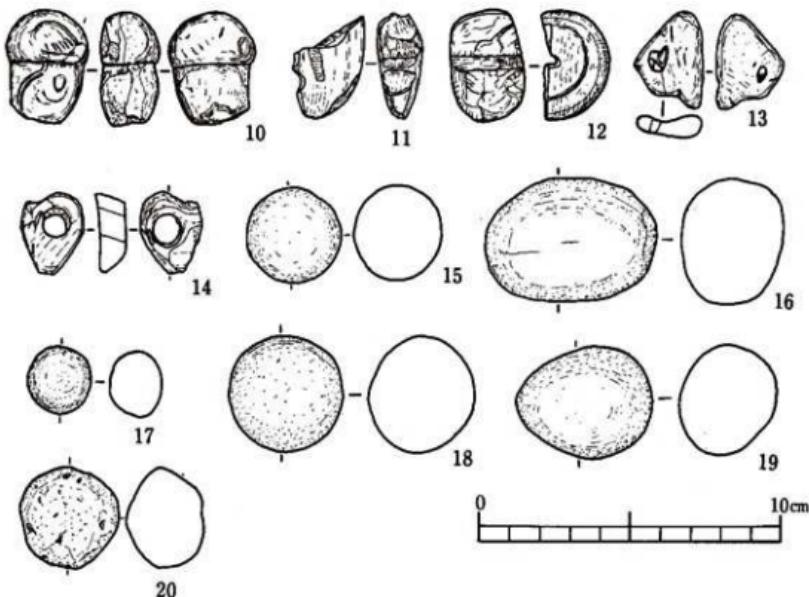
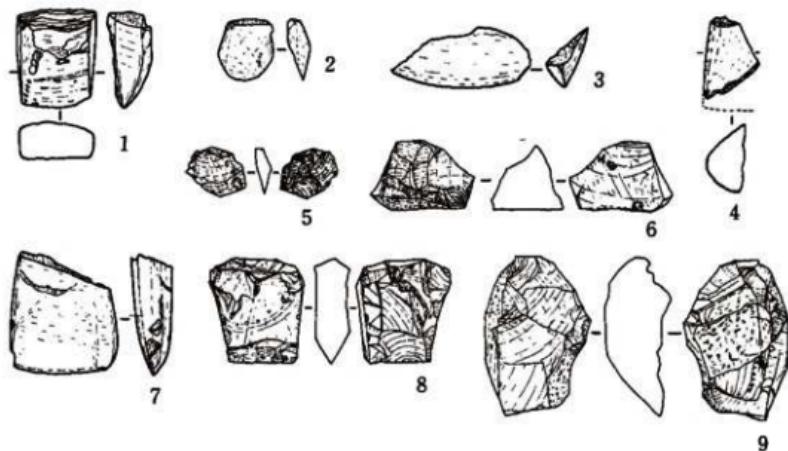
第86図 石 器



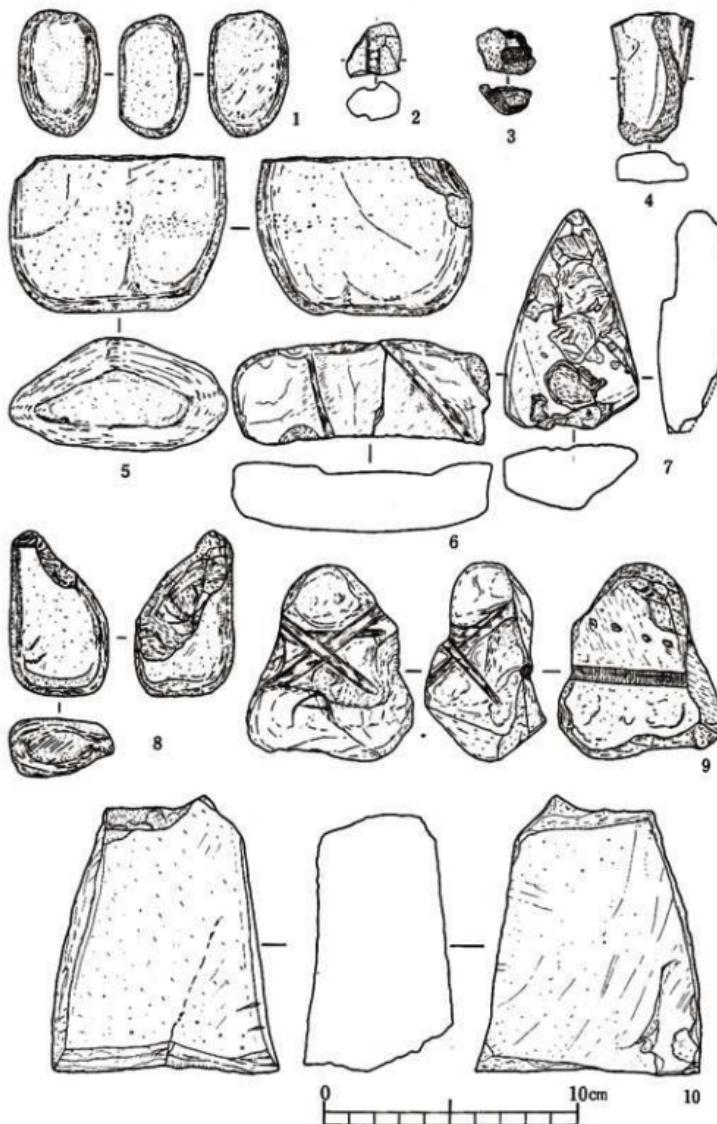
第87図 石 器



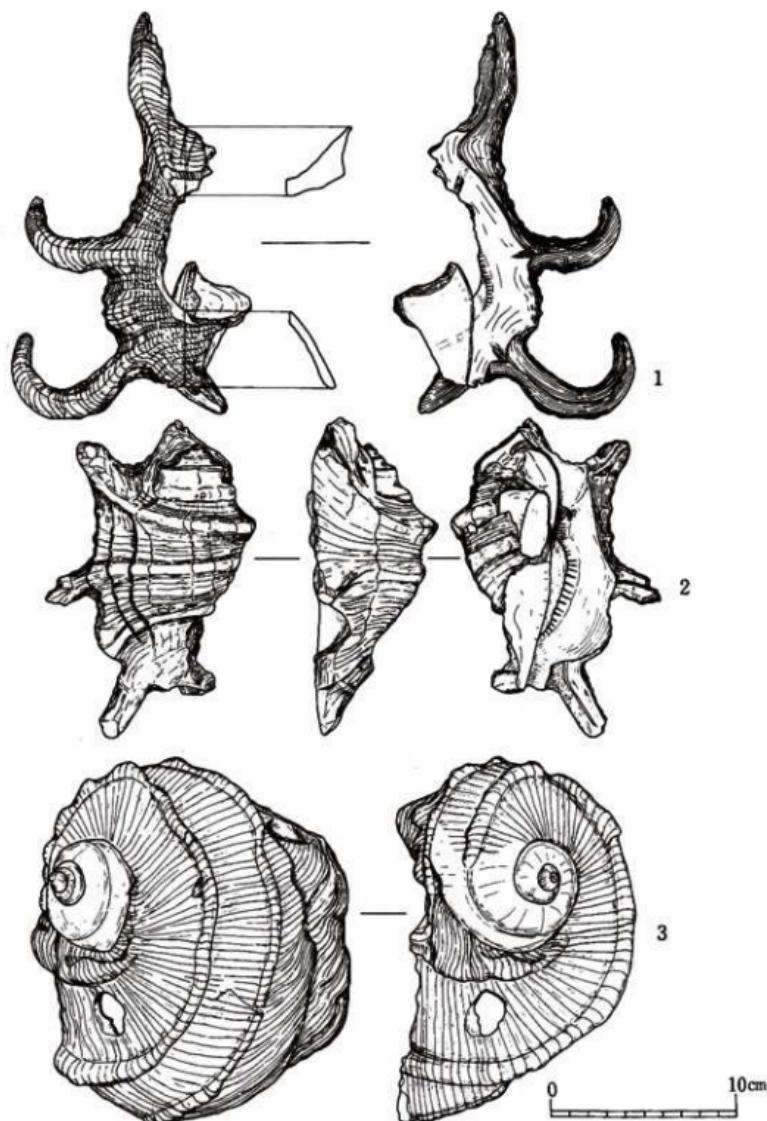
第88図 石 器



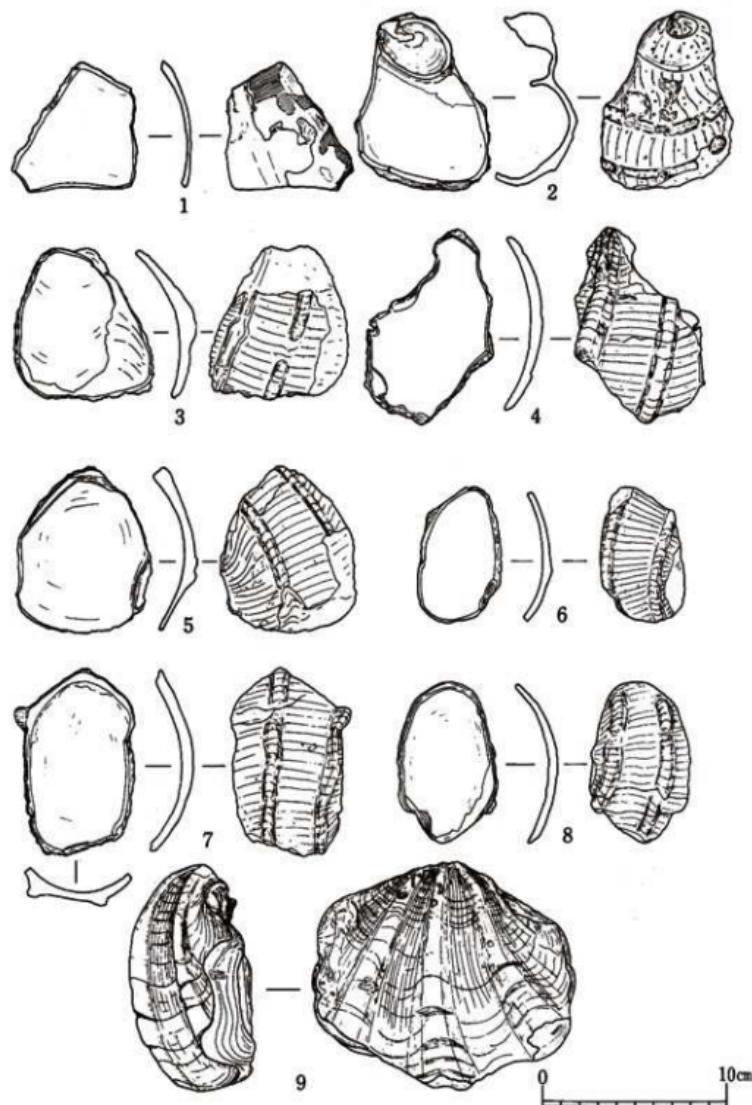
第89図 石 器



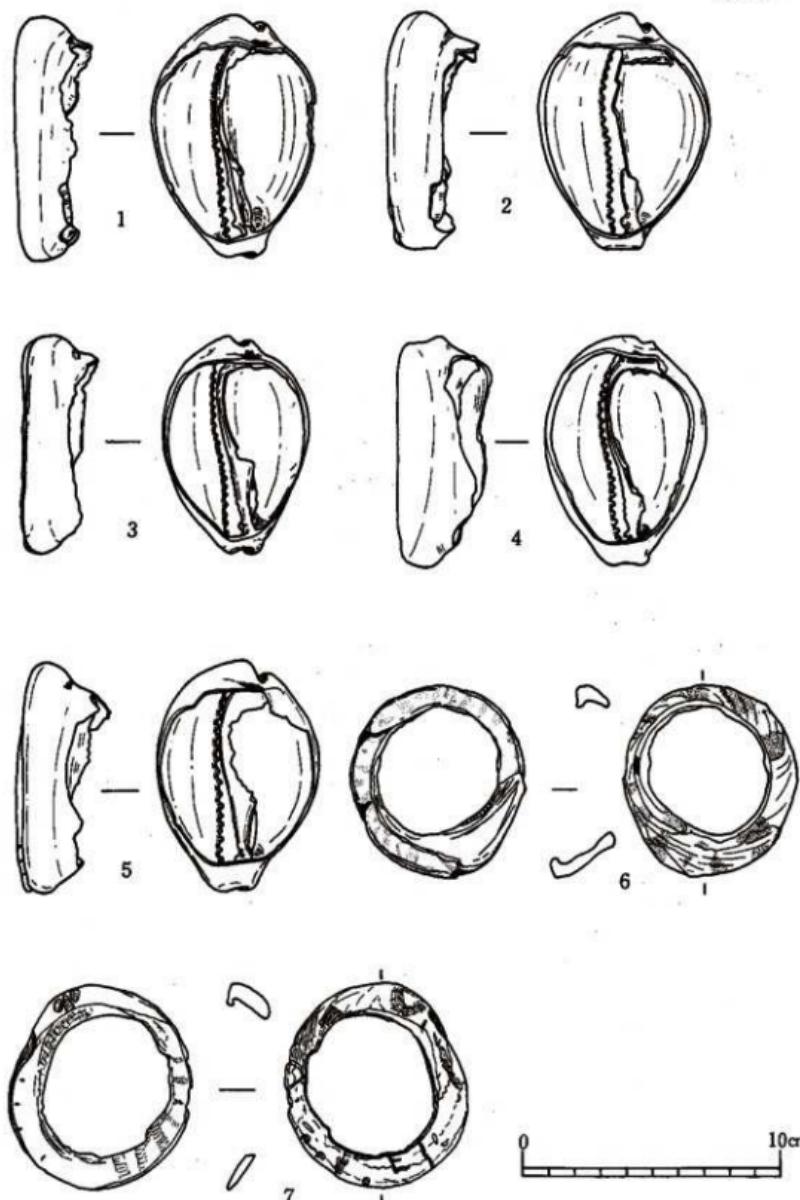
第90図 石 器



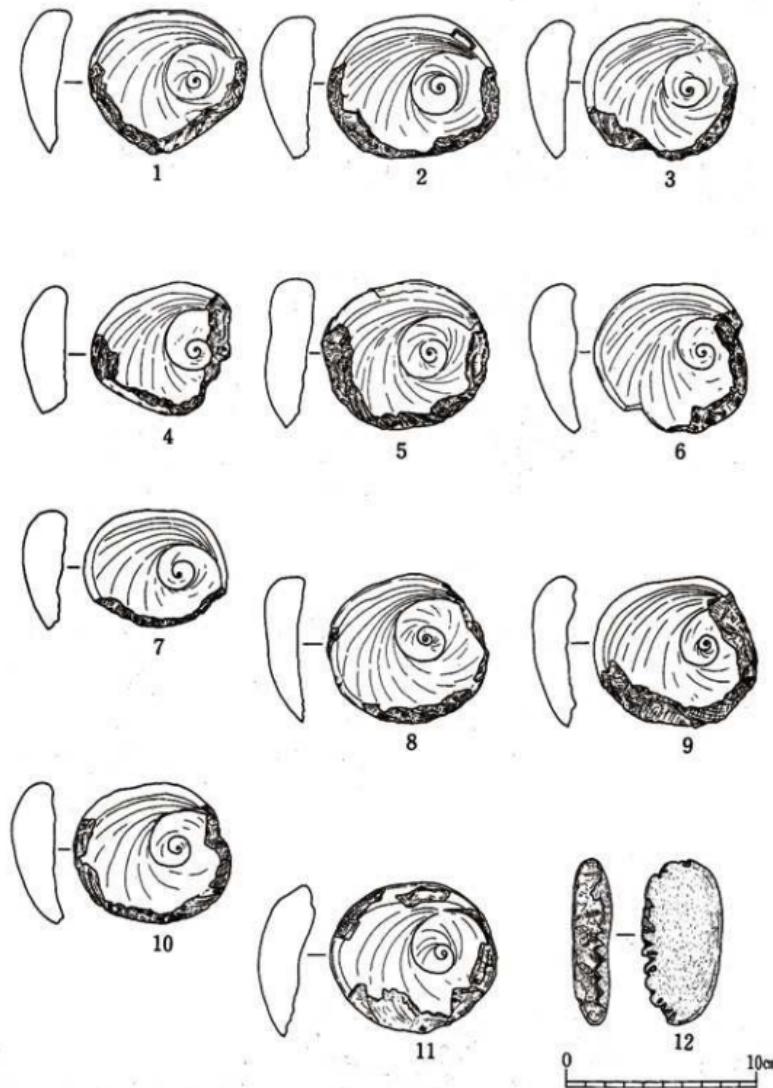
第91図 貝 器



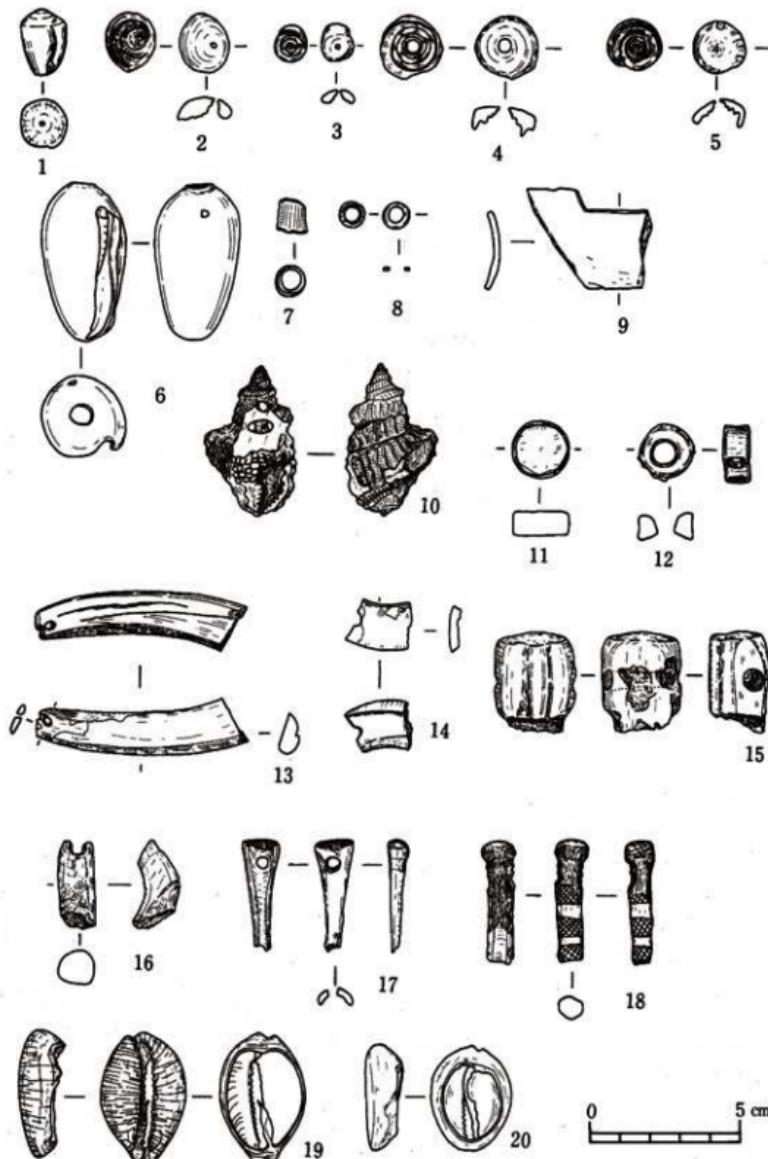
第92図 貝 器



第93図 貝 器



第94図 貝器、サンゴ加工品



第95図 装飾品ほか



宇宿貝塚全景



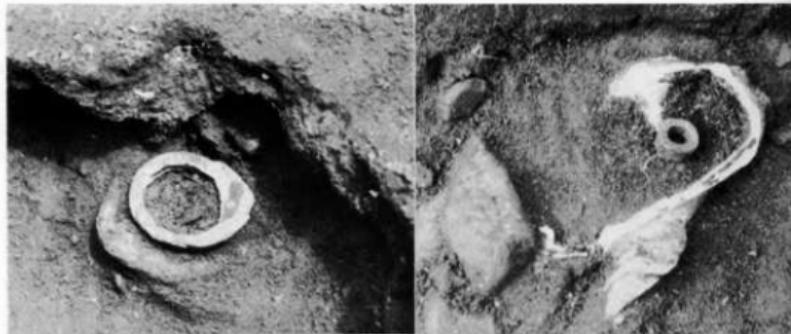
宇宿貝塚第1地点の調査



M-6・7区住居址を被覆する礫群



M-6・7区石組住居址



左上：第2貯蔵穴より出土貝輪
右上：M8区 夜光貝中出土の
魚骨垂飾
中：M8区6層出土状況
下：石組住居址内一括土
器出土状況

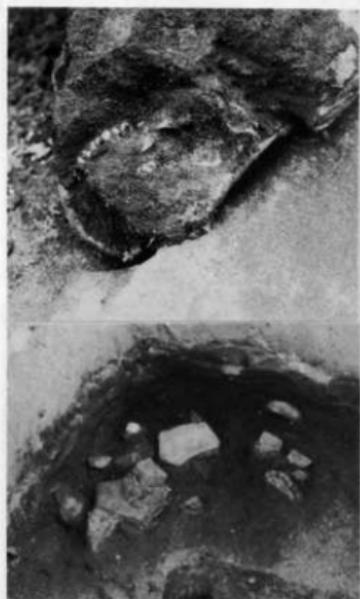




第3貯藏穴 土器・貝・骨等出土



上：第2貯藏穴 下第3貯藏穴



左上：玉類出土状況
(頭骨裏面より写す)

左中：1-7区石組遺構

左下：Aトレンチ発掘
状況

右：M-8区溝状遺構
断面



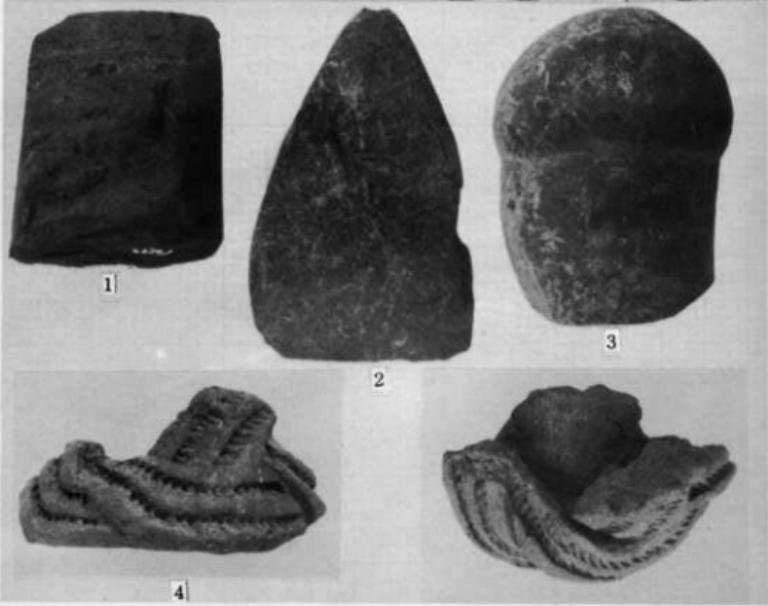
M-5区集石遺構内土器出土状況



M 5-1区集石遺構内 市来式土器出土状況

圖版 7

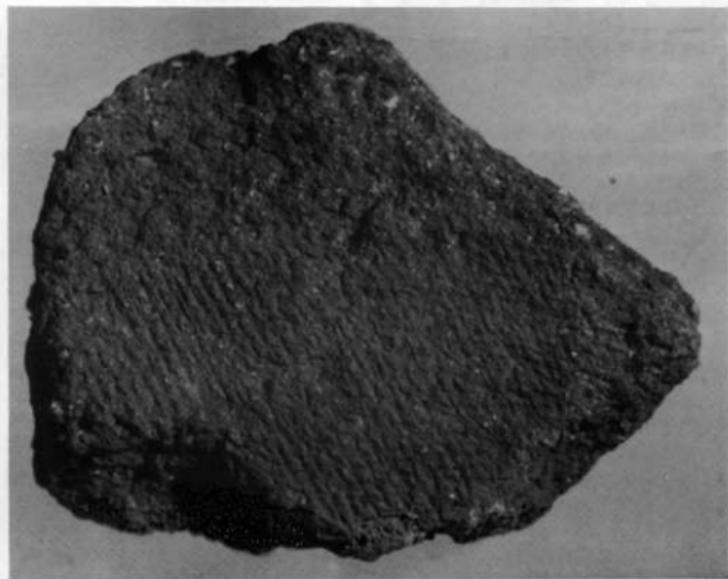
M-5 区 7 層
集石遺構



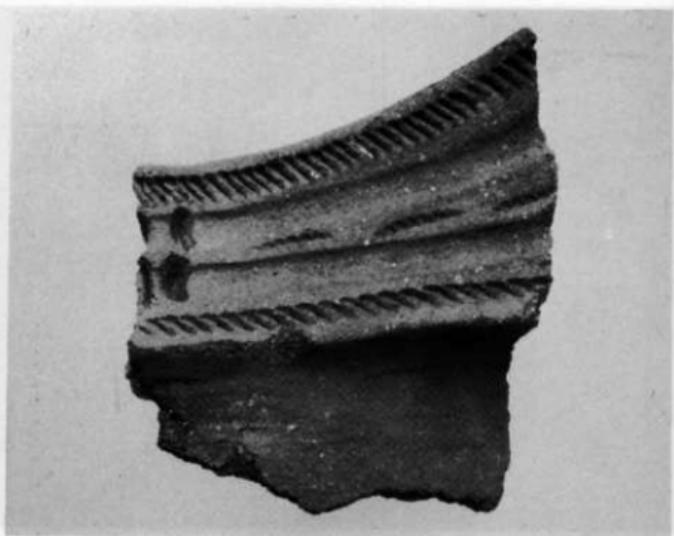
1 : ノミ形石斧 2 : 磨製小形石器 3 : 石棒 4・5 面縄束洞式器台



人骨着装の青色ガラス小玉（黒点：気泡、線：巻痕）



M-10区出土の布目痕土器



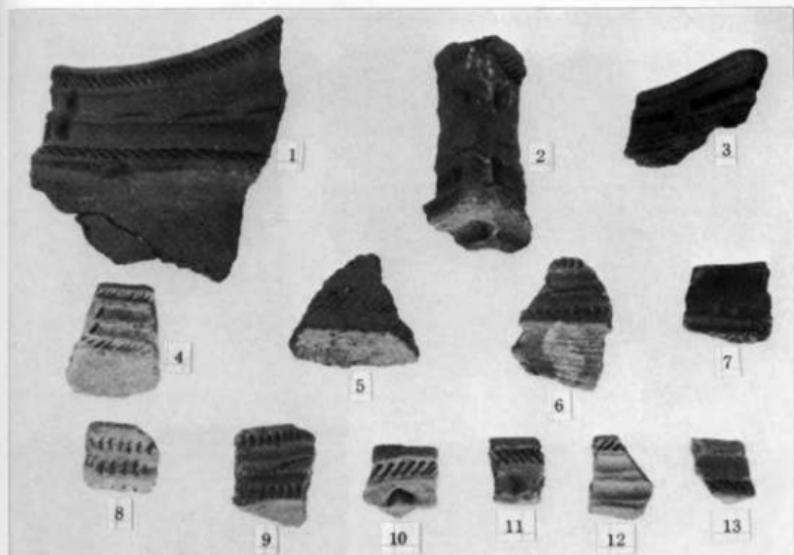
M 5 - 区集石遺構出土市来式土器



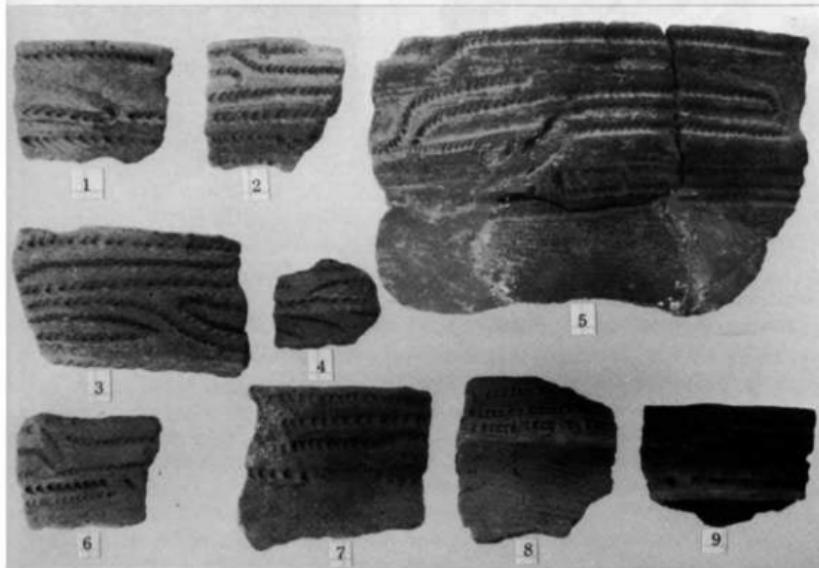
M - 5 区集石遺構出土面繩東洞十市來の土器

圖版

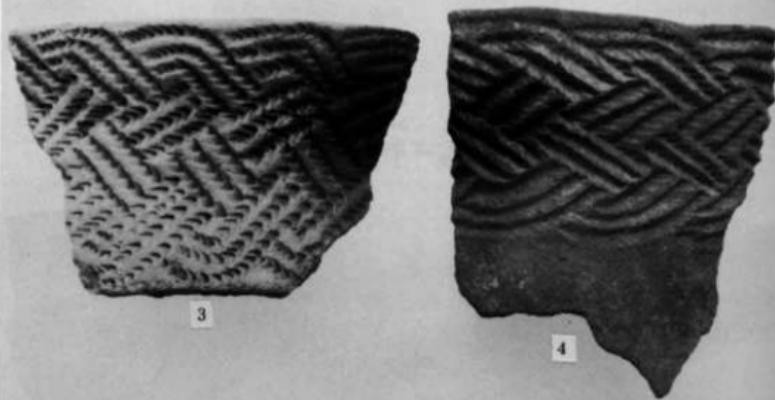
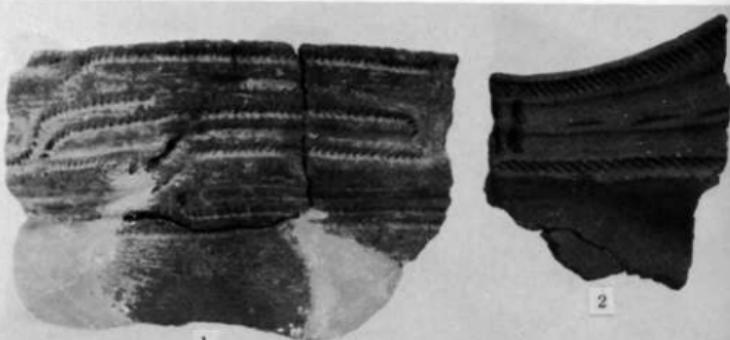
10



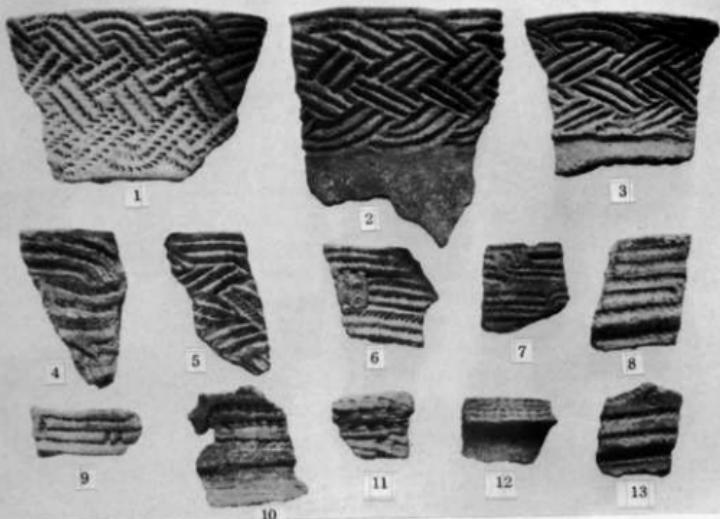
3 : 面繩東洞十市來 1 • 2 • 4 ~ 13 : 市來式



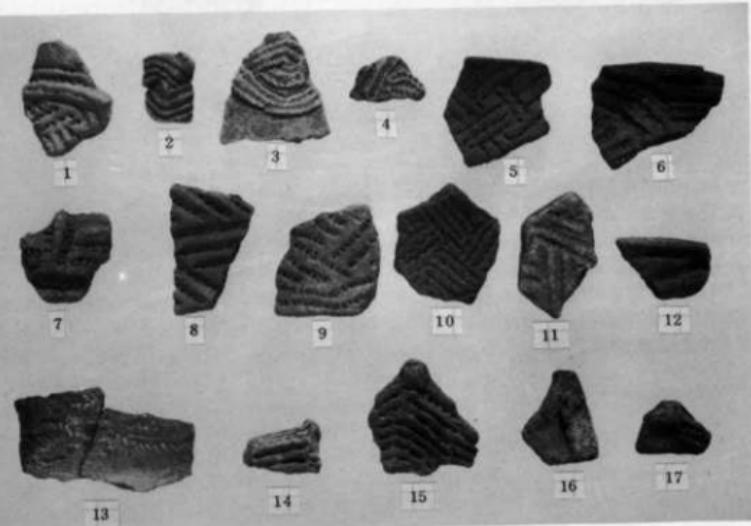
3 : 面繩東洞十市來 1 • 2 • 4 ~ 13 : 市來式



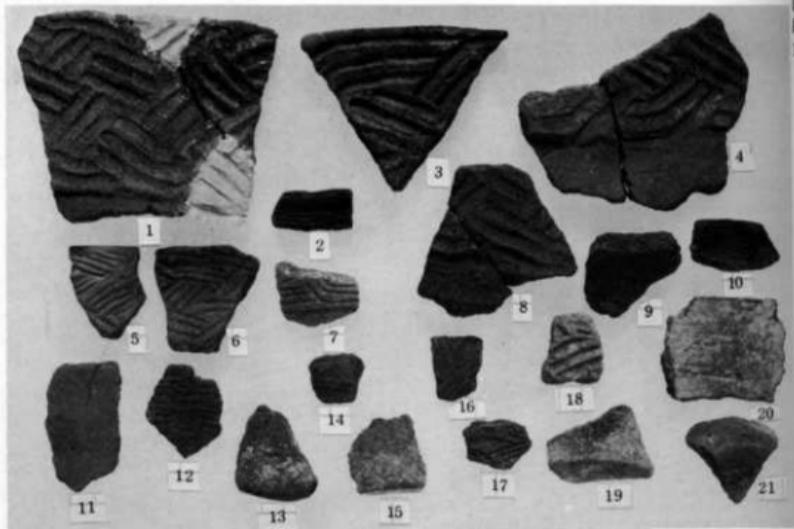
市來式・面縄束洞式・喜念 I 式



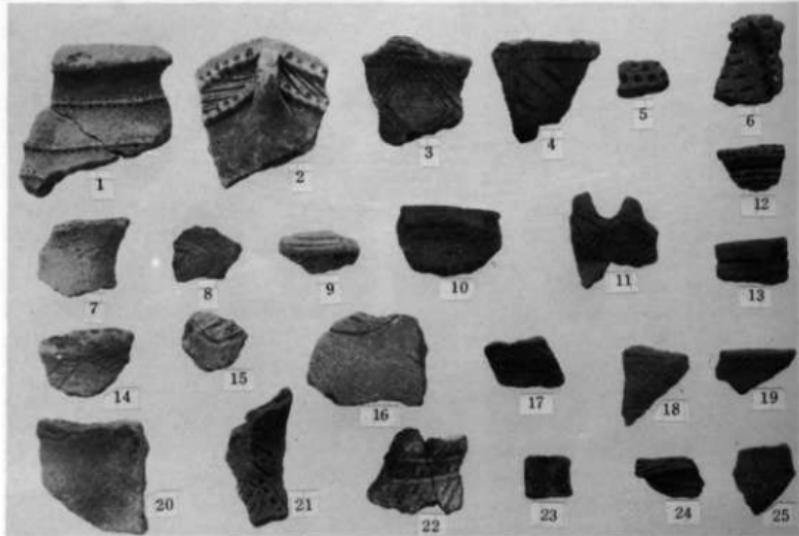
面繩東洞式



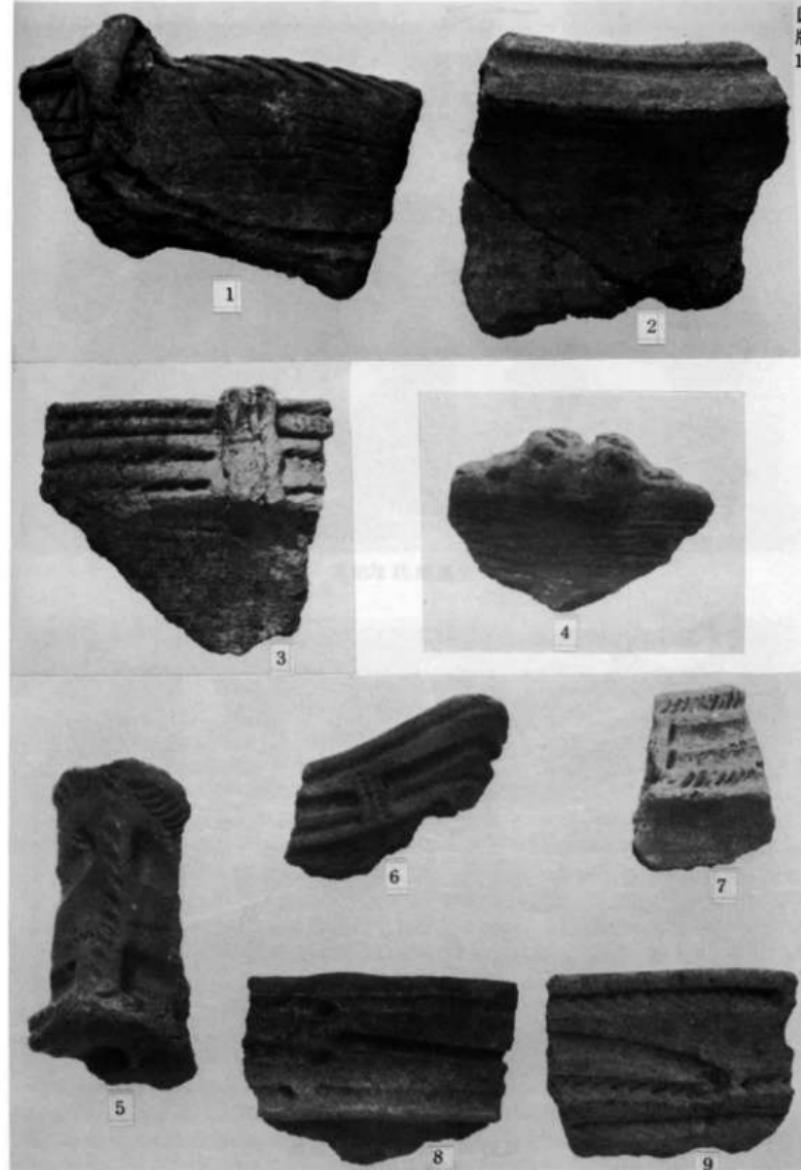
面繩東洞式



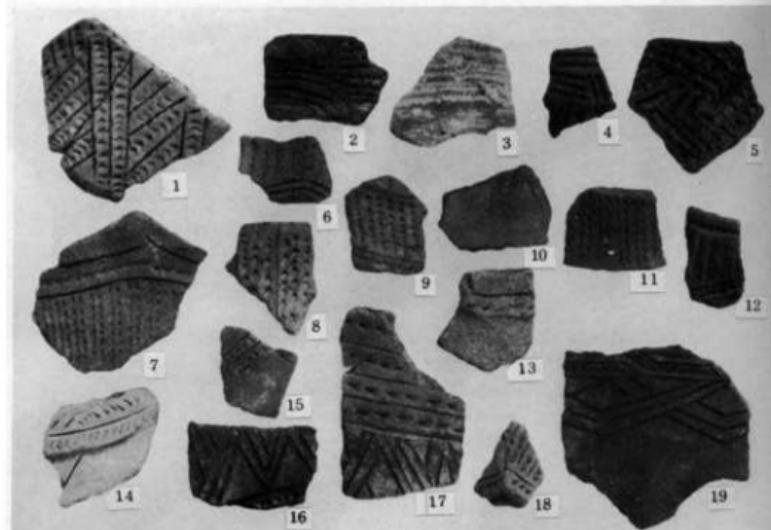
第3貯藏穴出土器



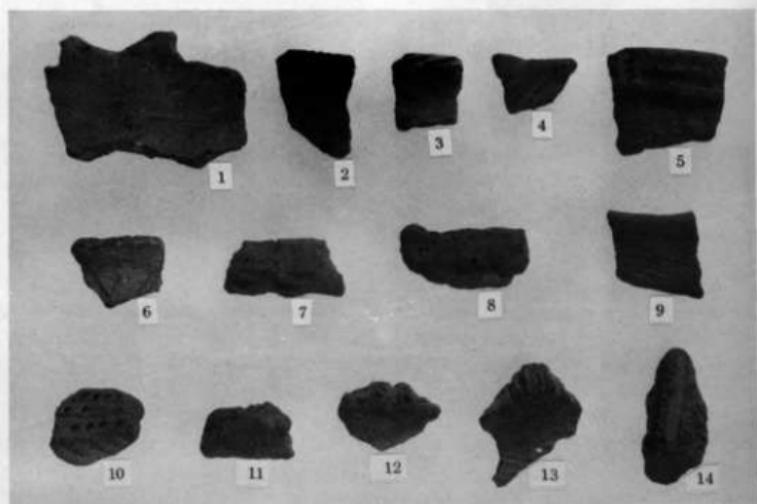
喜念 I 式 他



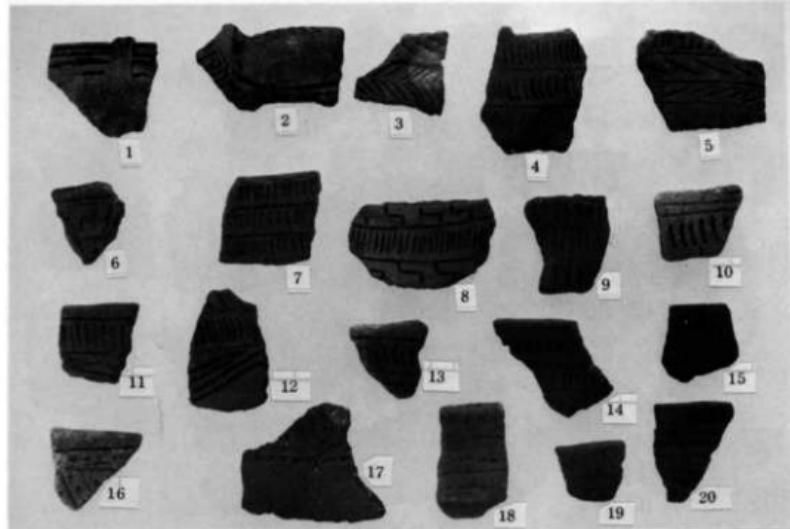
1~3: 頸市來式 5·7: 市來式 6·8·9: 面繩東洞十市來 4: 把手付



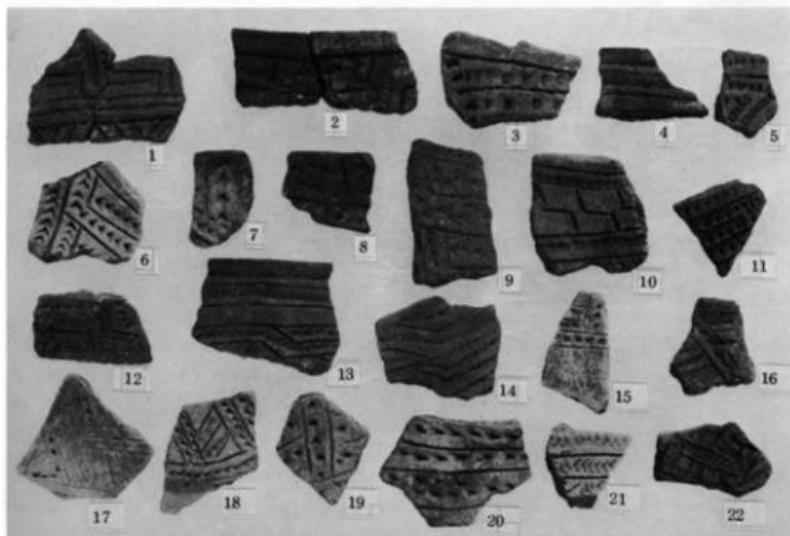
嘉德 I式



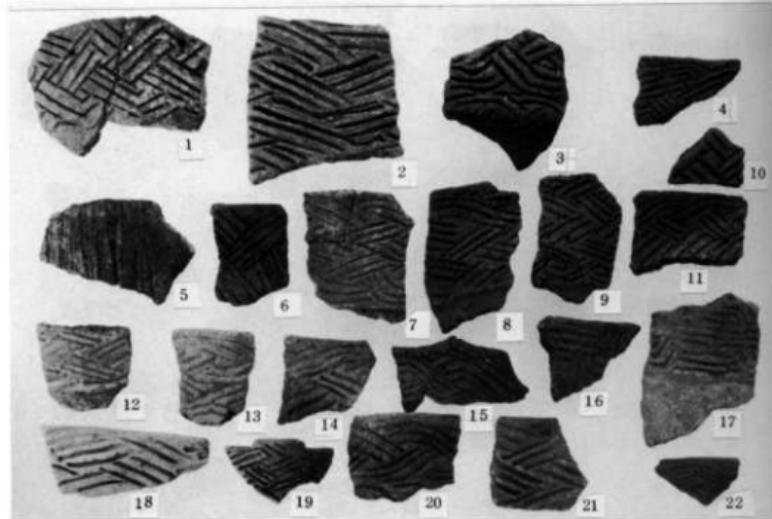
草野式・台付皿形土器他



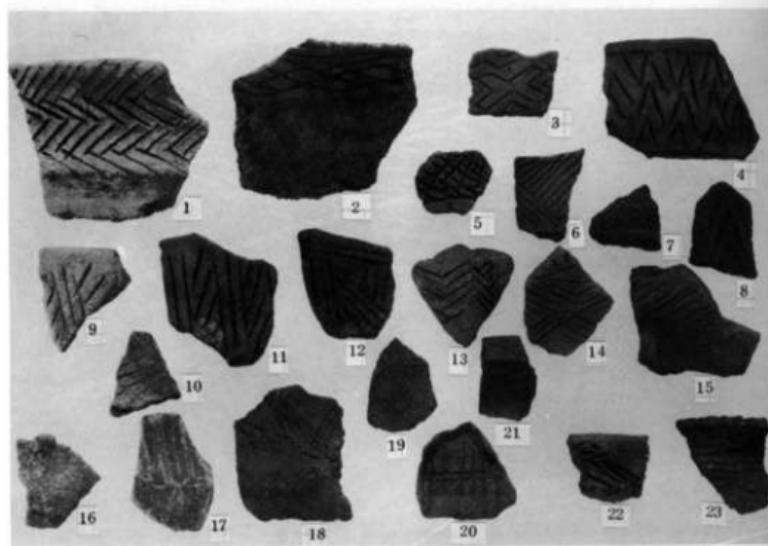
嘉德 I 式 A、全 B



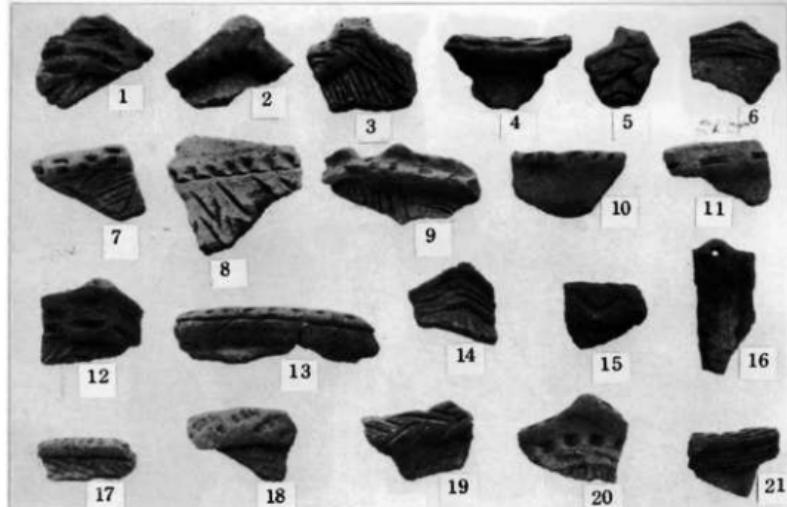
嘉德 I 式 A



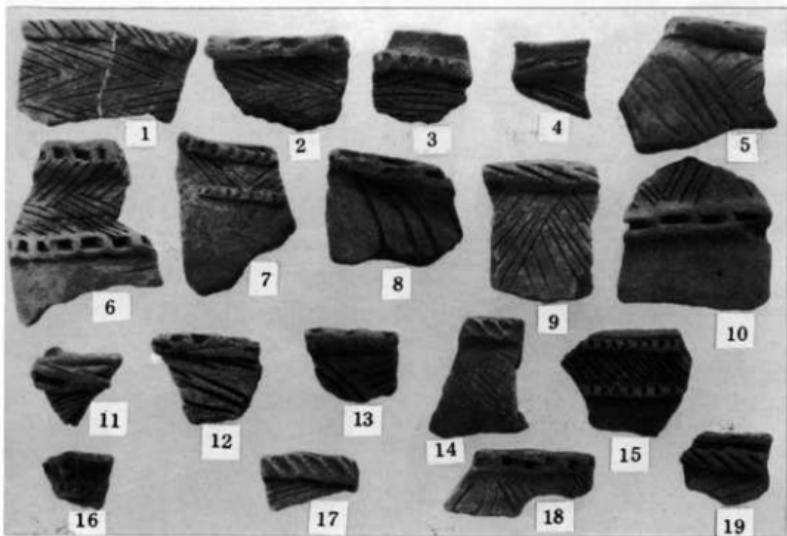
嘉德 II 式



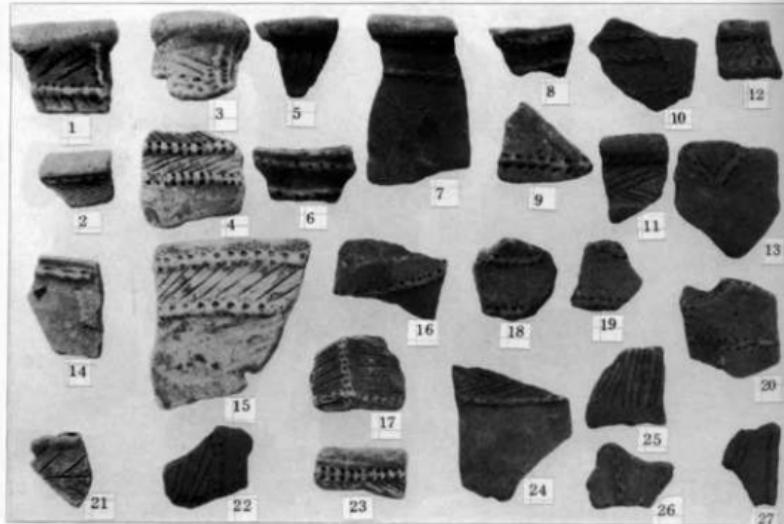
嘉德Ⅱ式他



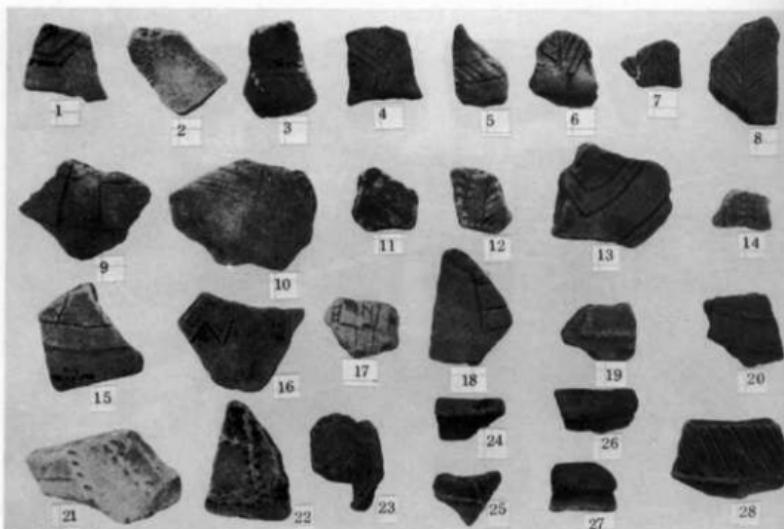
面繩西洞式他



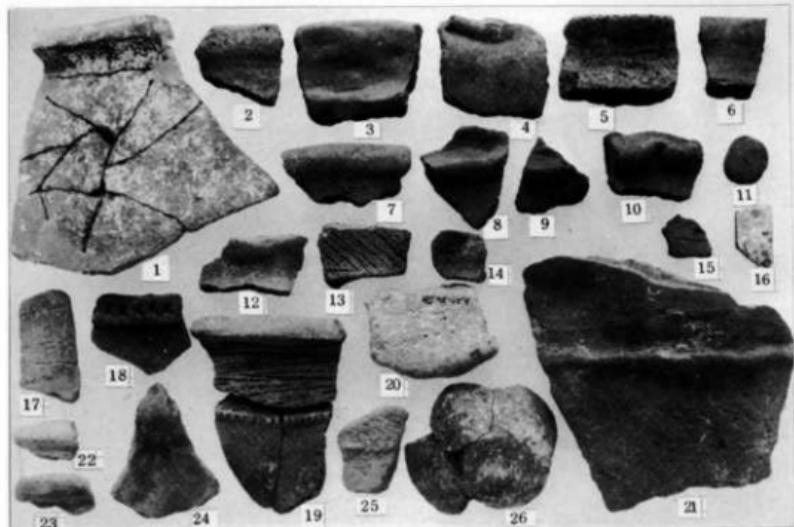
面繩西洞式



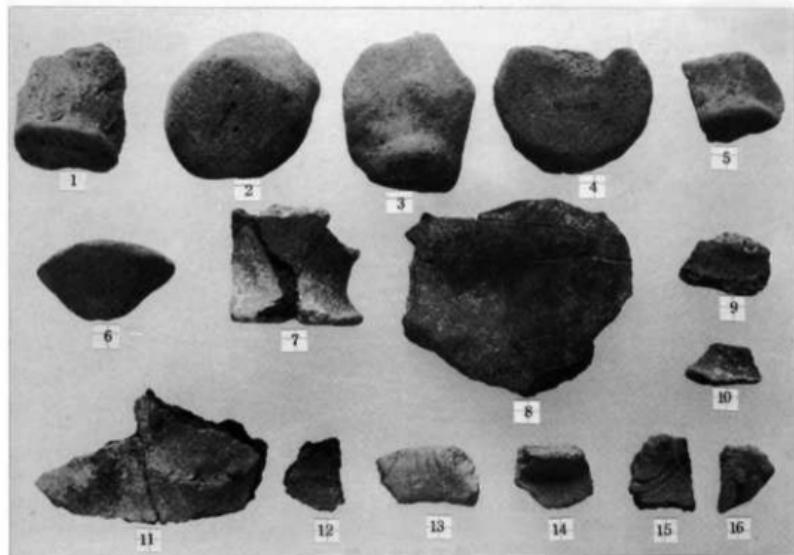
喜念 I 式



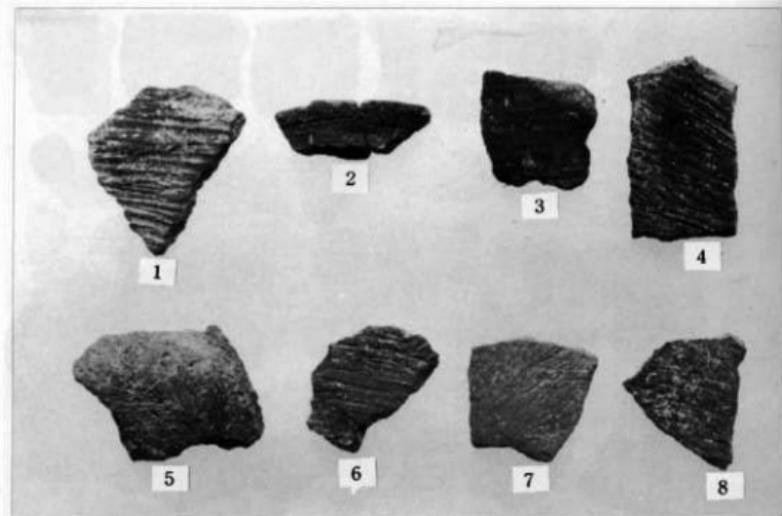
喜念 I 式



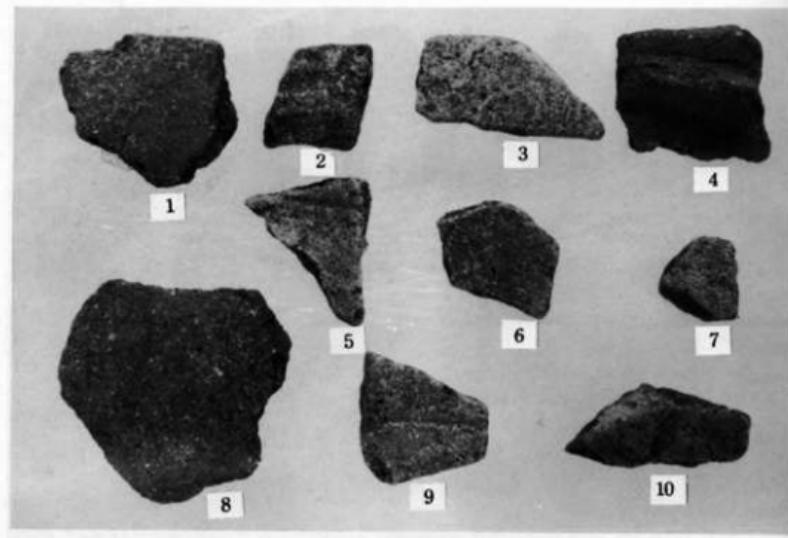
Cトレンチの土器 3~6、8~10、21:弥生式土器



大瀬の土器 弥生式

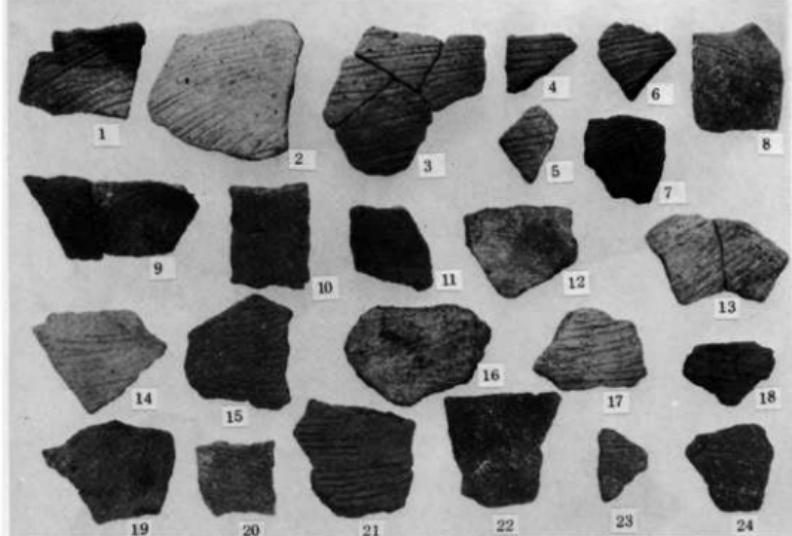


M-5区 8層の土器

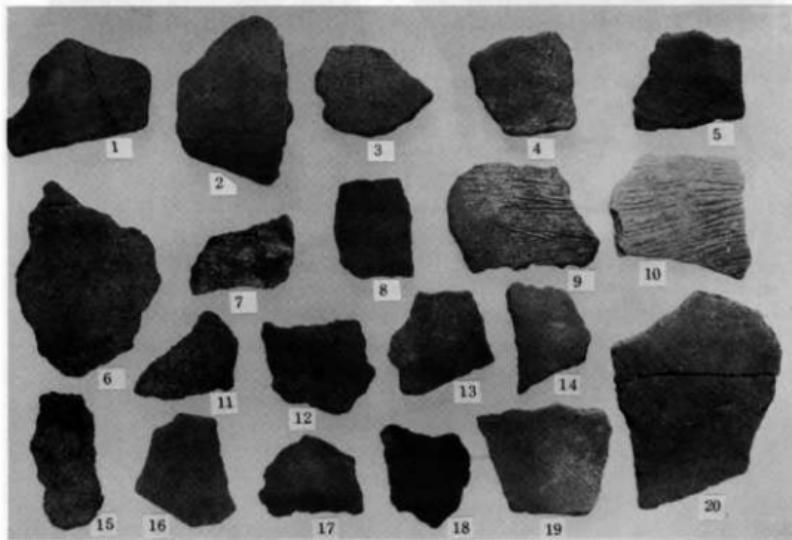


滑石入り土器

22



条痕ある土器



条痕ある土器



1



2



3



4



5

宇宿貝塚出土の縄文式土器（中期を下らないと思われる）



1



2



3



4

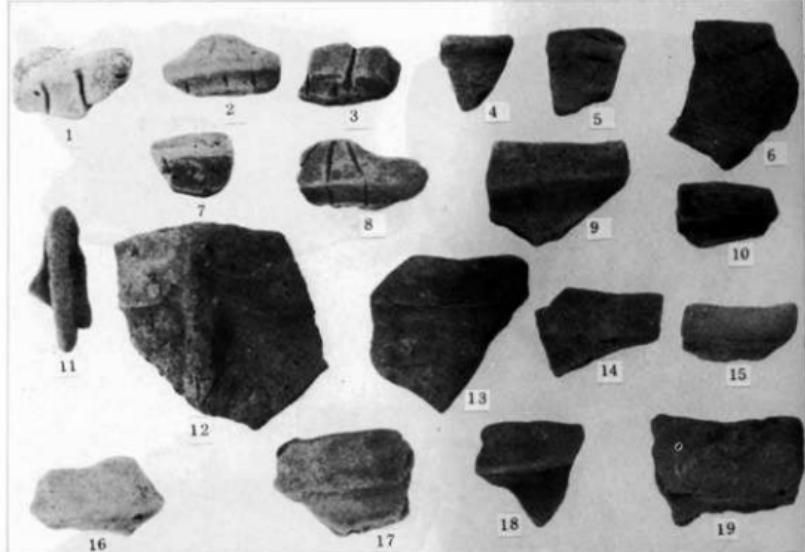


5

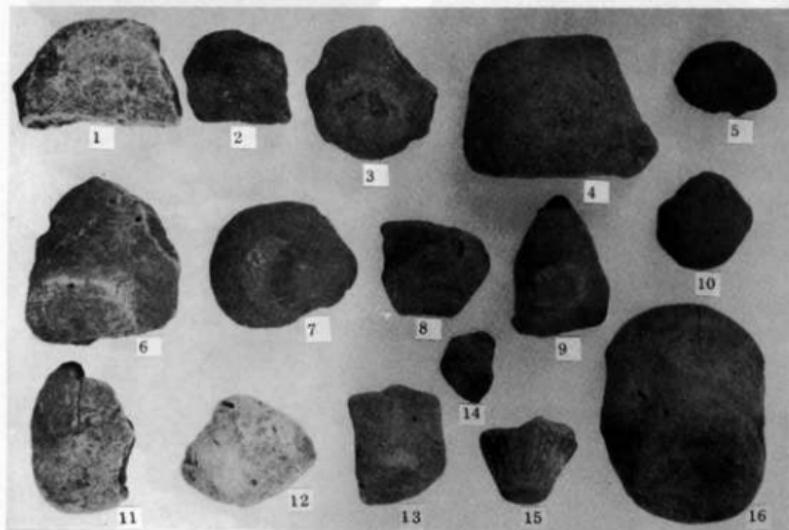


6

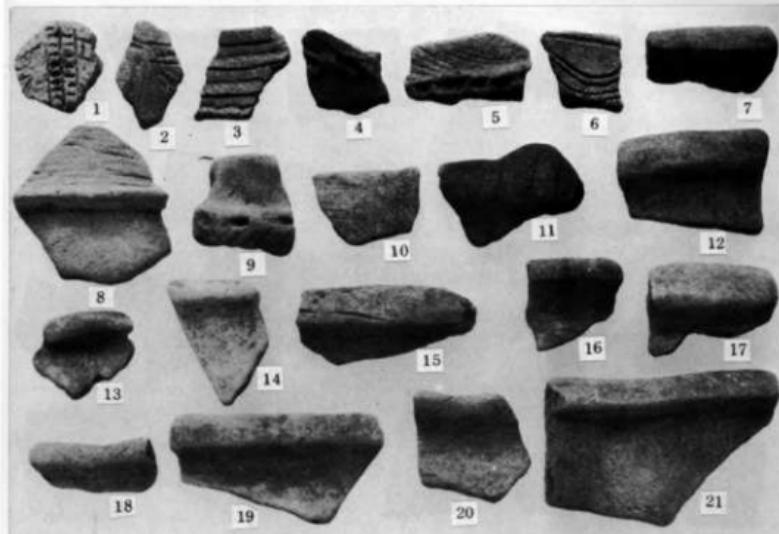
1 • 2 • 6 宇宿上層式 3 • 4 • 5 : 漸生式



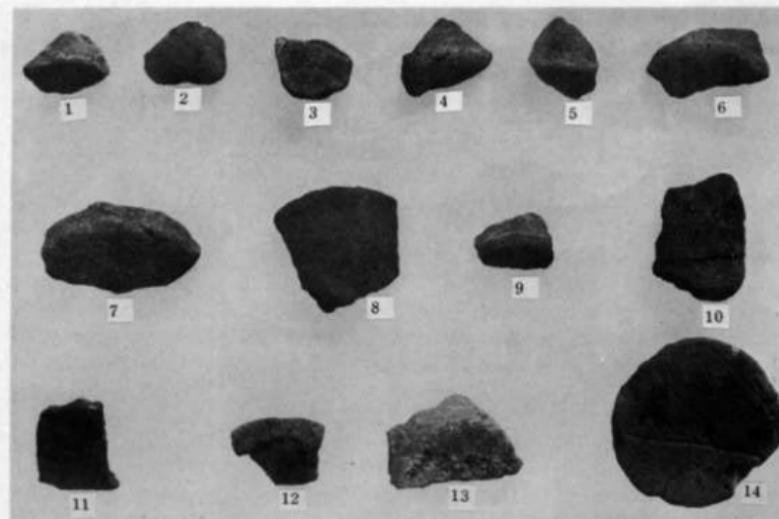
宇宙上層 B 式



土器底部



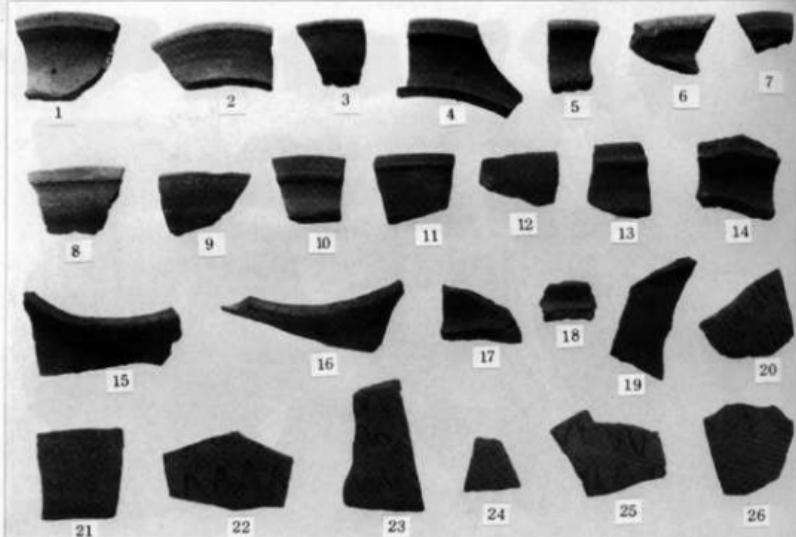
宇宙上層式 他



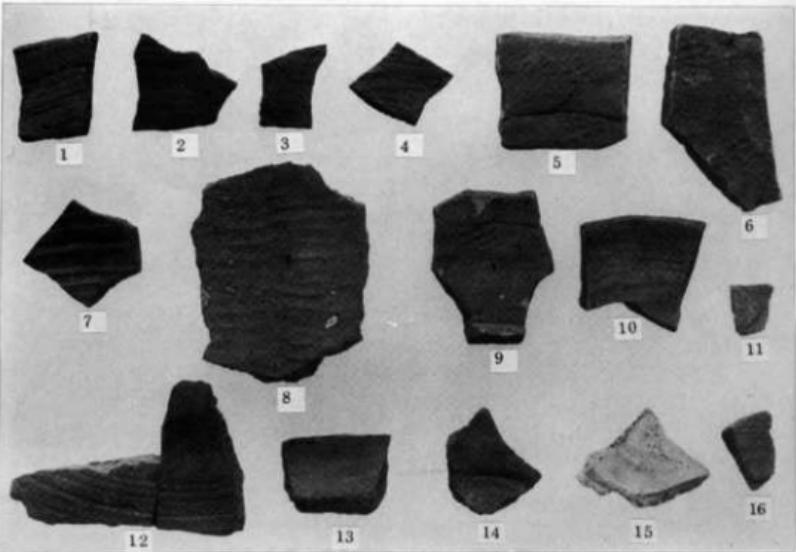
土器底部 14：木葉圧痕(兼久式)

圖版

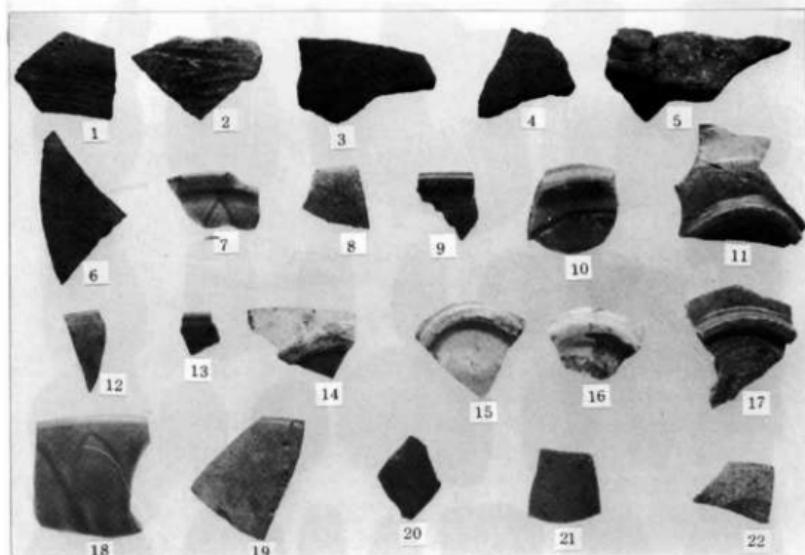
27



須惠器



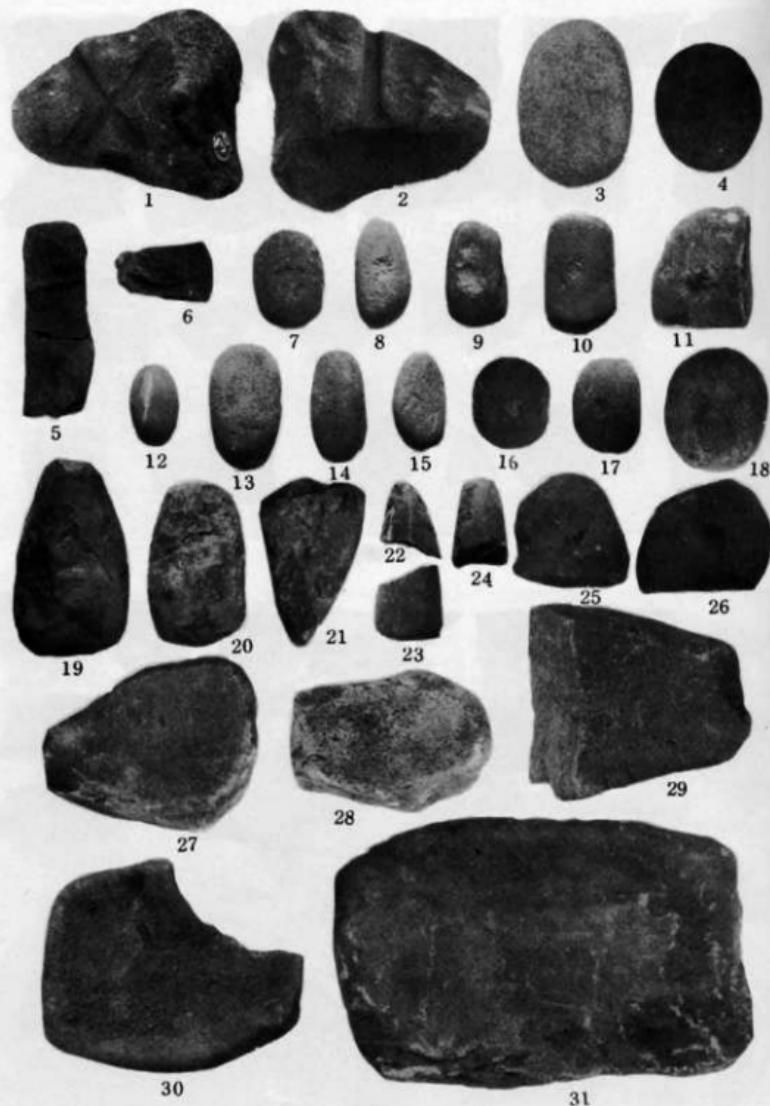
須惠器



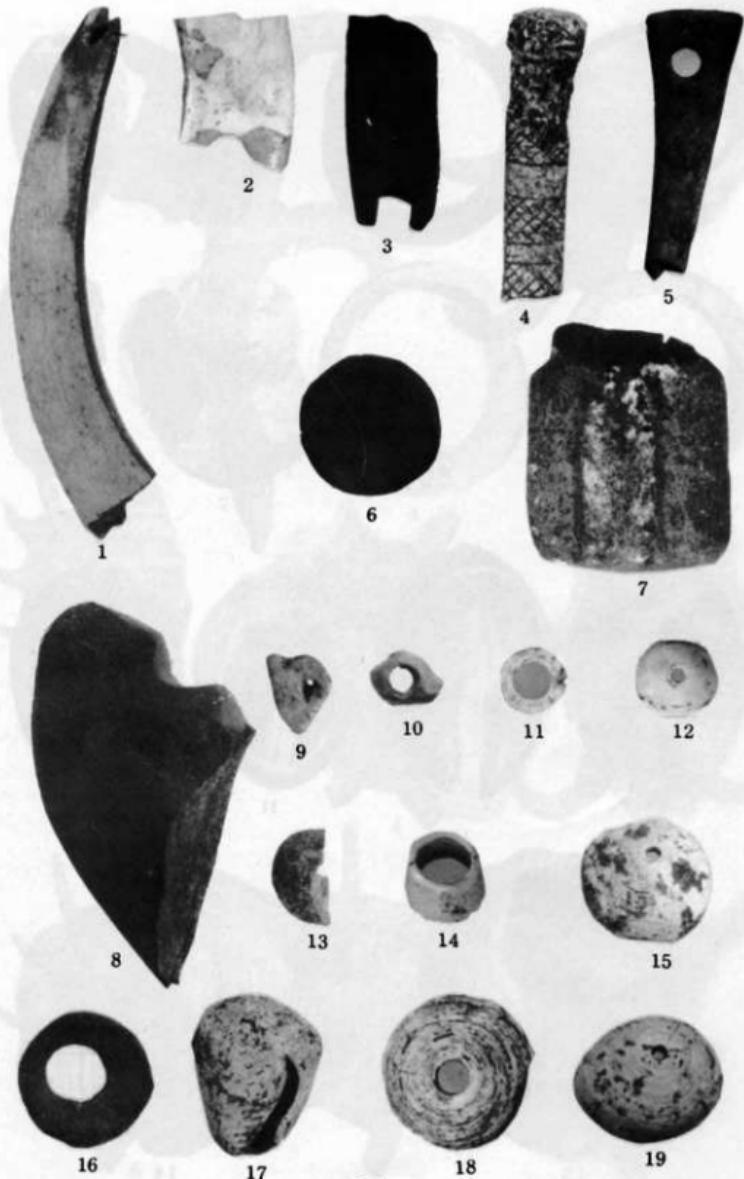
須惠器 1 ~ 6 青瓷 7 ~ 22



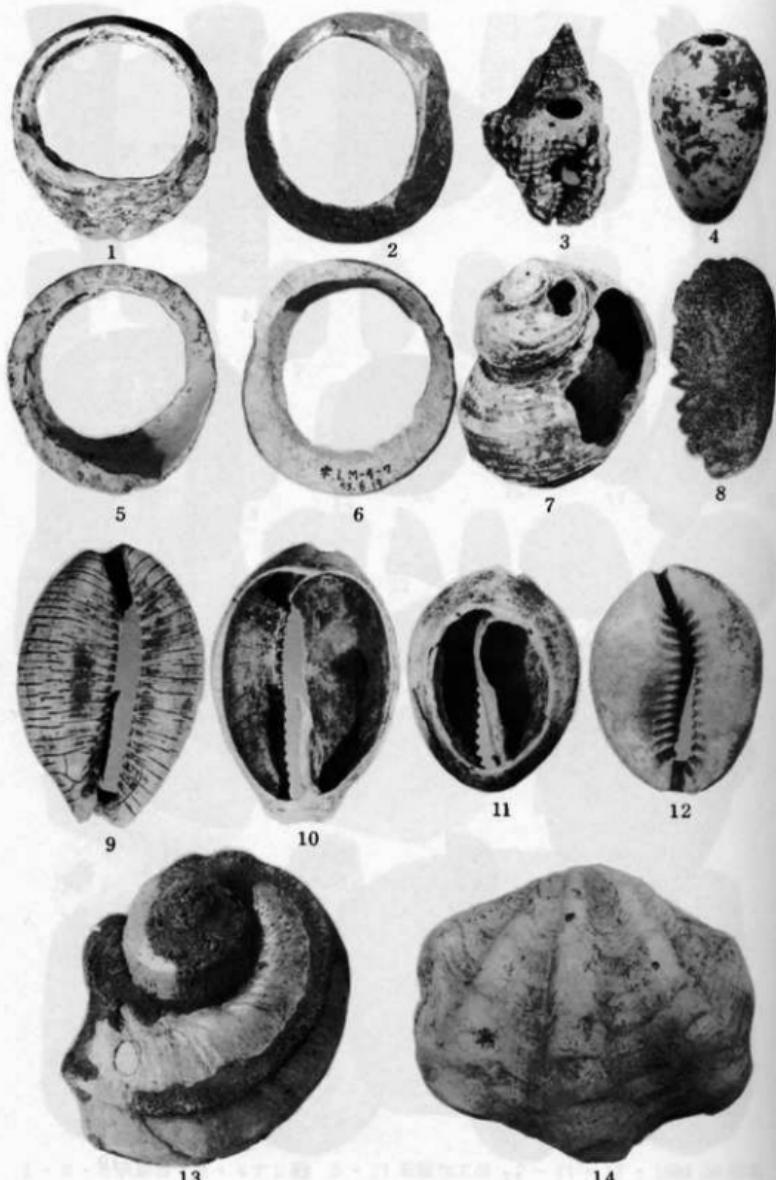
青瓷 2 ~ 3 ~ 4 白瓷 1 ~ 5 ~ 9 ~ 15 染付 10 ~ 14 ~ 16 ~ 30



1・2・6 研磨器 3・4 すり石 5・21 石製加工品 7～11・17・18・26 凹石
19～24 石斧 27～31 石皿



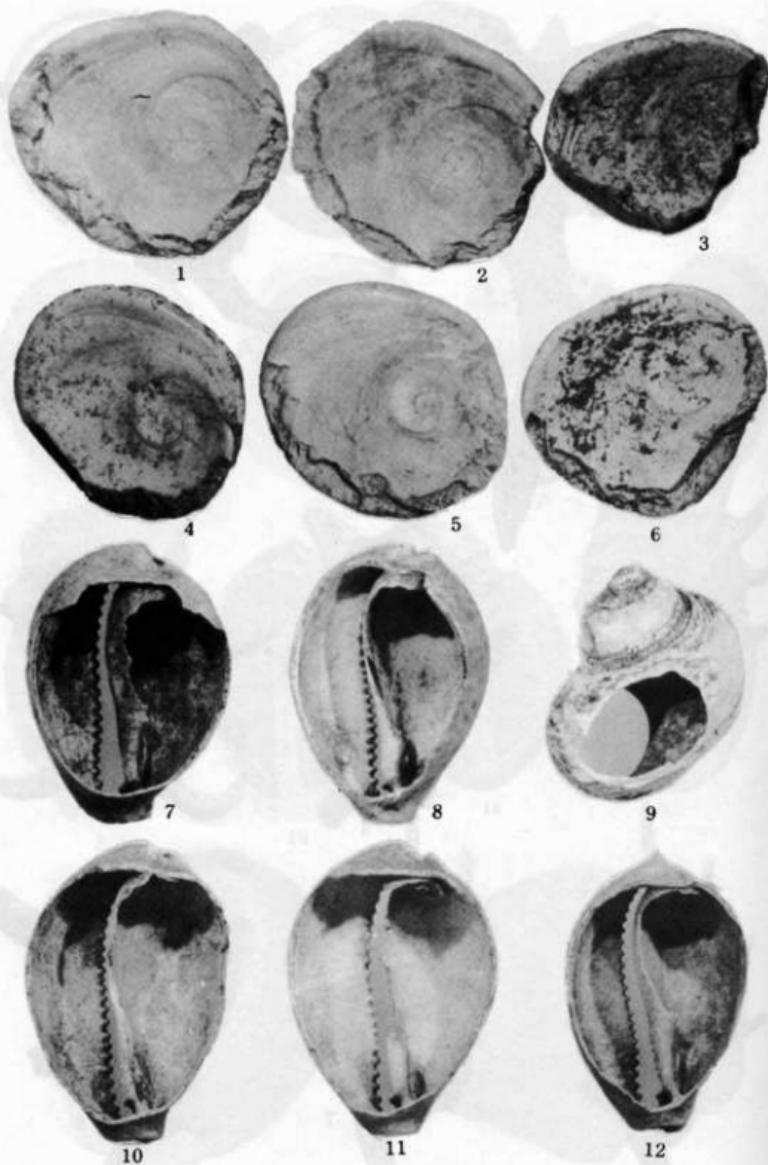
垂飾



1・2：貝輪 5・6：同裏 3・4：研磨穿孔の貝 7・11：穿孔の貝 12：穿孔の貝裏
8：加工珊瑚礁 9：線刻貝 10：同裏 13：穿孔した夜光貝 14：1部を磨いたシャコ貝



1 : スイジガイ貝輪 2 ~ 8 : 穿孔貝 4 : 管状棘端部研磨



1~6:貝斧 7~12:穿孔した貝

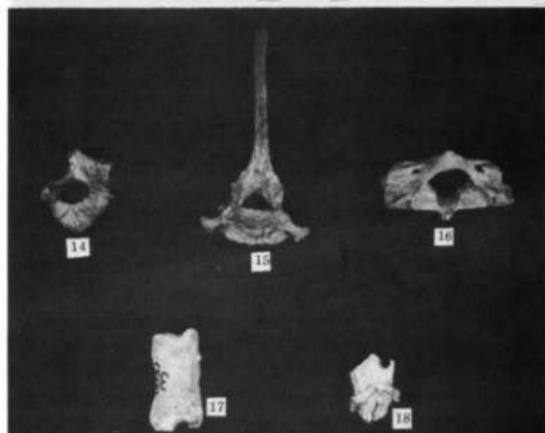
写真Ⅰ

宇宙貝塚より出土
した猪の骨

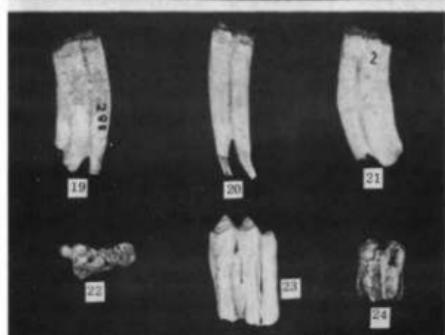


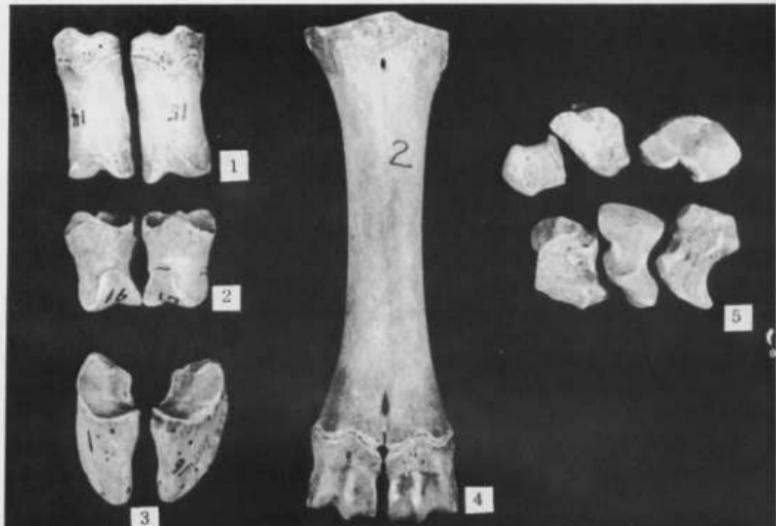
写真Ⅱ

宇宙貝塚より出土した猪・
牛の骨および鹿の骨



写真Ⅲ 宇宙貝塚より出土した
動物の骨





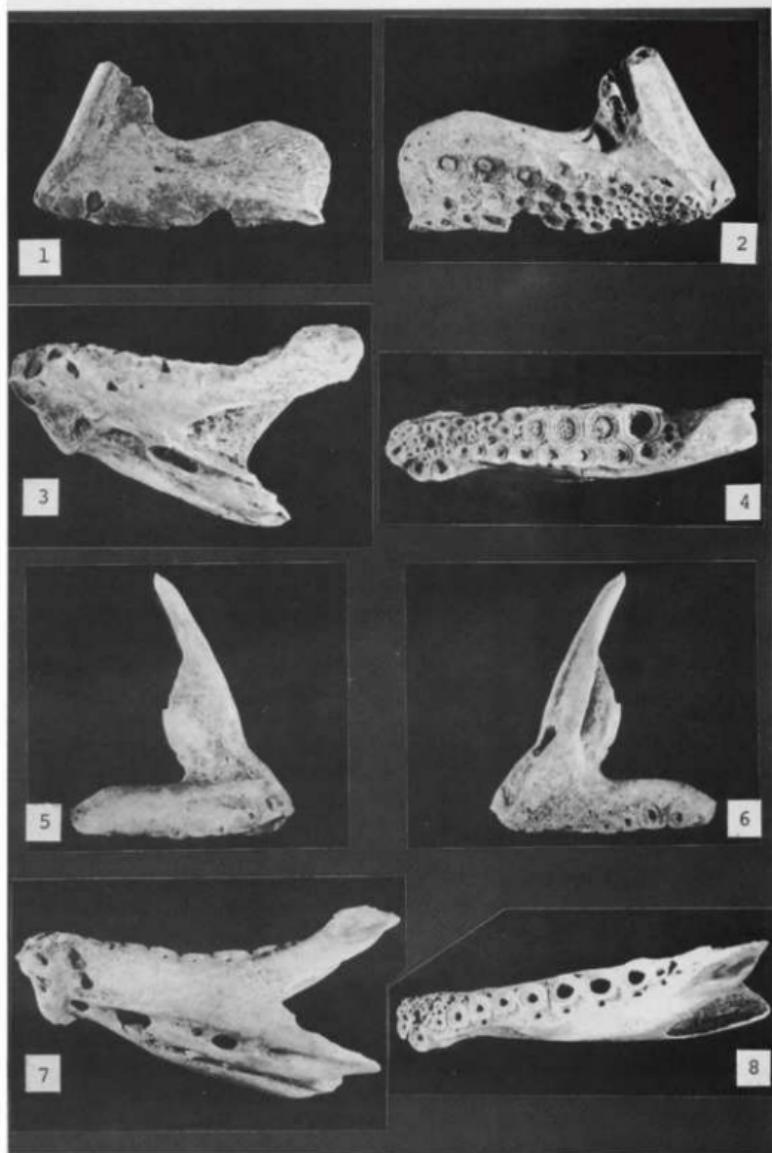
写真IV 宇宿貝塚より出土した牛の骨

- 1 第3第4指基節骨(左) 2 第3第4指中節骨(左) 3 第3第4指末節骨(左)
 4 中手骨(左) 5 手根骨一式(左) (1~5すべてM-19-1より出土)



写真V 宇宿貝塚より出土した牛の骨

- 6 第3第4趾基節骨(左) 7 第3第4趾中節骨(左) 8 第3第4趾末節骨(左)
 9 中足骨(右) 10 跟骨(左) 11 趾骨(左) 12 第2第3足根骨(左)
 13 中心第4足根骨(左) (6~13すべてM-19-1より出土)



魚骨

9



10



11



12



13



14



15



魚骨



16



17



18



19



20



21

宇宿貝塚出土の人骨*

松下孝章***

はじめに

奄美大島の笠利町にある宇宿貝塚から2体の人骨が出土した。1体はきわめて保存良好な成人骨で、他の1体も比較的保存の良い新生児骨と推測されるものであった。

この2体の人骨は別項でも述べられているように、考古学的所見から宇宿上層式時代（今から約2000年前）に属するものである。

奄美大島からほぼ完全な古人骨が出土したのは今回が初めてであり、南島の形質人類学の研究において貴重な資料となるものであり、詳細な観察および計測を行なった。また本人骨の特徴を明らかにするために、当教室保管の弥生女性骨のうち北九州より出土した二塚山人骨（松下、他、1976）および西北九州より出土した同時代人骨（内藤、1971）と比較すると共に、南九州の例として男性例ではあるが、広田弥生人骨（金関、1959）の成績を参考として検討したので、その結果を報告したい。

資料

1号人骨

頭蓋骨については蝶形骨および筋骨は欠損していたが、その他の脳頭蓋および顎面頭蓋はほぼ完全に残っていた。また M_2 を除くすべての歯が残存していた。

四肢骨についても、保存状態は良く、両甲骨、肋骨および胸骨が破損していたが、その他の骨はほぼ完全に残存していた。

1号人骨は寛骨や頭蓋骨などの形態的特徴と縫合の癒合状態、歯の咬耗度および恥骨結合面の状態から、壮年初期の女性骨と推定される。

2号人骨

幼若骨のため保存状態は1号人骨程良くなかった。頭蓋骨は1体分残っていたが、部分的に破損がひどく、復元は不可能であった。

四肢骨は大腿骨、脛骨、腓骨および上腕骨の骨幹は左右ともによく残っていたが、橈骨および尺骨は左側のみが残存していた。

2号人骨は、出土状況ならびに残存していた四肢長骨の大きさから新生児の骨と推定される。

所見

1号人骨

* 本報告の要旨は第34回日本解剖学会九州地方会において発表した。

** MATSUSHITA TAKAYUKI 長崎大学医学部解剖学第2教室（主任 内藤芳篤教授）

頭蓋骨

頭蓋骨の主な計測値は表1に示すとおりである。

(1) 脳頭蓋

上面觀は Rhomboides に属しており、3主縫合は疎で癒着は内板にも外板にも認められない。頭頂結節および前頭結節は比較的よく発達しているが、乳様突起は小さく、外後頭隆起の発達もきわめて悪い。

頭骨最大長は 17.0 mm, 頭骨最大幅は 14.9 mm, バジオシ・ブレグマ高は 13.0 mm で、頭骨長幅示数は 8.7.6.5 となり、hyperbrachycran (過短頭) に属し、長高示数は 7.6.4.7, 幅高示数は 8.7.2.5 で、それぞれ hypsikran, tapeinokran に属している。

次いで宇宿弥生人と二塚山、西北九州弥生人との比較を行なってみると、頭骨最大長は二塚山弥生人の 17.6.4.3 mm (7例) および西北九州弥生人の 17.8.0.7 mm (15例) よりも小さく、頭骨最大幅は二塚山弥生人の 13.9.6.7 mm (6例) および西九州弥生人の 13.9.2.7 mm (15例) よりも大きく、従って頭骨長幅示数は二塚山弥生人の 78.5.7 (5例) および西北九州弥生人の 78.2.3 (15例) よりも大きな示数值を示しており、頭型は強く短頭に傾いている。

また広田弥生人男性の頭骨長幅示数は 8.7.8 (8例) で、過短頭を呈しており、本人骨の長幅示数ときわめてよく近似した数値を示している。

Tabelle 1 Schädel (mm)

Gehirnschädel	Gesichtsschädel	
1. Größte Hirnschädellänge	170	45. Jochbogenbreite (135)
8. Größte Hirnschädelbreite	149	46. Mittelgesichtsbreite 99
17. Basion-bregma-Höhe	130	47. Gesichtshöhe 112
8/1 Längen-Breiten-Index	87.65	48. Obergesichtshöhe 63
17/1 Längen-Höhen-Index	76.47	47/45 Gesichtsindex(K) (82.96)
17/8 Breiten-Höhen-Index	87.25	48/45 Obergesichtsindex(K) (46.67)
23. Horizontalumfang des Schädels	506	47/46 Gesichtsindex(V) 113.13
24. Transversalbogen	317	48/46 Obergesichtsindex(V) 63.64
25. Mediansagittal-Bogen	368	72. Ganzprofilwinkel 79
		73. Nasaler Profilwinkel 82
		74. Alveolar Profilwinkel 69

(2) 顔面頭蓋

眉上弓の発達は弱く、眉間部は扁平で、鼻根部の陥凹も弱いが、前頭部はよく膨隆している。

顔面部の幅径については、頬骨弓幅が (13.5 mm), 中顎幅は 9.9 mm で、高径に関しては、顎高 11.2 mm, 上顎高は 6.3 mm である。従ってコルマン氏の顔示数および上顎示数はそれれ (82.96), (46.67) で、ウイルヒー氏の顔示数、上顎示数はそれれ 113.13, 63.64 となる。

顔面頭蓋の比較では、頬骨弓幅は二塚山弥生人の 13.2.6.7 mm (6例) および西北九州弥生人の 13.0.1.7 mm (6例) よりも大きく、また中顎幅は二塚山弥生人の 10.0.1.7 mm (6例) よりも小さく、西北九州弥生人の 9.5.9.1 mm (11例) よりは大きい。顎高、上顎高については両者ともに、二塚山弥生人の 11.5.8.0 mm (5例), 6.8.1.4 mm (7例) よりは小さく、西北九州弥生人の

1 0 4.8 9 mm (9例), 6 0.9 2 mm (12例)よりも大きい。コルマン氏の顎示数および上顎示数は二塚山弥生人の 8 6.1 2 (4例), 5 0.6 2 (6例)よりも小さく、西北九州弥生人の 8 1.7 0 (6例) 47.64 (6例)に近似しており、ウイルヒー氏の顎示数は西北九州弥生人の 1 0 9.5 0 (9例)よりも大きく、二塚山弥生人の 1 1 2.8 0 (4例)に近い数値となっているが、上顎示数は二塚山弥生人の 6 5.2 1 (5例)よりも小さく、西北九州弥生人の 6 3.4 9 (11例)とよく一致する数値である。

以上のとおり、宇宿人の頭蓋骨は短頭の傾向が強く、かつ低顎の傾向が認められる。

顎面角は、全側面角 79°、鼻側面角 82°、および歯槽側面角 69°で、やや歯槽性突頸の傾向があるがわれる。

(3) 齒

歯は上下左右ともに第三大臼歯まで萌出しているが、咬耗の程度は弱く、Broca の1度である。歯ならびは整然としているが、下顎左第三大臼歯はやや近心側へ傾いている。またカリエスが M_3 (C_8), M_2 (C_2), M_1 (C_8) にみられた。咬合型式は錐状咬合であり、風習的抜歯の痕跡は認められない。なお歯式は次のとおりである。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	$/$	M_3
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

[歯槽開放
歯齒]

四肢骨

四肢骨における主なる計測値は表2、表3、表4に示すとおりである。

(1) 上腕骨

上腕骨は左右ともにきゅしゃで、細くて短かい。三角筋粗面の発達も悪く、扁平性も全く認め得ない。

両側の最大長は 2 6 3 mm, 中央最大径は 1 8 mm, 中央最小径は 1 5 mm, 最小周は 5 0 mm であり、中央周は右 5 4 mm, 左 5 3 mm である。従って両側の長厚示数は 1 9.0 0 で、中央断面示数は 8 3.33 となる。

上腕骨右側の比較では、最大長は二塚山弥生人の 3 1 5 mm (1例) および浜郷弥生人 (未発表) の 2 6 5.0 0 mm (6例) よりも小さく、最小周も二塚山弥生人の 6 0.2 0 mm (5例) および浜郷弥生人の 5 7.2 2 mm (左9例) よりも小さい。長厚示数は二塚山弥生人の 1 7.4 6 (1例) よりは大きいものの、浜郷弥生人の 2 1.4 3 (5例) より小さく、また中央断面示数は二塚山弥生人の 7 4.4 3 (1例) および浜郷弥生人の 7 3.1 6 (6例) よりも大きい。

すなわち宇宿弥生人の上腕骨は、計測値においても観察所見とよく一致し、諸径が小さく、全体として短かくかつ細い。

(2) 大腿骨

大腿骨は左右ともに小さく、粗線の発達も不良で、柱状形成の像は全く認められず、中央部での断面型は横広ろの橢円形に近い。ただ両側ともに殿筋粗面の発達は必ずしも著明でないが、結節状の第三転子 (長さ 3 0 mm, 幅 8 mm) が認められる。

Tabelle 2

Humerus

(mm)

	Rechte	Linke
1. Größte Länge des Humerus	263	263
2. Ganze Länge des Humerus	259	259
5. Größte Durchmesser der Mitte	18	18
6. Kleinster Durchmesser der Mitte	15	15
7. Kleinster Umfang der Diaphyse	50	50
7a. Umfang der Mitte	54	53
7/1 Längendicken-Index	19.01	19.01
6/5 Diaphysenquerschnitts-Index	83.33	83.33

計測値は最大長が右 37.0 mm, 左 37.5 mm, 中央矢状径は右 22 mm, 左 21 mm, 中央横径は両側ともに 24 mm, 中央周は右 71 mm, 左 72 mm, 骨体上横径, 矢状径は左右ともにそれぞれ 28 mm, 20 mm である。従って中央断面示数は右 9.1.6.7, 左 8.7.5.0 を示し, 骨体上断面示数は両側ともに 7.1.4.3 となる。

大腿骨の比較では、最大長は二塚山弥生人の 39.1.0.0 (2例) よりも小さく、また中央周についても二塚山弥生人の 78.0.0 mm (2例) よりも浜郷弥生人の 74.7.5 (4例) よりも小さい。長厚示数は二塚山弥生人の 18.8.5 (1例) よりは大きく、

Tabelle 3

Femur

(mm)

	Rechte	Linke
1. Größte Länge des Femur	370	375
2. Ganze Länge des Femur	368	373
6. Sagittaler Durchmesser der Diaphysenmitte	22	21
7. Transversaler Durchmesser der Diaphysenmitte	24	24
8. Umfang der Diaphysenmitte	71	72
9. Oberer transversaler Diaphysendurchmesser	28	28
10. Oberer sagittaler Diaphysendurchmesser	20	20
8/2 Längendicken-Index	19.29	19.30
6/7 Index des Diaphysenquerschnitts der Mitte	91.67	87.50
10/9 Index des oberen Diaphysenquerschnitts	71.43	71.43

浜郷弥生人の 19.62 に近い数値となっている。中央断面示数は二塚山弥生人の 8.846 (2例) よりは大きく、浜郷弥生人の 10.249 (4例) よりは小さい。骨体上断面示数は二塚山弥生人の 7.766 (10例) および浜郷弥生人の 7.796 (8例) よりも小さく、骨体上部に弱い扁平性が認められる。

すなわち、宇宿人大腿骨においても長径、周径等が小さく、柱状形成の傾向も認められない。

(3) 脛 骨

脛骨は上腕骨、大腿骨などと同様に比較的細くて短かく、扁平性も弱く、後面の稜形成なども見られない。

計測値は最大長が右 316 mm, 左 320 mm, 全長は右 309 mm, 左 312 mm, 中央最大径は両側ともに 23 mm, 中央横径は右 18 mm, 左 19 mm, 中央周は右 65 mm, 左 66 mm, 最小周は左右ともに 61 mm で、長厚示数は右 19.74, 左 19.55 を示し、中央断面示数は右 78.26, 左 82.61 となる。

脛骨の比較では、最大長は二塚山弥生人の 331.00 mm (2例) および浜郷弥生人の 317.00 mm (5例) よりも小さく、最小周も二塚山弥生人の 69.38 mm (8例) および浜郷弥生人の 66.45 mm (11例) よりも小さい。また長厚示数も二塚山弥生人の 20.95 (1例) および浜郷弥生人の 20.39 (3例) よりも小さい。中央断面示数は二塚山弥生人の 78.48 (2例) に近似し、浜郷弥生人の 73.35 (5例) より大きい。

すなわち、脛骨について上腕骨や大腿骨と同様に、短かくて細い傾向が認められ、中央断面形は右側がヘリチカの V 型で左側は II 型に属している。

Tabelle 4

Tibia

(mm)

	Rechte	Linke
1. Ganze Länge der Tibia	309	312
1a. Größte Länge der Tibia	316	320
8. Größte Durchmesser der Mitte	23	23
9. Transversaler Durchmesser der Mitte	18	19
10. Umfang der Diaphyse	65	66
10b. Kleinsten Umfang der Tibia	61	61
10b/I Längendicken-Index	19.74	19.55
9/8 Index des Querschnitts der Mitte	78.26	82.61

(4) 身長推定値

右大腿骨の最大長から PEARSON の公式を用いて、身長推定値を算出すると 144.81 cm で、藤井 (1960) の方法で算出すると 143.92 cm となる。

身長推定値は二塚山弥生人の 148.90 cm (2例) および西北九州弥生人の 147.91 cm (8例) 上

りも小さい。

特殊所見 一 椎合椎の1例 一

第2頸椎(Axis)と第3頸椎との融合が認められた。融合は椎体および椎弓の全体に見られ、歯突起がやや右側へ傾いており、棘突起は左側へ曲がっている。また椎孔も左右対称ではなく、左前方から椎弓に強い圧力がかかったような形をしており、横突孔は左が大きく、右が小さい。

2号人骨

四肢骨骨幹の残存部分の長さは表5に示すとおりである。

上腕骨の長さは右50mm、左54mmで、大腿骨は左右ともに65mm、脛骨は右57mm、左55mmで、各骨とも実際の長さは少なくともそれぞれの値を下下ることはない。この計測値を鶴吉(1976)の現代胎児骨の計測値と対比してみると、胎齢9~10ヶ月に相当する大きさである。時代的な差異を考え合せ、また出土状況を考慮すると、2号人骨は分娩後のものと考えられる。

総括および小考

1. 宇宿貝塚より宇宙上層式時代に属する保存良好な人骨2体が出土した。1体は社年初期の女性骨(1号人骨)、他の1体は新生児骨(2号人骨)と推測される。

2. 1号人骨の頭骨長幅示数は87.65で、頭型としては過短頭に属している。

3. 頭面では、蝶骨弓幅が(135mm)、中額幅は99mmで、顎高は112mm、上顎高は63mmであり、コルマン氏の顎示数、上顎示数はそれぞれ(82.96)、(46.67)で、ウイルヒー氏の顎示数、上顎示数はそれぞれ113.13、63.64であり、低顎の傾向が見られる。

4. 全側面角79°、鼻側面角82°および齒槽側面角69°であるが、観察上からも齒槽性突頭の傾向がうかがわれる。

5. 歯の咬合型式は斜状咬合で、咬耗度は弱く、歯ならびも良いが、 Mg 、 \overline{Mg} 、 $\overline{\overline{Mg}}$ にカリエスが認められた。また風習的抜歯の痕跡はない。

6. 上腕骨は短かくて細く、三角筋粗面の発達も悪く、扁平性も認められない。

7. 大腿骨も短かくて細く、粗線の発達はきわめて悪く、柱状形成の像は全く認められないが、骨体上部はやや扁平で、第三転子も認められる。

8. 脛骨も短かくて細く、また骨体の扁平性は認められない。

9. 右大腿骨からの身長推定値は144.81cm(PEARSON)で、低身長である。

10. 第2頸椎と第3頸椎とが融合しており、第2頸椎は左右非対称的な形を呈している。

11. 弥生時代人骨の研究に関しては、その大部分が九州および山口地方からの出土例であるが、金関およびその門下(牛島1954、財津1956、金関他1960)によれば、北九州の遺跡(三津、土井ヶ浜)から出土した弥生人は高顎で長身の特徴が明らかにされており、これらの形質と縄文時代人骨との差異をめぐって金関(1959、1966)の見解が述べられている。著者(1976)が報告した佐賀県二塚山弥生人骨の例も三津、土井ヶ浜弥生人骨と近似した形質を示すものであった。また内藤(1971)は西北九州の遺跡(深堀、浜郷、松原)から出土した弥生人は低、広顎で低身長であり、弥生時代人に地方的な差異が見られることを指摘している。一方南九州の出土例として、鹿児島県成川および種子島広田遺跡からの弥生人骨について、男性のみの例ではあるが、金関(1959、1966)の記載があり、これによれば両者ともに短頭であるが、前者

Tabelle 5

Diaphysenlänge

(mm)

		宇宿 2号人骨 ※		現代胎児骨 (鶴吉)		
				9 Monat		10 Monat
		R	L			
Humerus	R	50		55.60	0.32	61.26
	L	54				1.18
Femur	R	65		63.20	1.35	71.85
	L	65				1.58
Tibia	R	57		56.00	1.18	62.76
	L	55				1.40

※骨幹残存部の長径

は比較的長身であるのに後者は低身であるという。これら先人の業績を背景として、宇宿弥生女性骨の1例をみてみると、すでに述べたように、短頭、低頭で、かつ低身長であり、比較群のうち男性資料ではあるが、種子島広田弥生人骨の形質に類似点が強いものと考えられる。また本例の四肢骨は著しくきしゃである。このことは当地方弥生人に共通した形質なのか、あるいは本例のみに見られる特徴なのかは比較資料がない現在いずれとも判じ難いが、興味ある事実として指摘しておきたい。(拙筆するあたり、本人骨の研究の機会を与えていたいた河口貞徳先生、鹿児島県教育局および大島郡笠利町教育委員会ご当局に深甚な謝意を表すると共に、人骨研究についてご指導いただいた内藤芳鷹教授に感謝の意を表します。)

参考文献

- Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie Bd. 1 Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.
- 松下孝幸 他, 1976: 佐賀県東山(二塚山)遺跡出土の弥生時代人骨。人類誌, 84(4)
- 内藤芳鷹, 1971: 西北九州出土の弥生時代人骨。人類誌, 79(3)
- 金関丈夫, 1959: 弥生式時代の日本人。第15回日本医学会総会学術集会記録 第1巻
- 藤井 明, 1960: 四肢長骨の長さと身長との関係に就いて 順天堂大学体育学部紀要, 3
- 磯部憲二 他, 1973: 当教室における頸椎先天性異常 整形外科と災害外科 22(4)
- Toshio AKIYOSI, 1976: Studies on Fetal Bone Extremities and the Derivation of an Equation for Estimating Fetal Body Length. Acta med. Nagasaki, 20.
- 牛島陽一, 1954: 佐賀県東背振村三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究 人類学研究 1(3, 4)
- 財津博之, 1956: 山口県土井ヶ浜遺跡発掘弥生前期人骨の四肢長骨に就いて 人類学研究 3(3, 4)

10. 金関丈夫, 他, 1960 : 山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土弥生式時代人頭骨について
人類学研究 7 (付録)
11. 金関丈夫, 1966 : 弥生時代人 日本の考古学Ⅲ 河出書房新社
12. 永井昌文, 1958 : 鹿児島県種子島広田遺跡発掘の弥生時代人頭骨に就いて 解剖誌 33 (6)
13. 永井昌文, 1963 : 鹿児島県種子島広田遺跡出土の弥生時代人骨に就いて 解剖誌 38 (1)
14. 金関丈夫, 1955 : 人種の問題 日本考古学講座 4



1, 上 面



2, 前 面



3, 側 面

圖版 1 頭蓋骨(宇宙 1 号人骨・女性・壯年)



上 肢 骨



下 肢 骨

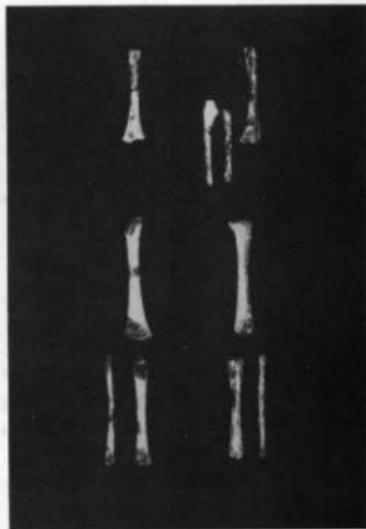


前面



後面

癒合椎(宇宿 1号人骨 女性・壮年)



宇宿 2号人骨(新生児)

図版3 宇宿 1・2号人骨

鹿児島県笠利町文化財調査報告書

宇宿貝塚

発行日 昭和54年8月

発行 鹿児島県笠利町教育委員会

印刷 商明るい窓社 鹿児島市泉町13-14

0992-24-5050
